
GAME -jin-

転寝猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GAME - jinn -

【Nコード】

N0520J

【作者名】

転寝猫

【あらすじ】

これは、交錯し作用しあう3つの物語…

水月仁は、野球一筋の中学3年生。

今は友達とのボーリングより、彼女を作ることより、とにかく野球が最優先。

というのも、俺には大切な約束があるから…

そんな彼の身に起こる、一週間の奇跡とは…

当作品は、同じ世界を舞台とする3つの独立したお話になっております。（ちなみに設定もエンディングも同一です）
日付順に全てのお話を追っていくもよし、個別のキャラのみ最後まで追っかけて他のキャラは後で一気に読みするもよし、
楽しみ方は貴方次第！

Prologue

鐘の音が聞こえる。

5時を告げる…学校のチャイム。

パシン、と心地よい音とともに、グローブに収まるボールの重み。ナイスキャッチ！と嬉しそうに笑う、姉ちゃんの頬は夕日に染まっている。

上手になっ たね、仁。

まだまだだよ…と生意気なことを言っ て、俺はまっすぐにボールを投げ返す。

全力で投げてみるけど、姉ちゃんは余裕でキャッチ。仕方ないよな。

姉ちゃんは、チームのエースなんだから。

俺達の少年野球チームに、ピッチングで姉ちゃんに敵う奴はいない。女の子にしとくのは勿体無いなあと、監督はいつも言っている。

良いなあ、と皆に言われる度に、良くなんてねえよ、と答えながら…俺は内心、誇らしくて仕方がなかった。

茜色に染まるアスファルトの道を、姉ちゃんと並んで家へ帰る。

仁は将来何になるの？

興味津々の姉ちゃんに、わざとぶっきらぼうに答える。

プロ野球選手。

本当！？と目を丸くして、ポジションは？と重ねて訊く。

…キャッチャー。

どうして？と訊かれて…別にどうしてでもないけど、と答える。

姉ちゃんはきつとピッチャーになるから、俺はキャッチャーになっ て、姉ちゃんをリードしてやるんだ。

恥ずかしいから、教えてやらないけど。

いいなあ、とつぶやく姉ちゃんに、何で？と訊く。
姉ちゃんには悲しそうな目で、夕焼けの空を見上げる。
私、女の子だから…プロ野球選手にはなれないもん。
そんなことねえよ。

姉ちゃん男より上手いんだもん、絶対なれるよ。

俺が言うつと。

本当！？とまた目を丸くして、嬉しそうに微笑んだ。
ありがとう…仁。

夕日に染まったあの笑顔。

もう遠い遠い所に行ってしまったけど…

俺の胸の一番奥には、今も大切にしまっている。

12月19日

終礼が終わった。

起立、礼！の合図で、クラスメイト達は週末の空に解放されていく。

「おい仁！これからボーリング行かね！？」

友達の浮き浮きした問いかけに、ごめん、と答える。

「俺、今から部活だから」

何だよお、と不満そうに別の友達が口を尖らせる。

「中3の冬なんだし、もう引退なんだと思ってたぜ」

「んー…別に受験あるわけじゃないからな。一応参加は任意だけど」
だったらサボれ、せつかくの土曜なんだぞ、と迫る友達に手を合わせて謝りながら、俺は鞆を抱えて廊下に出た。
すると…

「うわっ！！！」

「きゃあー！！」

突然タツクルされて、硬い廊下に尻餅をつく。

「…い…てて…」

…何だ？

見ると、スライディングみたいに前のめりに倒れているのは…同級生の女子。

ぱっくり口を開けたディバックからは、ゲーム雑誌がはみ出している。

しばらく動かないので…少し心配になる。

「おい…………大丈夫か？」

「う…うう…………」

むくつと起き上がった彼女は、赤くなつた膝小僧をさすりながら、恨めしそうに俺を見る。

「どこか…痛いところないか？」

あれだけ派手に転んだのだから、下手すると骨にヒビが入ってるか

もしれない。

「…大丈夫だよ。ありがとう」

不機嫌そうにつぶやいて、不知火すずは鞆を肩にかけ、また走り出そうとする。

「おい、不知火!!!」

「…何よ、急いでるんだけど!？」

急いでるのは、見りや分かるけどさ…

「お前、ぶつかってきといて、ごめんなさいの一言もないのかよ？」

「あー…そうね、ごめんなさい」

不本意そうにそうつぶやいて、でもさ…と頭をかく。

「あんたもちよつとは悪いでしょ!？あんな風に後ずさりで教室出てきたりして…バックするときはちゃんと後方確認しなきゃ駄目だって、交通ルールではそうなってんのよ!」

…それは車の話だろうが。

「お前なあ、それ以前の問題だ!『廊下は走るな』、ガキの頃から耳にタコが出来るぐらい聞かされてきただろ」

「あーもう!分かった!!!ごめんなさい!!!」

お説教は沢山、とでも言うように、不知火は両手の平を俺に向けた。

「…そんなに急いで、どこ行くんだよ？」

不知火は確か、塾も習い事もしてないはずだ。

彼氏もないはずだし…急ぐ理由が全く分からない。
あまりに不思議だったので、聞いてみることにした。

彼女は少し顔を赤らめ…答える。

「…ゲーム屋」

「…………ゲーム?」

一度口に出してしまうと、羞恥心も薄れるものらしい。

彼女は、そうよ!と開き直ったように腕組みをして、俺を見る。

「今日ね、ゲームの発売日なの!」

ゲーム?

思わず…ぽかんと不知火の顔を見つめてしまう。

「初回限定版、早く行かないと売り切れちゃうのよ。だから、今は一刻を争うってわけ」

そういうことだから、と俺の肩を叩いて、彼女はまた駆け出した。

「バイバイ、水月！また来週！！！」

「あ……あ……」

彼女が廊下の角を曲がって見えなくなるまで、俺は何となく……その後姿を見守っていた。

「気をつけるよ……また、転ぶぞ」

不知火すずは隣のクラスで、学年一、二を争うゲームオタクでもある。

RPGだろうが、格闘ゲームだろうが……

あるうことか……恋愛シュミレーションに至るまで、あいつの知識は半端ない。

『あそこまで詳しいと、さすがにひくよな』

みんなそう言って笑うけど、彼女はそんな評判物ともせずに、趣味の道をひた走っている。

オタクってのは……

なんかこう、もっと気持ち悪い感じなのかと思ってた。

不知火は一見すると、普通の同級生の女子と何ら変わるところはない。

強いて言えば、あんまり髪型とか化粧とか、そういうのに興味がないらしい……というくらいのも。俺達はまだ中学生なんだし、そのくらいが丁度いいんだろうと思うし。

とにかく……変な奴だ。

アップのためにグラウンドを走っていたら、フェンスの向こうに珍しい姿を見つけた。

大きく右手を振って合図する。

「不知火せんぱーい、お久しぶりでーす！」

彼女は突然声をかけられたことにびっくりしたらしく、目を丸くして俺を見た。

そして、不意に野球部の先輩の名前を言う。

「練習来てる？」

「ああ、まだ部室だと思いますけど…何か？」

ええ、と少し戸惑うように笑って、一冊のノートを鞆から取り出す。

「これ、コピーさせてって頼まれてただけ…呼んできてもらってもいいかな？」

茶色い無地の表紙には、綺麗な文字で『数?』と書いてある。

「月曜まで貸してあげたいんだけど…テストがあつて、勉強しなくちゃいけないのよね」

思わず、感嘆のため息を漏らしてしまう。

「真面目っすねえ…相変わらず」

本当に…妹のすずとは大違いだ。

「そんなの、ノートなんて月曜でもいいと思いますよ？先輩多分土日で勉強なんてしないと思うし…」

そこまで言ったところで、後頭部にゴン！と鈍い痛みが走った。

背後では件の先輩が、怖い顔で俺を睨んでいる。

「いてえ…だつて先輩もう大学決まつてるから、必要ないじゃないっすか」

彼は学校推薦を見事ゲットし、厳しい受験戦争から一足早く解放されたのである。

そんな訳で、高3で部活に参加しているのはその先輩だけだ。

「あのなあ…成績悪いと、卒業危なくなるかもしれないぞ!？いくら俺でも、テストの勉強くらいはやるつての!」

俺達のやり取りを珍しそうに見ていた不知火先輩は、微笑んでノートを彼に差し出す。

「はい、これ！ここで待つてるから、コピーしてまた返してね」

「あ…ああ！助かるよ、不知火さん」

学校の前のコンビニに走る先輩を見送って、彼女はグラウンドの片

隅のベンチに腰掛ける。

俺も隣に腰掛けて、その分厚い眼鏡をじっと見つめた。

高校三年生…か。

「仁くん、ずっと同じクラスだったっけ？」

「…え？いえ……隣です」

「そっか……中学三年生か」

つぶやいて、彼女はパーマもカラーもしていない、艶のある長い髪をかき上げる。

「もう…そんなに経つのね」

グラウンドの片隅では、ソフトボール部の女子部員達が黙々とキャッチボールをしていた。

「ひかりがいた頃はね…うちの女子ソフト、すごく強かったのよ」
きつとその話になるだろうと…思っていた。

そりゃそうだ。姉ちゃんは、名ピッチャーだったのだから。

姉ちゃんがいなくなって、試合にも勝てなくなって…

女子ソフトボール部は、めっきり勢いが衰えてしまった。

中学三年生の、最後のソフトボールの大会。

そのグラウンドに立つことが出来なかった…姉ちゃん。

「仁くん、ポジションどこだっけ？」

「ライトです」

あら、と彼女は目を丸くする。

「小学生の頃は、ピッチャーやってなかった？」

「ええ…でも、才能ないんでやめました」

「…どうして？」

どうして？って……

「俺、コントロールが悪くて…中学入ってからはずーっと外野です」

「そうなの？『仁はコントロール抜群なのよ』って…ひかり、よく言ってたけど」

姉ちゃんが…そんなことを。

「プレッシャーに弱いんだよ」

振り返ると、さっきの先輩がノート片手に立っていた。

「何回か投げさせてみたんだけど……ここの一番、ストレートで抑えるって所で手元狂わしちゃってパアみたいなことばっかだし」

「先輩……わざわざそんなこと、言わなくてもいいじゃないですか！？」

不知火先輩は、そうなの……と不思議そうにつぶやいて、彼からノートを受け取る。

「じゃあ、練習がんばってね」

につこり笑ってそう言って、彼女は校門の方へと歩いていった。

その後姿は……やっぱり不知火とどこか似ている。

「おいっ」

先輩が肘で、俺の脇をつつく。

「……何だよ『仁くん』て！？」

「……は？」

好奇心いっぱい目で、先輩は俺の顔を見つめる。

「お前……不知火さんとどういう関係なんだ！？」

「別に………どういう関係でもないっすよ」

「どういう関係もなくて、下の名前でごくん付けなんかする不知火さんじゃないんだぞ！？」

先輩………不知火先輩に気があるんだろうか。

そうじゃねえけど、と彼は焦った口調で否定する。

「なんつーか……優等生だし、雰囲気も大和撫子っつかさ………近寄り難いけどどこか気になる、みたいなことってあるだろ！？」

そういう意味で、不知火先輩は結構人気があるらしい。

「あの分厚い眼鏡外したら実はすごい美人でした！とか……あの子だったら期待できそうじゃね？妹も結構かわいいじゃん」

「……オタクですけどね」

で、と彼は俺の両肩に手を置く。

「………どうい関係なんだ？」

「………うーん………」

他人にこの話をする時は………実は結構気を遣う。

出来るだけ、湿っぽい感じにならないように……

高3の先輩に話す時は特に。先輩達は姉ちゃんのことを知っているのだから。

でも………そういえば、この先輩は高校編入組だったな、ということをおもう。

だったらまあ………そこまで気にしなくてもいいか。

「不知火先輩って、俺の姉貴の親友だったんですよ」

「姉貴？」

不思議そうに聞き返す彼に、こくりと頷く。

中学1年生の時同じクラスになって、何だか息が合ったらしい。

姉ちゃんは中学受験こそ頑張ったものの、昔から勉強が大嫌いだった。

それに、女子の硬式野球チームが無くて、泣く泣く始めたはずのサッカーの魅力を、すっかり取り憑かれてしまったので、勉強なんかするはずもない。

そんな姉ちゃんを赤点から救ってくれたのが、何を隠そう特待生入学だった不知火先輩。

その代わりというか、あまりの優等生ぶりに敬遠されがちだった彼女を、クラスメイトの輪に引っ張り込んだのは、うちの姉ちゃんだったらしい。

そんなこんなで持ちつ持たれつの関係もあり、二人は無二の親友となった。

「うちにもよく遊びに来てましたし、友達の弟のこと『水月くん』とは呼ばないでしょ。だからじゃないっすか？」

「姉貴って………あ」

先輩は………どうやら気づいてしまったらしい。

何だか、気まずそうな顔をしている。

「わりい………何か………変なこと聞いちまって」

「いやいや、いいんです！もう、昔のことですから」

テレビに出てくる有名な俳優なんかがよく使う言葉。

『死ぬときは、舞台上で死にたい』ってやつ。

姉ちゃんは割と…それに近かった。

中3になって初めてのソフトボールの試合。

相手は強豪校で、一進一退の手に汗握る攻防戦が繰り広げられた。

それは最終回。

最後のバッターをストライク三振に抑えた姉ちゃんは…

ピッチャーズサークルで…倒れた。

すぐさま病院に担ぎ込まれ、下された診断。

それは…急性白血病による、重度の貧血。

抗がん剤の副作用で帽子が手放せなくなった姉ちゃんは、友人達の面会を嫌がったが、不知火先輩だけは別だった。

『あーあ。早くまたユニフォーム着て、ボール投げたいなあ』

不知火先輩は、姉ちゃんの愚痴をにこしながら聞いてくれていた。

『でも、仁が私の分まで頑張ってくれてるから、私も頑張ろうって思えるんだよね』

俺はそんな姉ちゃんに、何恥ずかしい事言ってるのって、言い返すのが日課だった。

そして、あの日。

少年野球の大会、決勝戦でマウンドに上がった俺。

「恥ずかしい言い方かもしれないですけど…姉貴は今も、俺ん中に生きてますからね」

この試合に勝てれば。

願いは叶うって、思ってたんだ。

あの頃の俺は……

久々にそんな話をしたら…

いつの間にか、ここに足が向かってしまっていた。

暗くなりかけた神社の境内には人氣がなく静かで…

裏の竹林が風に吹かれ、さわさわ音を立てるだけ。

ガキの頃は、姉ちゃんとよくここで遊んだ。

小学校の校庭でキャッチボールをした時も、やっぱりここに寄り道して帰った。

『この神社の裏に小さな泉があるの、知ってる？』

立ち入り禁止になっているその泉が、この神社の御神体なのだそう
だ。

『あの泉…水の妖精が棲んでるんだよ』

『…妖精？？？』

呆れ顔で聞き返す俺に、夢が無いなあ…と姉ちゃんは眉をひそめた。
『そんなもん、いるわけないじゃん』

『いないって証拠もないでしょー？仁がまだ生まれる前、お父さん
に連れて来てもらった時にね、見たの』

『見たって…親父も見たのかよ？』

『んーん…きつと大人には見えなかったのね。でも、確かに見たん
だもん。ここには水の妖精がいるのよ』

聞こえる？と目を閉じて耳を澄ます。

『竹が風に揺れて、さわさわいう音…妖精に話しかけられてるみた
いな気がしない？』

『今も俺ん中に生きてる……か』

死に目に会えなかったから…そう思うのかもしれない。

試合に負けて…駆けつけた時。

姉ちゃんは今も、息をしていなかった。

『仁には連絡しないで』

絶え絶えの息で、姉ちゃんはそう言ったのだという。

『大事な試合なの…だから…お願い』

姉ちゃんはきつと、俺と一緒にマウンドに立ってる気持ちだったん
だと思う。

試合終了の合図と、姉ちゃんの臨終時刻は…ほぼ同時だったそうだ。
「妖精………か」

2歳か3歳の頃の記憶なんて、そうはつきりしたものじゃないだろう。

一体…

姉ちゃんは、何を見たんだろう。

戯れに、ポケットから携帯電話を取り出して…裏の竹林にかざしてみる。

最近やつと買ってもらった、新しい携帯電話。

カメラを起動してみる。

このカメラには、画期的な機能がついていて。

前に誰かがこの場所を同じ機種のカメラで撮影して、データに何か書き込んだとする。

すると、別の人のカメラにもその書き込みが写る…というのだ。

だが、残念なことに、この携帯を手に入れて以来色んな場所で試してみるが、一度もそんなものが見えたことはなかった。

「こんな片田舎でそんなもん、あるわけないと思うけど…」

見えないものが写るカメラ。

ひょっとして、何か写るんじゃないか…なんて。

「そんな夢みたいな話…」

『夢がないなあ』

姉ちゃんの声が頭に響く。
と。

その時だった。

竹林の入り口に写った文字。

『Let's Play The GAME』

どきんと心臓が高鳴る。

「……………ゲーム？」

立ち入り禁止の鎖をまたいで、その先を写してみる。

『あなたの力が必要です』

「何だよ…これ」

『私の名はウンディーネ』

『泉のほとりに立ち、私の名前を呼んでください』

「何なんだよ……………」

怪訝に思いながら進むと。

そこには、姉ちゃんの言っていた通りの…小さな泉があった。

竹林がそのあたりだけ途切れており、月が水面に映し出されて明るい光を放っている。

さわさわという竹の音。

泉のほとりに立ってみる。

そして…辺りを見回す。

きっと誰かのいたずらだろう。

もしかしたら、その辺に隠しカメラがあって、離れたところから俺を見て笑っているのかもしれない。いや…そうに違いない。

「そうと分かって…やるのは馬鹿だよな」

そうつぶやいて、泉の水面を写してみる。

『仁。私の名を呼びなさい』

……………仁？

思わず携帯を落としそうになり、慌てて両手で握り締める。
心臓が止まるかと思った。

俺の名前…

出来過ぎてる。

姉ちゃんの言葉。

『水の妖精を見たの』

呆然としながら…

その名は、口をついて出てきた。

「……………ウンディーネ」

その時だ。

目が眩むような、青い光が目の前を覆う。

「…何だ!？」

泉の水面が波立つ。

そして突如…水柱が上がった。

水しぶきに顔を叩かれながら、その中心を必死に見つめる。

「な…何なんだよ…これ!？」

目にしぶきが入り、よく見えない。

こんなの…いたずらにしては出来過ぎてる。

水の勢いで押し潰されそうな恐怖に、足を踏ん張り歯を食いしばって、耐えた。

やがて水柱が収まり、水面も静かになる。

そこに…見たものは。

一人の少女。

俺と同じくらいの背丈の、同じくらいの年格好の、少女。

肩までの髪の色はシルバーに近く、くりつとした瞳の色は濃いブルー。

おおよそ、日本人とは思えない。

だが……

思わず…つぶやく。

「姉ちゃん……?」

不思議そうな顔で小首を傾げ、彼女は静かに俺に尋ねる。

「どうしたのですか? 仁……」

「……………」

膝の力が抜けて、ドシン!と地面で腰を打つ。

尾てい骨から背骨を伝い、電流みたいな痛みが全身を走ったが…

そんなこと気にならないくらい、俺は動揺していた。

違っているのは髪と瞳の色だけ、と言っても過言ではない。

ウンディーネと名乗る、目の前の少女は…

俺の死んだ姉ちゃんと、瓜二つだった。

12月20日

『あなたには、ゲームに参加する権利があります』

昨夜の少女の言葉を、ぼんやり思い出す。

『私のパートナーとなって、ゲームに勝ち抜けば…願い事を何でも一つ、叶えることが出来るのです』

「願い事………ねえ」

ウンディーネと名乗った少女…もとい、精霊の体は、水面に浮いているようだった。

だけど…あの子は映像なんかじゃなく、ちゃんと実体を持っていた。そんなこと…現実にあるわけない。

夢でも見たのだろうか…

だけど。

ポケットから…石を取り出す。

「これがあるってことは、やっぱり…夢じゃないんだよな」

つるつるした丸い石を均等に四つに砕いたような、そんな形。

『その石を守り、他の精霊に勝利すれば、より高位の精霊が召喚され、あなたの願いを聞き入れてくれるでしょう』

『何でそんなこと、俺に教えてくれるんだ？』

俺の問いかけに、彼女は躊躇うように俯く。

そしてしばらく黙り込んだ後…囁くように言った。

『私は…その石を守るよう、召喚主に言い渡されています。ゲームに負け、石を奪われれば…この身体は消滅してしまう』

悲しそうな少女の横顔に…どきりとした。

『私、あとのくらい…生きられるのかな』

あの時………

そうつぶやいた姉ちゃんと…彼女の姿が重なった。

『ゲームに…勝てたら？』

『おそらく…召喚させる前にいた世界へ、帰ることが出来るのだと

思います』

寂しそうな瞳の少女に、思わず尋ねる。

『君………帰りたいの?』

はつとした表情で、俺をじっと見つめる。

息が止まりそうなひと時の後。

ウンディーネは小さく頷いた。

『仁……私には、あなたの力が必要なのです。私と一緒に……戦ってくださいませんか?』

携帯が鳴り出して、我に返る。

電話はクラスの友達からだった。

『映画行こうぜ! 今日こそは付き合えよな!』

「ああ……わかった」

『一晩考えさせてくれ』

昨夜そう言つて、ウンディーネの元を後にした。

『では……明日の夜またここで』

約束通り、一晩考えてみたけど……

いくら考えたって、解決出来る問題じゃない。

とりあえず俺は、友達に会って、気分を変えてみることにした。

電車に揺られながら、ぼんやり窓の外を見る。

だいたい、叶えて欲しい願い事なんて……

『姉ちゃんを生き返らせてくれ』って言ったら……あいつは何て言うだろう。

けど……

ウンディーネの寂しそうな顔が脳裏に浮かぶ。

帰りたいって言ってたな、あの子……

元の世界には……親とか友達とか、兄弟とか……大事な人達が沢山いたんだろう。

なのに、『召喚主』とやらの身勝手に、こんな誰も知らない世界に、

一人呼び出されて…

あの泉で、ずっと誰かを待ってたんだ。

俺や、姉ちゃんが…気づくまで。ずっとずっと長い間。終点を告げるアナウンスが流れる。

慌てて大勢の人の流れにのり、電車を降りた。

時計を見ると、友達との待ち合わせまではまだ少し、時間がある。

クリスマスを抑えた街は、華やいだ雰囲気にも包まれていて、何もなくても何となくそわそわしてしまう。

「とりあえず…靴でも見に行くかな」

誰に言うでもなくつぶやいて、エスカレーターを降りる。

視線をスニーカーに落とす。

大分痛んできているので、クリスマスだからと言えば買ってもらえると思う。

そして、きつと…母さんは言うだろう。

『プレゼントしてくれるガールフレンドとかいないの?』とか何とか。

ちよつと面倒臭い気がして…思わず一つ、ため息をつく。

姉ちゃんが生きてたら…そんな風に俺の事、からかったりしたんだろうか?

そんな事を考え始めたら、昨日グラウンドで会った不知火先輩の横顔を思い出した。

あの人は真面目だから、妹をからかったりはしないだろう。

まあ、例えしたとしても…当の妹はゲームが恋人みたいな奴だし、からかい甲斐はないかもしれないな。

と……その時。

目の前に立っている少女に、視線が釘付けになる。

「あんた何馬鹿言ってるの!? そんなこと出来る訳ないでしょ常識的に考えて!」

空に向かって、大声で怒鳴っているのは……

その…妹だった。

「不知火…何してんだ？」

声掛けない方がいいかな…と思った時には既に、その言葉が口をついて出ていた。

不知火は耳まで真っ赤にして、あ……………とつぶやく。

「誰としゃべってたんだ？今…」

「あ、いやその……………あれえ…私何してたんだろ!？」

見事な狼狽っぷりで更に周囲の視線を集めた後、彼女は両手を合わせて俺を拝んだ。

「ねえ水月、お願い!今見たことは誰にも言わないで!」

「…はあ？」

「だからあ!クラスの子とかに言いふらさないでって…お願いしてるんだってば!…!」

言いふらさないでって…

ゲーム好きが高じて…ついに妙な電波でも拾うようになってしまったんだろうか？

それとも…昨日買ったゲーム絡みで、何か空想でもしてたのか。よくわからないけど……………

「いいよ」

とりあえず…友達に話して気持ちの良い話ではないし。ほっとしたように笑って、そうだ!と彼女は手を叩く。

「水月ってさ…シューティングゲームとかって、得意？」

「……………は？」

期待に満ちた、きらきらした目。

さっきの動揺は、一体どこへ行ってしまったのか。

本当…変な奴。

「別にすげえ得意なわけじゃないけど…友達何人かやってて、一番最後まで生き残れるくらいには、得意かな」

促すような目に乗せられて、つい…すらすら答えてしまう。

すると。

やった!というように指を鳴らして、不知火は俺の腕を掴んだ。

「ねえ水月、もう一つお願いがあるの！」

「……………何だよ？」

彼女はさつき同様両手を合わせ、今度は明るい声で言った。

「シューティングゲーム、教えて！」

何回かプレイして、財布の小銭が尽きた頃。

休憩しよっか？という不知火の提案に乗り、近くのファーストフード店に入った。

「注文してくるからちょっと待ってて！何なら、席取っててくれてもいいけど」

それは…席を取っておけっていうことが。

まあでも…奢ってくれるっていうんだし、いいか。

店の階段を上がる途中で、ポケットの携帯が鳴る。

『今どこ？』

友達からのメール。

そうだ…映画。

今から行けば、間に合うことは間に合うが…

『ごめん！急用出来たから、また今度』

そう返信して、携帯をバッグにしまう。

どうせ即座に電話がかかってきて、何だ？女か？とか何とか…面倒なことを聞かれるのは目に見えてる。

窓際の席に腰掛け、しばらく待つと、不知火の暢気な声が飛んできた。

「はい、お待ちとおさまっ」

ポテトとコーラの載ったトレイをテーブルに置いて、あー疲れた！と伸びをする。

首をコキコキ鳴らすのに合わせて、二つに分けた長い髪がふわふわ揺れた。

「ここんとこ運動不足気味だから、大騒ぎしたら疲れちゃった」

「…あんなの運動したうちに入んねーよ」

さっきの口止め料と講義料にしては安いな…とちらりと思ったが。懐が寂しいのはお互い様だろうし、まあ文句は言えまい。

しばらく無言でポテトを食った後、で…と彼女は真面目な顔で俺に向き直る。

「どうでした！？先生！！！」

「…どうって………ひどいな」

はつきり言って、二人プレイである必要がないくらいの状態だった。ひどいときには、銃口が画面を向いてすらいない。

誰かに教えを乞おうという気になるのも頷ける。

「ねえねえ！どうやってたらあんたみたいになれるの！？」

「どうやってたらって、なあ…」

あれは…どこをどう直す、というレベルの話じゃない。

敵が出てくると、パニックってきやあきやあ騒ぐだけで、スクリーンは全く直視していないように見えた。

お前は敵を狙っていない、と指摘すると、彼女は不満げに首を振る。

「…狙ってるわよお」

「いや狙ってない。目の前に沢山現れた時とか、『とりあえず沢山撃つときや当たるだろう』って風に見えたぜ？」

図星をついたようで、彼女は氣まずそうな顔をしたが…

すぐ、居直った風に威勢よく言い返してきた。

「………だって、一匹狙ってたら違うところから狙われちゃうじゃない！？」

「でも結局一匹も倒せなければ、そんだけダメージ受けるんだぞ」
きょとんとした目で俺を見て、そっか…とつぶやき、しょんぼりする不知火。

「…ちよつと、言いすぎたかな。」

さすがに少し反省して、優しい口調で声を掛けてみる。

「俺がちゃんと援護してやるから、今度はちゃんと狙って撃ってみろよ。一番近くにいるやつから、落ち着いて一匹ずつ、な」

「…まだ、付き合ってくれるの！？」

目を輝かせる彼女に…ため息をつく。

ころころ表情が変わって、忙しい奴だ。

「しょうがないだろ。観るつもりだった映画、もう始まっちゃったし」

げ、とつぶやいて、彼女は小声でこわごわ尋ねる。

「ひよっとして……デート…すっぱかしちゃったってこと?」

「そうじゃねえよ」

呆れて思わず顔が緩んでしまう。

そんな大事な用があったら、お前のゲームなんかに付き合ったりするもんか。

「クラスの奴らだよ。さっき電話あったんだけど、急用出来たからって断った」

「…よかったの?」

よかったのか。

昨日もボーリングすっぱかしたばかりだし…ノープロBLEM、とは言いがたい状況だけど。

「別に映画観たいって気分でもなかったし…」

『明日の夜、またここで…』

ウンディーネは、そう言って微笑んだ。

今日の夜。

あの場所へ行くべきか、行かざるべきか…

ゲーム…か。

彼女の言い方からすると、『ゲーム』というのは、不知火が好きなテレビゲームとかというよりはむしろ、競技とか勝負とか…そういった意味だろう。

勝敗を決する方法は何なんだろう。

そして…敗者はどうなってしまうのか。

やっぱり、死んでしまうのだろうか。

それとも…

よくあるファンタジー映画よろしく、悪党が勝者になったら世界が

滅亡してしまう…とか。

そんな厄介そうな『ゲーム』に首を突っ込むなんて、どうかしてる
としか言いようが無い。

でも…………

「ねえ、水月!？」

目の前に突き出された手にびっくりして、不知火の顔を凝視してしま
う。

「ごめん、ちょっと…考え事してた」

怪訝そうな表情の不知火の口からは、『どんな?』とか『何の?』

とか…今にも質問が矢継ぎ早に飛んできそうだった。

ひよつとしたら『ゲーム』に興味を示すのは、俺より不知火なのか
も知れないけど。

「…で」

コホン、と咳払いをして、話題を変える。

「お前のほうこそ、どういうことなんだ？」

「…何が？」

不知火が得意なのは、家に閉じこもってパソコンとかテレビに向か
ってやるゲームであって、こんな風に街中でやるゲームではないの
だろう。

普通、女の子がゲーセンに行く理由って考えると…

やっぱり、デートじゃないだろうか。

「普通の女子だったら、あんなもん上手なくなっちゃって困りはしない
んだろうけど…ゲーマーを名乗る不知火としてはやっぱり、出来なき
や格好付かないってところ？」

「格好って…誰に？」

すつとぼけた様子の不知火に、とどめの質問をぶつけてみる。

「一緒に、シューティングゲームやりたい男がいるってことだろ？」

「あんた何言ってるの!？」

不知火は突然素っ頓狂な声を上げ、テーブルをものすごい勢いで叩
く。

周囲の視線が一斉に俺達に注がれ、フロアはしん…と静まり返った。少し恥ずかしくなって…俺は首をすくめるが。

彼女はそんなことなどお構いなしで、そんなじゃないわよ…と不機嫌そうにつぶやく。

「本当かあ？」

「本当！もう…急に意味わかんないこと言わないでくれる！？びつくりしたじゃない」

「……………そうか」

多分、お前よりも周りの客の方が…びつくりしたと思うんだけど。

「じゃあ、何なんだ？」

それは…とつぶやいて。

彼女は視線を天井に向けた。

何か真剣に考えてる様子で、じつと一点を睨んでいる。

そのまま…しばらく時間が経過する。

シューティングゲームが上手になりたい理由一つ説明するのに、そんな大それた理由が必要とは、到底思えないんだが…

やっぱり変な奴だ…と思いながら見つめる俺に、彼女は心底困ったような視線を向けた。

「うまく説明出来ないんだけど…」

やっと口を開いたはいいが、その口調はしどろもどろで…

やっぱり何か…隠そうとしているみたいだ。

「訳あって…どうしてもシューティングゲームの腕を上げなくちゃならなくて…これは…これはね……………うーん」

「…何だよ、訳って」

腕組みをして、またしばらく黙り込んだ後。

何か名案がひらめいたらしく、不知火の瞳がきらつと光った。

「これは…一つの課せられたミッションなの」

「…ミッション？」

「そう。ゲームをクリアする上で、どうしても越えなくちゃならない壁っていうか…」

「…ゲーム」

俺の動揺は……彼女に伝わってしまっただろうか。
今…確かに不知火は『ゲーム』と言った。

『あなたには、ゲームに参加する権利があります』
ウンディーネの言葉と…同じ。

まさか……不知火も？

「そんなゲームに、不知火は参加してるのか？」

恐る恐る尋ねると、そう！と彼女は明るく頷いた。

「そうなの。普通はゲームってオンラインでやるけど…あれよ、オフでカードバトルだったりとかするじゃない！？ああいうのと同じ」

「オフ…？」

「オフって言ったらオフライン、ネット上じゃなくて現実について意味に決まってるでしょ？だから…今日は助かったわ、水月のお陰で！」

満面の笑みで感謝の意を表す不知火。

オフ………知るかよ、そんなもん。

でも………そうだよな。

まさかな。

「まあ…いいや」

不知火が敵だなんて考えるのは、あまり気持ちのいいことじゃない。少しほつとして、ごちそうさま！と手を合わせる。

「じゃ、特訓再開と行くか…礼は上手くなってから、言ってもらわないとな」

「おっけー！よろしくお願いしますっ」

その後、何回か両替機のお世話になって…

不知火は最初の頃と比べると、大分上手くなった。

そろそろ帰らなきゃ、と腕時計を見て、彼女はにっこり笑った。

「本当に今日はありがとね！水月」

「ああ。俺も結構楽しかったよ」

映画を観るより出費は嵩んだけど…映画を観るより気晴らしになった。

ただ…

不知火がしきりに周囲を気にしている風だったのが、なんとなく気がかりだった。

それに、『ゲーム』という言葉も。

ふと、ウンディーネに会った時のことを思い出し、バッグから携帯を取り出した。

ソフトを起動して…カメラ越しに不知火をしてみる。

と……

はっとした。

彼女の肩のあたり。

カメラに写ったのは…黒髪で浅黒い肌の男の姿。

空中に浮いているようなその様子は、昨夜のウンディーネと同じ。

全身から力が抜けるような感覚。

「………やっぱり」

『ゲーム』。

そうなのか。

けど………あいつが言っていたことと、ウンディーネが言っていたことは、何だか大きくかけ離れているような気がする。

シューティングゲーム？

そんなものが…ゲームに必要なのだろうか。

不知火が参加しているということは…俺は、あいつと戦わなきゃならないのだろうか。

あいつは、不知火先輩の妹なんだぞ？

それに、不知火先輩は…姉ちゃんの親友だった人だ。

どうしたらいいんだろう。

そうだ。こんなゲーム、参加しなければ…

『あなたの力が必要』

昨夜のウンディーネの…姉ちゃんに良く似たあの声が、頭に響く。

全身に溜まった重苦しい空気を追い出すように、大きく一つ深呼吸をする。

「とにかく……今夜行ってみなきゃ、何も始まらないよな」

俺の姿を見て、ウンディーネはとても嬉しそうな顔をした。

「来てくれたのですね！？ 仁」

だが…石を突き出す俺に、彼女は一瞬で表情を硬くする。

「まずは…俺の話を聞いてくれ」

俺は、不知火の話をした。

そして…あの浅黒い肌の男の話も。

彼女は深刻な表情で、そうですか…とつぶやく。

「それは…炎の精霊サラマンドラです。おそらくその少女は」

「その、サラマンドラって奴の…パートナーってことなんだろう？」

ウンディーネは困ったように俺を見つめ、小さく頷く。

「俺、あいつと戦うなんて…出来ないんだ。同じ学校に通ってるし、まあ…友達だし。あいつは女だし…傷つけるわけにはいかない。それに…」

ありがとね、と笑った不知火の顔を思い出す。

「あいつ…そんな大変なことだって分かってなくて、ゲームに参加してるんじゃないかな？ もしそうだとしたら…参加するかどうかは別としても、俺あいつのこと…止めてやらなきゃ」

「…ですが」

黙って俺の話を聞いていたウンディーネは、厳しい表情で俺を見た。
「サラマンドラの攻めの魔術は、他の三精霊を遥かに凌いでいます。彼女が魔術の扱いに不慣れだとしても、おそらく簡単に負けることはないでしょう」

「魔術にも…攻めと守りがあるのか？」

「ええ。守りの魔術に関しては…私がおそらく、一番上かと」

「…だったら、別に俺がいなくなたって」

いえ、と彼女は首を振る。

「パートナーがいなくては、ゲームで勝ち残ることは出来ません。パートナーとなる人間がいてはじめて、私達は実体化することが出来る、その『賢者の石』に触れることが出来る…パートナーがいなければ、戦うことすら出来ず、『賢者の石』を奪われてしまうのです」握っていた石を見つめる。

青く光るこの石…『賢者の石』っていうのか。

これを奪われるということは…彼女が消滅してしまうということ。パートナー…か。

「その…シューティングゲームというものは、よくわからないのですが…おそらくサラムンドラは、そのすずという少女の適性に一番適った戦い方として、その方法を選んだのだと思います」

人によって、戦い方も異なるのか。

もう一度…尋ねる。

「それ……俺じゃなきゃ、駄目なのか？」

潤んだ青い瞳が、射抜くように俺を見つめる。

「私を見つけて名を呼んでくれたのは、仁…あなただけです。以前、幼い少女が私に話しかけてくれたことがありましたか…」

心臓が高鳴る。

『妖精を見たの』

……姉ちゃんのことだ。

「彼女はまだ幼過ぎて、ゲームのことが分からないようでした。だから…」

ウンディーネは、泣きそうな顔で俺を見て、深々と頭を下げた。

「お願いします！仁…私と一緒に戦ってください」

「戦うたって…」

『一体どうやって』と言いかけたその時。

びくつと彼女の体が震える。

「どうしたんだ？ウンディーネ…」

「結界の中に……誰かが」

青ざめた彼女に…

俺は、意を決して叫んだ。

「行こう！ウンディーネ」

「仁……………」

「この石を…守るんだ！」

ウンディーネに連れられて行った先は…

さつき不知火と遊んだ街。

終電まではまだ時間があるし、年末で大賑わいのはずなのに…

バスターミナルには、全く人気がなかった。

時が止まってしまったかのような静寂の中。

一人の男が立っていた。

黒のパーカーにジーンズ姿の、長身で細身の男。

フードを目深に被っているので、顔は暗くなっていてよく見えない。

ただ…一つだけわかったこと。

その男は、ウンディーネやさつきのサラマンドラとは違う。

……………人間だった。

「…水の精霊ウンディーネ」

歌でも歌うように、男は滑らかな調子で言う。

「そして…坊やがそのパートナーってわけ」

声からして、20代くらいの若い男のようだ。

「お前は……………」

「俺？」

ふっ、と笑って男は答える。

「俺は…風の精霊シルフィードの…パートナーだよ」

「で……………その…シルフィードってのは、一体どこに隠れてるんだ？」

「…どこにも隠れちゃいないよ」

楽しそうに言って…男は黒いフードの下で、にやりと笑った。

「素人のチビくん相手なら…俺一人で十分だからね」

その瞬間。

ものすごい風が吹いて、体が数メートル後方に吹っ飛んだ。

「いつ……………！」

アスファルトに叩きつけられ、一瞬息が出来なくなる。

「仁……！！」

悲鳴を上げるウンディーネに、男が静かに近づく。

「さ……石を渡してもらおうかな？」

はっとした顔をして。

ウンディーネは何か唱え、両手を天にかざした。

滝のような轟音と共に、彼女の目の前に厚い水の壁が出来る。

水しぶきを避けるように、腕で顔を覆いながら、楽しそうに男は叫ぶ。

「そう！さすが鉄壁の守りのウンディーネ……そこなくっちゃね！！」

男がかざした手の先端から、かまいたちのようなものが幾重にも重なり合って飛んでくる。

風の刃は水の壁を切り刻もうと襲い掛かり、激しい水しぶきが幾つも上がる。

苦しそうに、顔を歪めるウンディーネ。

「うっ……………」

「まだまだ！」

男は両手を天にかざし……その手をウンディーネの方に向ける。すると、空圧の塊のようなものが水の壁を貫き、そして……

彼女の体を貫いた。

「うっ……………」

「ウンディーネ……！！」

腹を押さえてうずくまるウンディーネに、急いで駆け寄る。

「大丈夫か！？」

「え……ええ……………でも……………危ない！」

叫ぶ彼女を抱え、飛んできた風の刃を避ける。

男は俺を見て、愉快そうに口笛を吹く。

「へえ…なかなかやるじゃん」

「お前っ……………」

反撃しなくては。

でも……………やり方が分からない。

その時、俺と男の間に水の柱が幾つも発生する。

見ると、ウンディーネは苦しそうな息の中、何か懸命に唱えていた。

「ウンディーネ！」

「…これで……………少しは……………攻撃を防ぐことが」

「けど…お前……………怪我してるのに」

彼女の腹部からは、人間と同じ…真っ赤な血が流れ続けている。

「仁……………一緒に……………戦ってなんて言って、私……………こんな」

彼女の目に涙が滲む。

悔し涙だろうか。

水柱は風の刃に切り裂かれ、一つ、また一つと消えていってしまふ。

このままじゃ……………

ごめんなさい…と涙声で言って俯く彼女の肩を、強く揺さぶる。

「諦めちゃ駄目だ！」

「……………仁」

「俺に戦い方を…教えてくれ」

最初からあの男のようにはいかないだろう。

だけど……………

「ウンディーネ、頼む！」

彼女はぐつと唇を噛んで、また何か小声で唱えた。

そして…強い眼差しで俺を見る。

「仁……………球体をイメージしてください」

「球体!？」

頷いて、彼女は依然攻撃を続ける男を、じつと見据えた。

「手の平に…球体があるとイメージして、それを……………あの男に」

……………そうか。

ボール。

荒れ狂う風の中、大きく息を吸い込んで。

マウンドに立つように、ぐっと足を踏みしめる。

右手の中には…野球より二回りくらい大きい、水のボールが握られていた。

「…ストレートだ」

自分に言い聞かせるように…つぶやく。

勝負はこの一球。

九回裏、2アウト満塁。

あの日、俺の手を離れたボールは…

最終打者のバットに、まるで吸い込まれるようにヒットしたのだった。

それ以来俺は、ピッチャーマウンドに立つことをやめた。

どうしても…姉ちゃんが死んだ、あの日の試合を思い出してしまう。

トラウマなんて簡単な言葉では、言い表すことが出来ない。

…恐怖だった。

けど……

傷を抑えてうずくまりながら、必死に呪文を唱え続けているウンデイーネ。

彼女を…このまま消滅させるわけにはいかない。

約束したんだ…守るって。

「行くぞ!!!」

大きく振りがぶって…

投げた。

その瞬間、水の球は更に大きさを増し。

猛スピードで男に向かって走る。

はっとした表情の男。

その体は、水の塊に大きく吹き飛ばされる。

………筈だった。

水の塊は、突如起こった大きな竜巻にぶつかって…弾けた。

「…間に合ったようですね」

穏やかな女性の声。

見ると、男の傍らに、ブロンドの長髪の女性が立っている。

「シルフィード…」

苦しそうに、ウンディーネがつぶやく。

あらあら…と困ったように笑って、シルフィードと呼ばれた女性は言う。

「ウンディーネ…長い眠りから醒めたばかりで、少し…体が鈍っていたようですね」

そして、彼女は興味深そうに目を見開き、俺の方をじっと見た。

「初めてにしては、なかなか…お見事でした。ウンディーネのパートナー」

ぐつと歯を食いしばって、ウンディーネの前に立ちはだかる。

「まだ…やる気なんだろう？」

その時。

フードの男が、愉快そうに大声で笑った。

「まあまあ、そう怖い顔するなよ…」

静かに前に進み出て、俺の前に立つ。

「今日は様子見。明日は早いし…この辺にしといてやるからさ」

「今日は…って」

「明日の夜」

彼は東の方にある、電化製品の店が軒を連ねる街の名を告げた。

「そこへおいで。きっと…面白いものが見れると思うよ」

じゃあね、と片手を挙げた彼の体は、ふわりと宙に舞い上がった。シルフィードも彼に従って、空中に浮き上がる。

「…待て!!!」

空に消えていく男を…大声で呼び止める。

「お前…一体何者なんだ!？」

「俺…?」

男は振り返って、また…にやりと笑う。

相変わらず、顔は半分以上黒いフードに埋もれ、その全容を窺い知ることは出来ない。

「俺はね…………風群睦月」

「風群…睦月？」

「そ…………またね、水月仁くん」

こいつ……………何で、俺の名を？

待て！と呼ぶ俺の声に、再びは答えることなく。

睦月と名乗った男とシルフィードは、ビルの立ち並ぶ街の遥か向こうへ…消えた。

12月21日

『では次に、このスライドをご覧ください…』

体育館の壇上では、うちの学校のOBであるところの歴史学者が、マイクを使って何やら熱心に説明を続けていた。

『わが国古来の文化と異国文化の融合』というテーマ。

学校の授業自体は、先週の週末で終わっているのだが。

講演会とか実習とかいったオマケみたいなカリキュラムは、今日から始まる補習期間に、まとめて消化してしまおうということらしい。こういう行事は得てして、死ぬほど退屈なもので。

周囲の生徒達はひそひそおしゃべりをしていたり、こくりこくりと船を漕いでいたりで、熱心に話を聞いている者などほとんどいない。異国文化…か。

ウンディーネって…きっと異国の精霊だよな。

この国古来の…っていうなら河童とか、龍とか、なんかかかんとかの神とか…

いや…それは精霊じゃなくて神様か。

だとすれば…一体どうして、こんな所にいるんだろう？

『我が国の古来よりの風習として、天災を鎮めるために、人身御供を捧げるというものがあります。悲しい歴史ではありますが…このようにして、多くの乙女達が命を落としたものと考えられ…』

人身御供…ねえ。

生贄を捧げて、代わりとして精霊を召喚する…

あの『賢者の石』が…触媒なのか。

ぼんやりそんなことを考える。

不知火の好きそうな、ゲームの中の伝説としてはありそうな話だけど…

ウンディーネ……大丈夫かな。

彼女は今、最初に出会ったあの泉で眠っている。

『賢者の石』の力が浸透した結果、強い魔力を持つようになったあの泉にいれば、傷の回復も早まるのだと、昨夜ウンディーネは言っていた。

『明日の夜、また彼らが攻め入ってこないとも限りませんから…』
それまでに、可能な限り回復しておきたい、ということらしい。

ゲームにタイムリミットはあるんだろうか。

あんなにひどい怪我をしていたのに…そんなに無理しなきゃいけないのか。

昨日はウンディーネの力を借りて、何とか反撃することができたけど…

俺一人じゃ…何も出来ないしな。

講演会は終盤に差し掛かり、学者は生徒の質問に一つ一つ答えている。

「先生の最近の著書の中に、異国の『精霊』と『シャーマン』の関係を、我が国古来の伝承である『式神』と『陰陽師』の関係になぞらえた箇所がありますが…」

高等部の生徒の言葉に…はっとした。

あの人、今…精霊って言ったな。

学者は誇らしげに、その生徒の質問に応じている。

「この国の人々は古来より、自然に対し強い信仰心を持っていたため、精霊という超自然的な物の存在を受容するのに、とても有効な土壌があったと考えられます。これは今調査中なのですが…異国から渡ってきた人々の中に『精霊使い』を称する者がいて、一部の民に崇められていたらしい。その人物は、異国で非常に有名な錬金術師の弟子であつたとされています。その錬金術師に関する伝承では、不思議な魔力を持つとされる『賢者の石』を作ったとされ…」

『賢者の石』？

「その錬金術師は優れた医師であると同時に、多くの書物を著した

作家でもありました。『妖精の書』という書物の中には、世界を構成する水・火・土・風の四大元素を、精霊として擬人観的に描写した箇所があります」

四精霊……

隣のクラスの不知火の方を、振り返って見てみる。

彼女もまた…食い入るように、学者の顔を見つめていた。

炎の精霊…サラマンドラ。

そして昨日出会った、風の精霊…シルフィード。

水の精霊ウンディーネ。

ということは…あと、もう一人。

土の精霊？

それは一体…どこにいるんだろう。

講演会が終わって、クラスの女子達とじゃれあっている不知火に声をかける。

放課後つきあえ…と言うと、彼女は気まずそうな顔をした。

「……………ゆすり？」

「…そんなんじゃないよ」

「じゃあ…何よ」

「ん……………」

『精霊のことだ』なんて…今は言うべきじゃないだろう。

「まあ、後でな…」

手を振って、彼女に背を向ける。

ちよつと…と呼び止める声がしたが、俺は振り向かずその場を去った。

体育館を出たあたりで、友達に声を掛けられる。

「なあ、仁！？」

興味津々な彼らに近づくと、いきなりヘッドロックを掛けられた。

「…なんだよ、一体？」

「お前…不知火と何話してたんだよ！？」

…は？

「お前、あいつと仲良かったっけ？物好きだなあ…」

「不知火もまあ、かわいいっちゃかわいいけどさ…ゲームオタクってのがちょーつとな」

友人達は口々に好き勝手なことを言っている。

「で、何話してたんだよ！？ひよつとして…『クリスマスどっか行こうぜ』みたいな？？？」

…思わず、ため息をつく。

「俺も…不知火誘うほど暇じゃねえよ」

「本当かあ？」

「本当…たく馬鹿馬鹿しい」

はつきり言つて、俺は今んとこ、彼女なんて必要ないと思ってる。しかも、よりにもよって不知火なんて……

一緒にいたって何の話するんだよ？

だいたい…怒ったり笑ったり忙しいあいつと一緒になんていたら、きつと毎日ぐったりだ。

付き合うんなら、もっと…そうだな。

『では今夜…またここで』

微笑んだウンディーネの顔が脳裏に浮かんで…

慌てて大きく首を振る。

不思議そうに俺の様子を眺めている友人達。

「どうした？仁…」

「いや………なんでもない」

何の用？と、明らかに不機嫌そうな声で言い、不知火は俺を睨んだ。どうやって…切り出そう。

「……………何よ」

『サラマンドラのこと』？

それとも『ゲームのこと』…か。

でも…不知火のことだ。

その言葉を口にした途端、この場から逃走しかねない。

「ちよっと、何なのよ一体!？」

「……………あのさ」

「だぁーもう!ー!言いたいことあるならさっさと言いなさいよ!」

「…わかった。じゃあ言う」

意を決して…

「精霊の話なんだけど…」

その瞬間…彼女は言葉を失った。

目を大きく見開いて…硬直する。

「せ……………精…霊…??？」

「知らないとは言わせないぞ。お前のパートナー…サラマンドラって精霊なんだろう？」

突然の俺の問いかけに、ものすごく動揺しているらしい。体が小刻みに震えている。

が…平静を装おうとしているのか、ひきつった顔で笑う。

「さ…サラ……………な…なんだろう?私…そんなもん……………」

「お前昨日、俺に『ゲーム』って言ったな!?あれ…サラマンドラって精霊と一緒に戦ってるゲームのことだろう?」

何とか誤魔化そうと思っただけらしいが…

核心をついた俺の質問に、彼女は観念した様子で肩を落とした。

俯いて…黙り込む。

「どうなんだ?不知火」

「……………言えない」

青ざめた顔をして…蚊の鳴くような声でつぶやく。

口止めされてるのか…あの精霊に。

どんな経緯であのゲームに、不知火が参戦することになったのかはわからないけど…

何の疑いも持たずに、精霊に言われるがまま行動しているんだとすれば…

『またね』

愉快そうに笑っていた…あの男。

俺は彼女に、『風群睦月』が昨夜言っていた…街の名を告げる。

「今夜…あの街には行くな」

「…何？今夜って」

「とにかく行くな！お前が思ってるような遊びじゃないんだ、あのゲームは…」

その時。

校舎の向こう側の渡り廊下を、不知火先輩が歩いているのが見えた。そして…

うわっ、という、弓道部員の小さな叫び声と共に…

一本の矢が……彼女に向かって飛んでいくのが見えた。

思わず大声で叫ぶ。

「不知火先輩！危ない！！！」

先輩は、すぐに俺の声に気づいたようだ。

立ち止まり、振り返る。

矢はまっすぐに、彼女に向かって飛んでいったが…

一陣の風が巻き起こり。

矢の軌道は……大きく曲がった。

はっと…息を呑む。

次の瞬間、ダン……という鋭い音と共に、矢は彼女のすぐ傍の柱に突き刺さった。

「お姉ちゃん……！」

不知火が甲高い声で叫び、先輩の方へ走っていく。

風の吹いてきた方向を、振り返って確認するが…

誰もいない。

風？

昨夜のあの男の…にやりと笑う口元を思い出す。
まさか……

保健室に運ばれ、しばらく眠っていた先輩は…

俺と不知火を見て不思議そうな顔をした。

ひどく顔色が悪い。

不知火によると、彼女は昨日から風邪を引いていて、熱があるのだそうだ。

不知火が心配そうに呼びかける。

「お姉ちゃん……大丈夫？私、わかる？」

「…うん」

「……よかったあ」

大きくため息をついて、両手で顔を覆う不知火。

慰めようと、そっとその肩に手を置く。

こうしてると…やっぱり二人は姉妹なんだな、と実感する。

「…仁くん」

先輩は、ぽつりと俺の名を呼んだ。

「先輩、大丈夫ですか？…僕の声、聞こえてました？」

こくり、と小さく頷く。

「ありがとう…お陰で、助かった」

誤って矢を放った中等部生と顧問の女の先生が、半泣きで先輩に謝罪している。

弱々しいながらも笑顔を作って、いいですよ…と答える先輩。

「熱もあるみたいだし…もう少し、休んでいったら？」

保健室の先生の言葉に、彼女は大丈夫です…と首を振った。

「5時間目テストなんで…行かないと」

「お姉ちゃん!!!」

不知火が突然、先輩の腕を掴んで怒鳴る。

「そんなもんどうでもいいじゃない！お姉ちゃん顔真っ青だよ!？」

「………本当？」

「休んでなきゃ駄目だよ！テストだテストだって………馬鹿じゃないの!？」

こいつの言うとおりだ、と思ったので、俺も賛同しておくことにし

た。

「そうですよ…先輩」

先輩は、きょんとした目で俺達を見つめる。

「私…そんなに顔色悪い？」

頷くのが同時になつてしまつた俺達を見て…………

彼女は…ふつ、と顔をほころばせた。

ぎよつとした顔をして、不知火は先輩の両腕を掴み、大きく揺さぶる。

「お姉ちゃん、ショックで頭どうかしちゃったんじゃないの!？」
その言い方は…ひどいだろ。

姉ちゃんと一緒にいた頃から、彼女は滅多に怒らず、いつもにこにこしている人だった。

今だつて俺達を心配させまいと…懸命に明るく振舞っているのではないかと思う。

全く…………姉妹だというのに、不知火とは大違い。

「大丈夫。さつきね…ちよつと怖い夢見ちゃつて」

彼女は目を細めて、穏やかな口調でそんなことを話す。

「だから…多分、顔色悪いのはそのせいだと思う」

不満そうな顔で、んー…と唸る不知火。

「確かに…何かちよつと、うなされてるみたいだったけどさ…」

「でしょ？だから…大丈夫」

ふらりと立ち上がり、保健室の先生にぺこりと頭を下げる。

「先生、ありがとうございます。教室戻ります」

少し危なっかしい足取りで廊下へ出て。

先輩は振り返り、もう一度微笑んだ。

穏やかで…優しい笑顔。

笑顔は笑顔でも…………昨夜のあいつとは、正反対の印象を受ける。
傍らで大きいため息をつく不知火に…声をかける。

「不知火…………さっきの矢…見てたか？」

「…しっかり見てたわよ」

けだるい表情で、不知火はじつと俺を見る。

「あの矢……………変な曲がり方、しなかったか？」

「はぁ？という顔で、彼女は眉をつり上げるが…構わず、話を話してみる。」

「急に強い風が吹いたろ？それで…不知火先輩を避けるみたいに、矢がちよつと…曲がつたみたいに見えたんだけど」

「水月さあ…」

明らかにイライラした様子で、彼女は声を荒げる。

「さつきから精霊だゲームだ変な曲がり方だって…ノイローゼなんじゃないの？野球のやり過ぎだって、多分」

不知火はすつくと立ち上がり、呼び止めようとする俺に見向きもせず、ずんずん歩いて保健室を出て行った。

結局、何も聞き出すことは出来なかったけど…

やっぱり何か隠しているみたいだし、それに…

風。

あいつに……………何か、関係があるんだろうか。

校舎を出ると…

さつき講演をしていた学者が、人待ち顔で立っていた。

大学教授だとか言ってたけど…暇なのかな。

会釈して通り過ぎようとする俺に、彼は声をかけてくる。

「君は…精霊に興味があるのかね？」

「……………は？」

彼は、さつきまでうちの学校の先生達と一緒に、昼食を摂っていたのだと話す。

「ああいう講演は得てして、君みたいな若い人達にはウケないもんだ…とても熱心に聴いていた君の様子が、非常に印象的だったんだよ」

「そうでしょうか…」

実は色々考え事をしていたのだ…とは、さすがに言えない。

「特に…あの生徒さんの質問に答えている間、君は睨むように私を見ていたからね」

動揺する気持ちを抑えて…平静を装おうと試みる。

「もしかしたら…と思ったんだ。違つかい？」

「ええ…まあ」

彼はポケットから一枚の名刺を取り出し、俺に差し出した。

「もし、もっと知りたいことがあるなら…ここへ来たまえ。今度の休みにでも」

「……………はあ」

「四精霊について…」

心臓がどきんと高鳴る。

「実は、発表していない発見が…まだまだ沢山あってね。もし興味があれば…友達でも連れて、遊びにおいで」

ちよつと迷ったが…

とりあえず、頷くことにした。

野球部の練習を終えて、暗くなった道を歩く。

四精霊のこと。

もしかしたら…『賢者の石』のことも。

ゲームのことも？

そんな書物が発見されたのだとしたら……………

でも、あの学者。

『精霊なんているわけがない』っていうようなこと、講演の中でも言ってたし。

書物に書いてあることが真実だなんて、おそらく…思っではないの
のだろう。

伝承を調べるのが、専門だって言ってたし。

その発見を、誰かに話したくて仕方がないのかもしれない。

俺はまだガキだし、話したって支障はないって…そう思っているの
かも。

だとすれば……

ゲームのことがもつとわかれば……

ウンディーネが元の世界に戻る方法も、不知火達を傷つけずに済む方法も……

分かるかもしれない。

「ウンディーネ……」

泉のほとりに立って呼ぶと、彼女は静かに姿を現した。

夕食の後うちをこっそり抜け出して訪れた泉は、肌を刺す冷たい空気に包まれている。

「やっぱり……不知火は、サラマンドラのパートナーで間違いないと思う」

「……そうですか」

つぶやいて俯く彼女は、まだ昨夜の傷が癒えきらないらしい。

水面に立つウンディーネの体から放たれる青い光は、昨夜以前と比べると遥かに弱々しい。

「なあ、ウンディーネ……俺と不知火、二人が勝者になるってことは……出来ないのか？」

「…………え？」

家に帰ってから、ずっと考えていた。

その結果。

「……引き分けてわけにはいかないのかな？」

「それは…………わかりません」

彼女は困った顔で首を振る。

「ゲームが幕を開けたということは……ゲームを取り仕切る『ゲームマスター』もどこかにいるはずなのですが……」

「……ゲームマスター？」

不知火に聞けば……意味が分かるだろうか？

ということは……やっぱり他の意味でも何でもなく、ゲームはゲームってことか。

「ゲームマスターがそれを良しと判断すれば、可能なのかもしれませんが。ただ…ゲームマスターがどのような人物で、どういった権限を持っているのか…私達は、召喚主から何も聞かされてはいないのです」

ゲームマスターって…審判みたいなもんか。

彼女は、青い光を放つ賢者の石を握り締める。

「遙か遠い昔…彼は私達を呼び出し、こう言いました」

『各自、賢者の石を守るように。お前達が皆目を醒ました時、ゲームは幕を開ける…それぞれパートナーとなる人間を見つけ、共に戦い賢者の石を守るのだ』

負けた者は、賢者の石を勝者に渡すこと。

賢者の石が勝者の手に渡り、敗者の力全てが受け渡されると、敗者は消滅してしまう。

ウンディーネが知っていることは、実は…たったこれだけだった。

「賢者の石は…つまり、サラマンドラやシルフィードも…持つてるってことか？」

「見ての通り、これは賢者の石の欠片です。4つに砕けた賢者の石をそれぞれの精霊が守っている…サラマンドラやシルフィードだけでなく、土の精霊ノームも勿論」

土の精霊は…ノームっていうのか。

まだ会ったことがないのは…そいつだけか。

「4つの欠片の一つにすれば、前にお前が言ってた、その…高位の精霊ってやつが呼び出されるんだろ？それを呼び出すのが…」

「おそらく…ゲームマスターの勤めなのでしょう」

つまりは…

ゲーム最大の目的は、賢者の石の欠片を全て集め、勝者となることだが…

最低でも石を守りさえすれば、彼女が消滅することはない。

あとは、元の世界に帰れる方法さえあれば……………

「どの精霊も仕掛けてこなければ…お前達が戦う必要はないわけだ

な？」

「ですが……… 実際仕掛けてきているのですから」
シルフィード……か。

「私が目を醒ましたのは、今から……あなた方の暦にして10年ほど前のことです。それからずっと、共に戦うパートナーを探していましたが……実際にゲームが開戦する今まで、見つけることが出来ませんでした。でも……」

厳しい表情で、ウンディーネは天を仰ぐ。

「シルフィードはおそらく、もつとずっと前に目を醒まし、あの睦月という男性とペアを組んで……力を蓄えてきていたのでしょうか」
「サラマンドラは……どうなんだ？」

困った顔で首を振る。

「実際に会ってみないことには……ですが、彼はどちらかというところ観者といった性質の精霊ですから……積極的に仕掛けてくるということとは、考えにくいと思います」

「……せっかく戦闘能力が高いのに、勿体無いな」

そうかもしれませんが、と彼女は少し微笑んだ。

「ですが、シルフィードが好戦的な精霊だったとは……想定外でした」

「あの……男の影響じゃないのか？」

にやりと笑った……睦月という男。

「ノームは……静かにじつと機を待つタイプの精霊です。今は表立って動いていなくとも、おそらく……勝ちを狙って、私達の様子を窺っているのだと思います」

「お前は……勝ちたいのか？」

驚いたように、目を見開くウンディーネ。

視線を水面に落とすと、前髪がさらさら流れて目の上にかかった。悩んでいる様子で、黙り込んでしまう。

人間と比べると、随分長生きなんだろうけど……

精霊の中では多分、俺と同じくらいの年なんだと思う。
死にたくない。

家族のところへ帰りたい。

でも…他人を傷つけるようなことはしたくない。
きつと…そんなところだろうな。

「ウンディーネ…良い事思いついたんだけど」

彼女は黙ったまま、悲しそうな目を俺に向ける。

そんな顔で見つめられると…弱い。

心臓を鷲掴みにされるみたいな気持ちにぐっと耐え、俺は彼女に提案した。

「サラマンドラと…不知火と、同盟を結んだらどうだろう？」

この時間の電車は、忘年会帰りのサラリーマンでこった返している。
俺みたいなガキは珍しいらしく、しばしば大人達の冷やかな視線が飛ぶが…

構わず、窓の外を見ていた。

一緒に行く、と言い張るウンディーネは、石と一緒に泉のほとりに置いてきた。

『お前はまだ傷が完全に癒えてないんだから…今日は戦いに行くわけじゃないし、俺一人でも大丈夫だよ』

『でも…』

しばらく考え込んだ後、彼女は決心した様子で、わかりました…と頷いた。

『行つてらっしゃい、仁…気をつけて』

につこり笑ったその顔は… やっぱ姉ちゃんそっくりだ。

ふう、とため息をついて、窓の外のビルの照明に視線を移す。

不知火…

きつと…いるだろうな。

あんだけ『行くな』って言ったのに…

サラマンドラって精霊は、好戦的じゃないのかもしれないけど…

ゲームの不知火はおそらく、ゲームには勝ちたいって…思っんじゃないだろうか。

けど……あの睦月って男。

昨日のは多分……まだほんの準備運動みたいなものだ。

「あいつのシューティングの腕……いまいちだもんな」
あんなんで……あいつに勝てるわけない。

「大丈夫かな……不知火」

改札をくぐると。

そこは……しんと静まり返っていた。

……昨日と同じだ。

まだ電車も動いてるし、人も沢山いるはずなのに。

ここは、いつものこの街じゃない。

『ゲーム』の……フィールドだ。

妙な胸騒ぎがして、不知火を探して走り回る。

「不知火！」

名前を呼ぶが……返事はない。

「こっちじゃないのか……」

高架橋の下をくぐり、駅の反対側に回る。

「不知火！」

「やあ」

はっとして……

声の方に目を凝らす。

そこに立っていたのは……睦月だ。

昨日と同じように……顔はフードですっぽり覆われている。

「すずちゃんを探してるんだろ？」

「お前っ……」

にやりと笑う……男。

ぐい、と親指で、向こう側の大通りを指差す。

「行ってあげたら？ 今、彼女……シルフィードがお相手してるから」
けど……と、男は右腕を横に突き出す。

「ちよつとだけ……お付き合い願おうかな？」

そこに現れたのは…二振りの刀のようなもの。
一本を、俺に投げて寄越す。

「使える？」

「……………」

使えるわけ…ないだろ。

剣道でさえ、授業でやったくらいしか経験がないってのに。
と。

気づいたら、目の前に睦月の姿。

「何！？」

慌てて構えた刀が睦月の刀と交わり、白い眩い光を放つ。

「良い反応だ！」

楽しそうに言って、彼は再度刀を振り下ろす。

激しい衝撃が腕にかかる。

もう一度刀が交わり。

睦月は、大きく跳躍して後退した。

「…かかっておいでよ」

挑発するような笑顔。

相変わらず、口元しか見えないが…

「来ないの？」

にやり…と笑う。

「それなら…もう一度、こっちから行くよ！」

ぐつと足を踏み込んで、睦月は大きく刀を振り下ろした。

「くっ…」

今の所は何か、ついていけるけど…

こいつ…刀さばきの鮮やかさは、まるで本物の武士みたいだ。

一体どこで…こんなもの身に付けたんだろう。

その時。

不意を付いた攻撃で…俺の刀は放物線を描いて、遠くへ飛んでいつ
てしまう。

……………しまった。

「王手！」

楽しそうな笑い声をあげ、睦月はこちらに向かって歩いてくる。

「さあて…どうするかな？」

じつと睨む俺に、睦月は静かに刀を向けた。

「けど、ウンディーネがいないんじゃないじゃねえ」

「……………お前は」

ま、いつか…と楽しそうにつぶやく。

「君が痛い目に遭えば…彼女も、出て来ざるおえないでしょ」

振り上げた刀の先端が、街灯に照らされてきらりと光る。

ぐつと硬く…目を閉じる。

その時だ。

俺と睦月の間に…大きな水柱が上がった。

「仁！！！」

ウンディーネの声。

はっとして…立ち上がる。

「行ってください、仁！サラマンドラと…不知火さんを！」

両手をかざして、何か呪文を唱えるウンディーネは…苦しそうな表情。

…ウンディーネ。

「わかった！！！！すぐ戻るから…だからそれまで頑張ってくれ！！！」

駆け出した俺を…睦月が追ってくる気配はない。

大通りに出る。

そこは、激しい風と立ち上る炎で…

地獄みたいだった。

「不知火…」

周囲を見渡す。

昨夜見たときは1体だったシルフィードが…なぜか今日は沢山いる。何か…分身みたいな術を使ってるんだろうか。

かまいたちのような鋭い風と、炎の塊がぶつかり合って、眩しい光

を放っている。

その先には、昨日見た…サラマンドラの姿。

苦しうに齒を食いしばって、次々に炎の塊を繰り出す。

そして。

近くにいた数体のシルフィードが…こっちを見て、にっこり笑った。

「!？」

襲い来る風の刃を避けながら、振り切るように走りまわる。

と……

目の前に、不知火の姿を確認した。

青ざめた顔で…地面にぺたりと座りこんでいる。

ゆっくりと彼女に近づいていく、沢山のシルフィード達。

不知火はぶんぶん大きく首を振って、銃を構えた。

そして泣き叫びながら…手当たり次第に撃ちまくるが。

目はぎゅっと…閉じたまま。

駄目だ。

あんなんじゃ…当たりっこない。

俺は大きく息を吸い込んで…叫んだ。

「不知火!!!」

12月22日 その1

不知火は、呆然とした様子で俺を見た。

呼吸を整えながら、喝を入れるように怒鳴る。

「こないだゲーセンでやったのを思い出せ！一体ずつ落ち着いて！正確に狙うんだ！」

「…み…づき………？」

大きく見開かれた目に、涙が溜まっていく。

だけど…泣いてる暇は、今はない。

「俺はいいから早く銃を構えろ！来るぞ……！」

はつとした顔で、前方のシルフィードの集団に視線を移す。

その目には次第に…光が戻ってきた。

「いつ…たい………ずつ！」

何かの呪文のように、そう繰り返しながら…

不知火は目の前のシルフィード達を倒していく。

外しても、動じることなく…落ち着いて、一体ずつ。

いいぞ、その調子！と叫びながら…

シルフィードの攻撃をかわしながら、俺は彼女の傍に駆け寄る。

一体ずつ、一体ずつ…と小さくつぶやきながら、懸命に応戦する不知火は…

腕から血を流し、服もぼろぼろだった。

大分…やられたな。

睦月も強かったけど…シルフィードも相当なものらしい。

「すず……！」

遠くから駆け寄ってきたのは、黒髪に浅黒い肌の男。

この前携帯のカメラで見た…炎の精霊だ。

俺達の前に立ちはだかり、サラマンドラは不知火に向かって呼びかけた。

「良く頑張った！後は…」

任せろ、と目で合図し、両手を肩の高さでぐつと広げる。

呪文のようなものを低い声で唱え。

瞳を赤く光らせながら…叫んだ。

「怒れる炎よ…全てを焼き尽くせ！！！」

鼓膜を破るような地響きと共に、無数の火柱が上がる。

灼熱の世界の中で…次々に姿を消していく、シルフィード達。

目を閉じて、何か唱え続けているサラマンドラの赤いターバンは、熱風にはためいている。

まるで…ガス爆発か何かが、幾つも連続して起こっているみたいな熱さと爆風。

「サラマンドラの力って…すごいんだな」

言葉無く、こくりと頷く不知火。

と、その時。

背後に妙な気配を感じた。

「不知火！」

不知火を突き飛ばした瞬間。

俺の体は激しい風に煽られ、遠くへ吹き飛ばされる。

咄嗟に受身を取るが…

アスファルトに叩きつけられ、衝撃で身動きが取れない。

「水月！？」

駆け寄ってきた不知火を背中に庇うと、シルフィードは楽しそうに笑った。

「あら…騎士道精神ですか？それとも、美しき友情と言ったところかしら」

彼女が空中に手をかざすと。

俺達の周囲を嵐が取り巻く。

「くっ……………」

サラマンドラに危険を知らせなくては…

でも…口を開くと強い風が吹き込んできて、息が出来なくなっ

まう。

……声が出せない。

「背中がガラ空きですよ？サラマンドラ」

サラマンドラに向かい、風の刃が襲い掛かる。

まずい……

その時だ。

突如出現した水の壁に……風の刃は弾き飛ばされ、消し飛んでしまった。

驚いた様子で目を見開くシルフィード。

はっとして……振り返ると。

「ウンディーネ……！」

ウンディーネは両手を前に突き出し、何か呪文を唱えていた。

水の壁から立ち上る水しぶきに、残っていたサラマンドラの炎も、徐々に静まっていく。

攻めのサラマンドラに、守りのウンディーネ。

『同盟』というアイディアは、単なる思いつきだったのだが。

……かなり有効かもしれない。

「そこまです！シルフィード……！」

ウンディーネの声にシルフィードは、仕方がない……という様子で目を伏せた。

嵐が止む。

それを見届けたウンディーネが両手を下ろすと同時に、水の壁も姿を消し。

サラマンドラの炎も完全に消えていて。

無数いたシルフィードの分身達も、全ていなくなっていた。

重苦しい沈黙が、辺りを包み込む。

街のネオンも消え……真っ暗な闇の中に俺達はいた。

この緊迫した事態の中、シルフィードは静かに微笑んでいる。

そして。

不意に、誰かが手を叩く音が、大通りに響き渡った。
振り返ると…

「いやぁ傑作…面白いものを見せてもらったよ」

睦月が楽しそうに笑い、こちらへ近づいてきていた。

彼は警戒する俺達に…余裕の表情で笑いかける。

「でもずるいなぁ。組んでるなら組んでるって、先に教えてくれればよかったのに」

こんな惨状を目の当たりにして…

こいつはまだ、ゲームを楽しんでるつもりなのだろうか。

いつもの調子に戻った不知火が、睦月に食ってかかる。

「……………ずるいのはあんたの方でしょ！？あんなチートな技使って…」

「…そうかなあ？」

彼は首を傾げるようにして不知火に笑いかけ、次に俺の方を見た。

「でも、今日の所は…サラマンドラ・ウンディーネペアが優勢ってところかな」

「負けを認めるのか？」

睦月はくすくす笑って…何も答えない。

「負けを認めるなら…………『賢者の石』を渡してもらおう」

右手を差し出す俺に、彼は呆れたように笑ってため息をついた。

「おいおい、これで勝ったつもり？まだお互い、全力で戦っちゃいないと思うんだけど」

笑いを含んだその声にかつとなるが…苛立ちを抑えて、ぐっと低い声で言う。

「なら…見せてみるよ、お前の全力ってやつを」

ふふふ…と、睦月はまた、静かに笑った。

「全力ってわけじゃないけど…………俺の方にはまだ…もう一枚、カードが残ってる」

アスファルトを突き破り、突然俺達の前に現れたもの。

それは…土で出来た、人型のようなものだった。

無数のその物体はゆらゆら揺れながら、ゆっくり俺達に近づいてくる。

「…これは」

不安そうな顔で、不知火が俺の袖を引っ張る。

「こないだも出たの…あいつら」

土……………？

土の…精霊？

…何故だ。

あいつのパートナーは、風の精霊だったはずじゃ…？

「…………… ということだ！？これは…」

「ノーム？」

睦月は背後の闇を振り返り…土の精霊の名を呼ぶ。

低い声で返事をして、俺達の前に現れたのは…

高齢の小人のような姿をした精霊だった。

髪も髭も長く、顔の大部分は隠れてしまっている。

前髪の中から覗く、にやにやと笑う口元が印象的。

ファンタジー映画に出てくる小人とよく似た衣装は全てダークブルー

ウンで、夜の闇に半分溶け込んでいた。

よたよたと歩いてくるノームを一瞥し、サラマンドラが睦月に怒鳴る。

「てめえ……………二つの精霊と組んでるのか！？」

「…うつそお！そんなことって出来んの！？」

不意に緊張感のない声が響き渡り…

俺とサラマンドラの冷ややかな視線を受けて、不知火は「ごめん…」と

赤くなって俯いた。

睦月は…というと。

「さあね…どうなんだろう？」

そう言って、愉快そうに首を傾げる。

「ジャッジはゲームマスターに委ねられるところなんだろうけど…俺が今、二つの精霊を味方につけてるってことは、紛うことなき事実だろうね」

ゲームマスター。

『ゲームマスターが判断すれば…』

ウンディーネもさつき、そんなこと…言ってたな。

「睦月…無駄口はもう、よからう」

低い声で言うノームに、わかったよ…と笑って、睦月は俺達に背を向けた。

「次は二対二の真剣勝負か…楽しみにしてるよ。剣道もちよつとは練習してきてくれると、余計楽しくなるんだけど…ね、仁くん？」
はっとして…怒鳴る。

「待て！…！」

追おうとする俺達の前に、さつきの土の化け物が立ちはだかり。

「しもべ達よ…お相手してやるがよい」

ノームの言葉と同時に…

一斉に襲い掛かってきた。

「きゃあ！！！」

両手を耳の辺りの当てて叫ぶ不知火の前に、ウンディーネの水柱が上がる。

「ウンディーネ…」

彼女は厳しい表情で俺の顔を見て、頷いた。

俺も大きく頷いて…叫ぶ。

「応戦するぞ！不知火！サラマンドラ！」

急に名前を呼ばれたことが気に障ったらしく、サラマンドラが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「てつめえこのガキ！勝手に命令すんじゃない！」

「つべこべ言わずに行きますよ！サラマンドラ！！！」

ウンディーネがぴしゃりと言い放ち。

はいはい…としぶしぶ頷くサラマンドラ。

「早くあいつらを倒して、睦月を追わなきゃ」

つぶやくと、昨夜のように、水の塊が手の中に現れた。ごくり、と唾を飲み込んで、不知火も再び銃を構える。

「行くぞ！！！」

しかし…土の化け物は予想以上に手ごわく、数も多かった。倒しても倒してもきりが無い。

やっと全てを倒したときには、もう…

睦月達の姿は、どこにもなかった。

静かな朝が訪れ、学校の授業も平穩に終わった。

昨日校舎の裏のこの場所で、不知火にサラマンドラのことを追及したのが、遠い昔のことみたいに思える。

俺と不知火、ウンディーネとサラマンドラの4人は、額を付き合わせて昨夜のことを話し合っていた。

「で……………」

首を左右に振り、コキコキいわせながら不知火が言う。

「何なの？その『賢者の石』ってのは…」

サラマンドラが、空を見上げながら答える。

「俺達が召喚主に託された石だよ…ゲームが始まったら、これを守れってな」

どうやら、不知火は石のことを知らなかったらしい。

不機嫌な顔をした彼女の質問に、サラマンドラが面倒そうな顔をして答えている。

「で…その石はどこにあんの？」

サラマンドラが彼女に手渡したのは、ウンディーネとは違う…赤い石。

ウンディーネの青い石を右手に、赤い石を左手に持って、綺麗ねーとかつぶやきながら、不知火は太陽に透かすように、石を空にかざした。

そして、おもむろに、二つの石を近づけていく。

その様子に…

ぎょっとした表情のサラマンドラが怒鳴った。

「こらあすず！！くつつけんじゃねえ！くつつけんじゃ！！！」

びくつと体を硬直させ、不知火は不思議そうに目を丸くする。

「くつつけたら…どうなの？」

「だから！どうなるかわかんねーから、くつつけんなっつてんだよ馬鹿！！！」

「サラマンドラ…声が大きいですよ」

ウンディーネが諭すように言う…

二人はふい、とそっぽを向いてしまった。

思わずため息をつく。

……… 子供の喧嘩かよ。

「で…サラマンドラ。聞かせてくれないか？君がゲームについて…
どういう意見を持つてるのか」

深夜出会った時、無遠慮に声を掛けて怒らせてしまった反省を活かして…

今度は少し、丁寧に問いかけてみる。

「俺は…そうだな」

困った顔で頭を掻く。

「別に…叶えて欲しい願いなんてないし、元の世界に帰りたいわけでもないし…割とこの世界も面白いしな。刻一刻と変わっていくあの街の風景をずっと眺めて、どんくせーガキ共がうるうるしてんの見てるのも楽しいし」

石を奪われて消滅しさえしなければそれでいいと、彼は淡々とした口調で話す。

「敵を攻めてもいいけど、最低限守り切れればいい」と、不知火は言われていたらしい。

なるほど…そういう意味か。

それに、一連の彼の発言は、ウンディーネの『傍観者』という表現

とも一致する。

「ゲームマスターっていうのは…一体どこにいるんだろう？」

俺のつぶやきに、わからないという様子で首を振る。

「睦月達は…居場所掴んでるんだろうか？」

「さあなあ…あの様子だと…：…んー…わかんねえ」

あつけらかんと言いつ放つ彼に…がくつとうなだれるウンディーネ。
サラマンドラのノー天気さは…どこもなく不知火と似ている気がする。

「とにかく俺は消えさえしなきゃいいんだ。ウンディーネが帰りたいつーんだったら、勝ちはお前らに譲ってやってもいいぞ」

二つの石を並べて眺めていた不知火が、彼の言葉に顔色を変えた。

「ちよつと！あんた何馬鹿言ってるのよ！？」

サラマンドラの襟をぐいつと掴む。

「ゲームつてのは勝ってなんぼなの！私のことこんな風に巻き込んでいて、譲ってもいいなんていい加減なこと許さないからね！！！」

「だけとお前…願い事なんてあるのかよ？」

不知火は、サラマンドラの問いかけにぎくつと硬直する。

「こないだもこういう話したけど…別にねえんだろ？叶えて欲しい願い事なんて」

「……………だ…だけどっ…ゲームは、やるからには勝たなきゃ駄目！…やっぱり。」

そう言うと思ったよ。

「では…勝者は二組と、ゲームマスターに判断してもらえばよいのではないですか？」

ウンディーネの提案に、彼女は渋い顔をしてみせる。

「あのねえ…四組しかないのに、なんで半分が勝者なんてことになるのよ！？だいたい、水月だってどうせ、願い事なんてないんですよ？」

「まあ…なあ」

たしかに。

強いて言えば、ウンディーネを元の世界に帰してあげたいって…それくらいか。

「いい！？これはゲームなのよ！？それなのに、ゲームそっちのけで元の世界に帰りたい帰りたいってさあ…あんた、意味わかんないわよ」

早口でまくし立てて、不知火はじろりとウンディーネを睨んだ。
ウンディーネも負けじと、背筋をピンと伸ばして反論する。

「では…自分の意見を述べることの、どこが間違っているというのですか？」

「別に、帰りたいのはあんたの勝手だからいいわよ。けど…虫が良いいにも程があるって言ってるの！帰りたいから負けてくださいなんて…あんた馬鹿なの！？死ぬの！？」

ひくつと顔をひきつらせて…ウンディーネが硬直する。

しんと周囲が静まり返り…

思わず…額に手を当てる。

「お前のほうこそ……口が悪いにも程があるぞ？」

「えっ？…と………ごめんなさい」

小さく舌を出して、不知火は気まずそうにつぶやく。

「けど……とりあえずさあ、睦月が言ってたじゃん？『真つ向勝負』って」

「『真剣勝負』…じゃなかったか？」

そうそうそれ！と俺を指差し、不知火は小さく手を挙げる。

「意見あります！」

「…何だよ？」

いちいち疲れる奴だなあと思いながら訊いてみたが…

それは、意外といい意見だった。

「今までって私達、攻め込まれるばかりだったじゃない？だからさあ…4人であいつの拠点攻めてみようよ。不意打ちだったらあいつも、あんなに余裕ぶっこいてもらわないと思うし………とりあえず今夜、様子見だけでも行ってみない？」

ぼん、と手を打ってサラマンドラが明るい声を出す。

「そうだな！風の石の在り処はだいたいわかりそうだし」

「しかし…私達がむやみに近づいては、気づかれてしまいますよ？」
ウンディーネが顔をしかめる。

「気づかれない方法…か」

「いいじゃない、気づかれたって。あいつだってこの2回とも様子見て言ってたんだし、あんたのとも見に来てあげたわよって言えば？」

何の難しいことがあるのか？という顔をして不知火が言う。

…………… 大胆な奴。

「だいたい、あいつ自体が遊んでるみたいな感覚なんだし、こつちも乗っかってやればいいのよ！」今日は遊びに来たの、ちょっとお話しましょ。あんたの知ってる情報ちゃんと全部教えなさい、じゃないと正々堂々真剣勝負なんて出来ないじゃない？」って「遊んでる…か。」

危険も大きいが……………一理あるかもしれない。

冬のどんより曇った空を見上げ、不知火はぽつりとつぶやく。

「『言わないと、大好きなお姉ちゃんに、あんたが精霊使いの変態兄ちゃんだってバラすわよ』って…」

「……………お姉ちゃん？」

12月22日 その2

『あいつ、うちのお姉ちゃんにちょっかい出しててさ…』

不知火の言葉が頭を離れない。

主に携帯のメールや電話といった手段らしく、直接の接触はないらしいのだが…

『そんな怪しい奴の相手なんてすることないのに…お姉ちゃんお人よしだからさあ』

そう言つて、憂鬱そうにため息をついた不知火。

どういうことなんだろう？

やっぱり…不知火や俺と先輩との関係を知つてのことなのか。

それとも……

先輩も、ゲームに何か関わりがあるんだろうか。

そんなことを考えていたら…背後から声がした。

「仁くん？」

どきりとして、振り返る。

「今日は野球の練習じゃないの？」

不思議そうに首を傾げる不知火先輩は、まだ熱が下がらないらしい。風呂でのぼせたように、赤い顔をしている。

「あ………えつと」

俺は剣道部の友達に頼んで、道場の隅っこで素振りをさせてもらっていた。

作戦会議のために学校に連れてきたウンディーネは、まだ癒えきらない傷を回復させるために、元の泉に戻っている。

『剣道もちよつとは練習してきてくれると、余計楽しくなるんだけど…』

楽しそうに笑いながら、睦月はそう言っていた。

不知火先輩にも危険が及ぶかもしれない…と聞いたとき。

その言葉がふと、脳裏に蘇ってきたのだった。

一朝一夕でどうにかなるとは到底思えないけど…最善を尽くさなくては。

でも……そんなこと、先輩には話せないわけで。

「ちよつと…気分転換というか、精神統一というか…今はオフシーズンで時間もあるんだし、野球以外のこともトレーニングに加えたらどうかって、先輩に言われたんです」

先輩…ダシに使ってすいません。

不知火先輩は俺の苦しい言い訳を全く疑うことなく、そうなの…と目を細めた。

「先輩は…もう、授業終わったんですか？」

頷いて、にっこり笑う。

「ちよつとだけ…見ててもいい？」

その言葉に…ちよつとだけ動揺する。

「見てても…多分、面白くないですよ？俺、剣道はほぼ素人だし…」

「いいの。何となく…見ていたくて」

道場の壁にもたれて座り込んだ先輩の視線を感じながら…素振りを再開する。

バットの素振りとは違うけど…

「違う！仁、そうじゃないってば！」

姉ちゃんは…俺がバットを振っていると、いつもそんな風に注文をつけた。

『体の使い方がおかしい』だの、『ヘッドが下がる』だの…

うるさいなあわかってるよ、と…俺はいつも言い返していた。

でも…

『素振り見せてよ』

あれは、姉ちゃんが死ぬ…一週間くらい前だっただろうか。

姉ちゃんは感染症を防ぐための閉ざされた病室にいたので、俺は病室から見える病院の廊下で、バットを振って見せた。

真剣な眼差しで見ていた姉ちゃんは、最後になっこり笑って言った。

『上手になつたね…仁』

「……………なんだか、懐かしいな」

不知火先輩がぼつりとつぶやいたその一言で、急に回想の世界から引き戻される。

「こんな風に……………素振りする背中を……………いつも眺めてた」

遠い目をした先輩に……………問いかける。

「誰のこと……………ですか？」

「……………え？」

「いや……………その……………俺、不知火先輩にそんな人がいたなんて……………知らなくて」

そりゃ、先輩も高校3年生なんだし……………俺が知らない恋の一つくらいしてたつて、おかしくはないんだけど。

何だか……………すごく意外だった。
ところが。

先輩は、きょんとした目で……………俺に聞き返す。

「……………そんな人つて……………何？」

「……………えっ！？ いや……………だから……………先輩が今、素振りがどうとかがつて言つたから……………」

穏やかな表情が……………不意に強張る。

「私……………そんな事……………言つた？」

「…………………………」

冷たい風が、俺達の間を吹き抜けた。
ぶるつと体を震わせる、不知火先輩。

気のせい……………か？

いや……………確かに……………

でも、不安そうな彼女の様子を見ていたら……………何だか気の毒になつてきた。

まあいいか……………追及しても仕方ないし。

ただ……………これだけは、言つておかなければ。

「先輩。不知火から聞いたんですけど… ストーカーに遭ってるとか
って」

俺の問いに… 驚いたように目を見開く。

「…………… そう」

先輩は、更に暗い表情になって… 俯いた。

「…………… すず、そんなこと言ってたの」

「警察に… 相談したほうがいいんじゃないですか？ そいうのって
…」

「でもね！」

俺の言葉を遮るように、必死な声で先輩は言う。

「睦月さんって… すずには分かってもらえないかもしれないけど…
悪い人じゃないと思うの。風邪引いた私のこと、気遣ってくれたり
… 怖い夢見て不安だったときに、すごく心配してくれたり…」
… あの睦月が。

何だか… 想像がつかないけど。

これも全て、あいつの計算通りだとすれば…

「先輩…………… こんなこと言うの… あれですけど」

「騙されてるって… 思う？」

申し訳ないけど… 頷く。

可哀想な気もするけど、これは不知火先輩の為だ。

寂しそうに笑って… 先輩は天を仰いだ。

「… そうかなあ」

ぼんやりとまた… 遠いまなざしになる。

しばらくそのまま黙り込んで…

また俺の顔を見て… にっこり笑った。

「やっぱり、そうだよね…………… ありがとう、仁くん」

その夜。

ウンディーネと合流して待ち合わせ場所に行くと、不知火は不思議な格好をしていた。

髪はハーファップにっていて、おもちゃみたいな眼鏡をかけている。紺色のダッフルコートは…彼女には少しぶかぶかで。

「それ…先輩のやつか？」

「そ！ちよつと変装してみたんだけど…どう？」

楽しそうに言つて、くるりとターンしてみせる。

確かに……

ミニチュアの不知火先輩みたいに…見えなくもない。

「で…どうすんだよ？」

サラマンドラが呆れた様子で尋ねる。

「これで、私が囷になつてあげる！あんた達は離れた所で見てなさ
いって」

『賢者の石』の放つ魔力を辿つて行き…

俺達は、シルフィードの結界の外側に立っていた。

ここは湾岸の埋立地へ続くモノレールの出発点で、冷たい浜風が吹き荒れている。

「何か…その、変装以外につて意味だけど…策、あんのかよ？」

俺の問いかけに、彼女は曖昧な笑みを浮かべて…答える。

「…まあね」

いつも同様…ゲームのフィールドに、俺達は迷い込んだようだ。

人氣がなく、一層強まった浜風が肌を刺す。

建物の影から、不知火の様子をうかがう。

彼女は、高層ビルの谷間の広場に一人で立っていた。

街灯に照らされて、スポットライトを浴びているみたいに見える。

ウンディーネとサラマンドラは、近づくと勘付かれる可能性が高いので、結界の外で待機。

不知火の身に危険が迫つたら、俺が合図して呼ぶ手筈になっている。

睦月が現れる気配はなく…

彼女は小さく足踏みをしながら、両腕で体を抱えるようにして、寒さをしのいでいる。

気づかれていないのだろうか？

睦月が魔術を使えるのは、シルフィードと長い間パートナーを組んだ結果なのだと、ウンディーネが前に言っていた。

俺達はまだ精霊とパートナーを組んで日が浅いから、精霊がいなければ何も出来ない。

結界のセンサーに反応するものが精霊の魔力か何かなのだとしたら、気づかれなくて当然なのかもしれない。

腕時計を見ると、最初にあの場所に不知火が立ってから、30分以上が経過していた。

ふう、と小さくため息をつく。

…当てが外れたな。

『これ以上待つと風邪引くから帰ろうぜ』

不知火の携帯に、そんなメールをしようとしていたら…

ふいに、彼女の携帯が鳴った。

俺、まだ送信してないはずだけど…

不知火はポケットから携帯電話を取り出し…

硬直した。

そして……

「…やっぱりすずちゃんだ」

建物の影から現れたのは…睦月。

紺色のウィンドブレーカーに、黒の細身のズボン姿。相変わらず、フードの中の素顔は窺えない。

「あんた…何で私の携帯番号知ってんのよ？」

楽しそうに笑いながら、睦月は携帯を掲げてみせる。

「だってすずちゃん、前に俺に電話くれたろ？」

「……………」

「この寒い中外出て公衆電話で…とまでは言わないけど、せめて非通知設定で掛けてくるべきだったね…お姉ちゃんにガード甘いとか何とか言っ割には、案外ツメが甘いんだな」

「……………うるさいっ！…！」

「でも…ちよつとびつくりしたよ。やっぱ文ちゃんとすすちゃんは姉妹だね…良く似てる」

中々のアイディアだと、彼は愉快そうに言う。

「で…精霊達は？仁くんも近くにいるんだろ？」

「…そ…それより！」

不知火は気を取り直したように、びしつと睦月を指差す。

「もう一個あんのよ、あんたのこと黙らせる方法！」

「ふうん…なあに？」

「私ね…」

不知火は……………とんでもないことを言い出した。

「わかつちゃったの！あんたの正体！！！」

思わず…額に手をやりため息をつく。

「突然何言い出すんだよ…お前は」

睦月には…当然というか何というか…顔色を変える気配はない。

ひゅう、と小さく口笛を吹く。

「へえ…俺の正体？」

「そ…そうよ！大人しくこつちの要求飲まないと、あんたの正体お姉ちゃんに言うから！」

これが不知火のハツタリではない…として。

…先輩に知られてまずいような相手なのかよ。

睦月は後頭部に手をやって、困ったなあとつぶやくが…その様子はいかにも楽しげだ。

「すすちゃん…俺のこと、知ってるんだ？」

「あ…当たり前でしょ！？知ってるわよ、そのくらい…」
依然強気に、不知火は怒鳴り続けている。

「で、私の話聞くの聞かないの！？どつちなよ！？」

「…すすちゃんの話って…何？」

「…あんたの知ってること、全部教えなさい！ゲームマスターはどこにいるのか、とか…あんたの目的とか…」

「…それは、難しいなあ」

睦月にはやりと笑って…つぶやく。

「言えないわけ！？…てことはあんた、ゲームマスターの居場所知ってるのね！？」

彼は笑ったまま…答えない。

…てことは、やっぱり向こうがかなり優勢ってことか。

のらりくらりとかわす睦月に激昂した様子の不知火が、また怒鳴る。

「言いなさい！」

「言えない」

「だったら、やっぱりお姉ちゃんに…」

「それは…困るな」

睦月の周囲に、一陣の風が巻き起こった。
はっとして…叫ぶ。

「不知火！！！」

睦月が突き出した右手の先から放たれた風の刃が…不知火に迫る。
駆け寄ろうとするが…間に合わない。

不知火はぎゅっと目をつぶり、両腕で顔を覆うような姿勢になり…

…

突然。

眩い光が辺りを包んだ。

その中心に目を凝らすと…

白い光は不知火の体を包み込み。

風の刃は…かき消されていた。

光が消え…街灯の明かりだけの、元の暗闇に戻る。

呆然としている不知火の肩を、遠くから駆け寄ってきたサラマンド
ラが揺さぶる。

「おい！大丈夫か、すず！？」

「……………うん」

「仁、今の光は………？」

ウンディーネも近くに来ており、俺にそう尋ねてくるが…

わからない、と首を振るほかない。

一体…何だったんだ？

ふっ…と微笑んで、睦月はまた、フードを被った頭に手をやる。

「参ったな。ちよつとした脅しのつもりだったんだけど…皆さんお揃いとはね」

「う………うっさいわねえ！何が脅しよ！？やつつける気まんまんだったじゃない！？」

気を取り直した様子で…不知火が怒鳴る。

「…すずちゃん？」

「な…によ…っていうか、気安く『ちゃん付け』で呼ばないでくれない！？」

「さっきの…ハツタリだろ」

「ち………」

明らかに動揺した様子で…不知火は首を振る。

「違っわよ！本当に…私は本当に、あんたの正体わかったんだから！睦月はこんな風に可愛い妹をいじめるひどい奴だって、お姉ちゃんに言いつけてやるからね……！！」

「…言いつけるのは構わないけど」

首を傾げるようにして…にやりと笑う。

「その前に…可愛い妹の秘密も、ちゃあんとお姉ちゃんに教えてあげておかないとね」

カシャリ、というシャッター音。

睦月は俺達の方に携帯を向けて…どうやら写真を撮ったらしい。

「それ………まさか」

携帯を操作しながら、さも愉快そうに睦月が言う。

「だって…俺のことだけばらすんじゃ、フェアじゃないだろ？文ちゃんには公正に判断してもらわなくちゃ」

「ち…ちよつと、駄目！絶対駄目だったら……！！お願い……！！」

不知火が必死の形相で、睦月に取りすがり…

腕を掴んだまま目を見開いて… 呆然としゃがみこんだ。

彼女の手をすり抜けると、睦月は風に乗って、ふわりと空中に浮かぶ。

「今日は遊びに来てくれて嬉しかったよ… また明日の夜」

「ま… 待て！…！」

走り寄ろうとする俺の前を、突如巻き起こった竜巻が塞ぎ。

「またこの場所で… 明日は約束通り、石をかけて戦おうじゃない」

「待ちやがれ！ この野郎」

サラマンドラが炎の塊を放つが…

強い風に弾かれ、夜の闇に消えた。

「無粋ですよ？ 今日とは人間同士の話し合いの場だったというのに」
シルフィードが現れ… につこり微笑む。

バイバイと手を振った睦月と、それに寄り添うように空に浮かんだシルフィードは… ビルの向こうに消えた。

帰り道… 不知火はずっと無言だった。

付き添って、家の前まで行くと…

不知火よりももっと暗い顔で… 先輩がぽつんと立っていた。

「お… ねえ… …… ちゃん」

戸惑うように… つぶやく不知火に。

彼女は冷たく… 問いかける。

「どうということなの？」

その手には… 携帯電話が握られており。

「… 一体どういうことなの？ あなた達と一緒にいたの… あれ、精霊でしょ？ ねえ… …… 精霊って… ゲームって… 一体何なの？ あなた達は一体、何をしようとしているの！？」

「先輩…」

伸ばした手は… ぴしゃりと振り払われた。

「このことがあったから… あなた達は私に、『睦月さんに近づくな』

って言ったの？」

混乱した様子で、ぶんぶんと大きく首を振る。

「…わからない」

「…………お姉ちゃん」

「わからないわよ！すずの考えてること…全然わかんないわ！」

両手で頭を抱えるようにして…彼女は地面にぺたりと座り込んだ。
白い頬を涙が伝い…

俯いたまま、先輩は感極まった声で…叫んだ。

「もう私のことは放つといて！すずも仁くんも…大っ嫌い！！！」

12月23日 その1

昨夜…不意に掛かってきた電話。

『水月…………私、もう無理』

不知火は、今まで見たことがないくらい…落ち込んでいた。

『お姉ちゃんにあんな事言われてまで…ゲームを戦うパワーはないよ』

『仁、しっかりしてください。あなたはゲームのプレイヤーなのですから』

ウンディーネはそんな風に、俺を励ましてくれたが…

彼女自身も動揺しているのを、懸命に抑えているように見えた。

『こんな風に、あなた達の大事な方を巻き込むことになるとは…予想していませんでした』

『ウンディーネはそんな事、心配しなくていいさ…ちゃんと話せば先輩も、きっと分かってくれると思うし』

努めて明るい調子で、彼女にそう言ってみたのだが…

不知火ほどじゃないにせよ、俺もショックを受けたことが…伝わってしまったらしい。

別れ際の、あの…心細そうな瞳。

俺がゲームを放棄してしまうのではないかと、不安になったのかも…
しれない。

あの目…………

『仁!?!』

姉ちゃんの…切羽詰った声を思い出した。

あれは……………忘れもしない。

亡くなる前の日の夕方。

姉ちゃんは肺炎にかかって、相当弱っていた。

沢山の機械に囲まれていて、管の繋がったその姿は痛々しくて…見

てられなかった。

『明日の試合…頑張るから』

出来るだけ、いつも通りの声を出そうとしたけど…上手くいかなくて。

涙が出そうになって…じゃあ、と小さく手を振って背を向けた俺に…姉ちゃんは必死な声で…呼びかけたのだった。

苦しそうな息で…姉ちゃんは弱々しく微笑んだ。

『がんばってね…またあした』

そっか。

考えたことなかったけど…あれが姉ちゃんと話した最後の言葉だ。

あの時の姉ちゃんの瞳と…ウンディーネの瞳が重なる。

「投げ出せるわけ…ないよな」

暗い部屋でベッドに寝転び、天井を見つめながら。

俺は色々なことを…ぼんやり考えていた。

不知火先輩の、あの取り乱した様子。

睦月は彼女に、全てを話したのだろうか？

一体…どんな風に話したんだろう。

俺達を悪者にするこゝとなんて、きつとあいつには…何でもないことだろう。

昨日…先輩、言ってたな。

『悪い人じゃないと思うの』

彼女はすごく一生懸命な様子で、睦月のことを弁護していた。

先輩は優しいから…あいつのこと、本当に信じてるんだろうな。

「睦月…何が目的なんだろう」

俺達を動揺させるため？

たったそれだけのために…先輩にあんな風に、取り入る必要があるだろうか？

あんなに手の込んだことをしなくたって、ゲームのフィールドに先輩を連れて来さえすれば、同じ状況は作れたはず。

それなのに、メールだとか電話だとかって…

奴がゲームを楽しんでいる…一環なのか。

それとも……何か別の目的が？

ゲームで勝利することで、あいつは一体何を得ようとしてるんだろう。

『あんたの正体』

不知火の言葉に、睦月は若干…動揺したようだった。

あいつ…一体何者なんだろう。

考えても考えても…何の手がかりもない今の状況では…何も思いつかなかった。

手がかり……

………そうだ。

俺はベッドから起き上がって…

机の引き出しにしまってたあった、一枚の名刺を取り出した。

大学のキャンパスというものに、足を踏み入れるのは初めてだ。

大都市の中にありながら、敷地内には鬱蒼と緑が生い茂っていた。

一本道の両側には、葉の落ちきった落葉樹が立ち並んでいる。

「ねえ、水月…どこ行くの？」

「こないだの講演会…覚えてるか？」

『四精霊について、発表していない発見が沢山あってね…』

俺に名刺を渡した…あの学者。

今朝電話をしたら、学者は喜んで研究室の場所を教えてくれた。

『楽しみに待っているよ』

嬉しそうな声で、彼は最後にそう言った。

「あの人に…『精霊に興味があるなら来い』って、前言われたこと思い出したんだ」

「………精霊!？」

目を丸くする不知火に、頷いて答える。

「ゲームのこと…もっと分かるかもしれないだろ？それに…睦月が

先輩に近づく目的も」

「あの……水月？」

不知火は……何か言いたげに俺を呼ぶ。

「実はさ……睦月のこと……なんだけど」

「………何だ？」

彼女は、ものすごく迷ったあげく……やっぱりいや、と曖昧に笑う。

「………何だよ」

「いや……後でちゃんと話す」

………何だろう？

変な奴。

指示通り冷たい石造りの校舎を進むと、『民俗学研究室』と書かれた部屋を見つけた。

「失礼します」

古い書物の森の奥で……

学者は古い肘掛け椅子に座り、俺達を待っていた。

「やあ……来てくれるとは光栄だな」

にこやかにそう言っ

それで……と身を乗り出して俺達を見る。

「今日は何を聞きに来たのかな？」

「昔、精霊使いがいたって……先生そうおっしゃいましたよね？四精霊について、未発表の発見が沢山あるって……今日は……その事を聞きに来ました」

「………そうだろうと思ってたよ」

彼は立ち上がりながら……つぶやく。

………どういう意味だ？

「もっと言っと……きつと今日、君達がここを訪ねて来るだろうと私は思っていた」

「………何で？」

不審そうな目をした不知火の方に、彼はゆっくりと体を向ける。

「不知火ずずさん…炎の精霊サラマンダラのパートナーだね？」
そして…とつぶやいて、今度は俺の方を見た。

「水月仁くん…君は水の精霊ウンディーネのパートナー」
どうして…それを。

学者は鋭い視線を向ける俺に、そう怖い顔をしないでくれたまえ…
と微笑みかけ。

堂々とした態度で…俺達の前に立ちはだかった。

「私は土橋研二郎…君達が探している『ゲームマスター』だ」

「数ヶ月前のことだ」

土橋は、コーヒーマシンを一口啜り、そんな風に口火を切った。

彼は宗教分布について調査をしていく中で、『精霊使い』と名乗る男のことを知る。

「男の身の世話をしていた、村の役人の日記が見つかったね…
私はこの石を使って、人間を創り出してみせる…そう言って、『
賢者の石』を見せたのだと記されていた」

「そんな現実離れた話…役人は信じたんですか？」

「精霊使いは、多くの奇跡を起こした…と彼は日記に記していてね
…難病の村人を回復させるだとか、嵐の来る日を予言して的中させる
だとか…だから、彼は本当に精霊使いが人間を作り出すものだとか
信じ込んでいたようだ」

窓際に立ち、土橋は窓の外を眺める。

「だが…実験は失敗してしまった」

「代わりに…とんでもないものを呼び出してしまった」

精霊使いの手の中にあつたのは、四つに割れた『賢者の石』。

『君には姿が見えていないかもしれないが…ここには4体の精霊がいる。
炎の精霊サラマンダラ、水の精霊ウンディーネ、風の精霊シルフィード、土の精霊ノーム…彼らは今半分眠っているような状態
だが、目を覚まし暴れたしたら大変なことになる。それだけは何とか
…食い止めねば』

四つに割れた『賢者の石』は、四つの場所に隠された。

一つは西の神社の泉の中。

一つは東の巨木の根元。

一つは南の海。

最後の一つは北の大きな池の中。

神社にあったのは…俺が見つけたウンディーネの石。

巨木は長い年月の間に切り倒されてしまい、今では電気街のある大きな街になっている。

つまり不知火の…サラマンドラの石。

南の海は埋め立てられ、賑やかな街が築かれた。ここにあったのが…シルフィードの石。

最後の一つは、大学の北にある、大きな公園の池の底に沈んでいたのだという。

そして、それを見つけたのは…風群睦月。

「ねえおっさ…じゃなくて、先生！あいつのチート能力は反則にならないの!？」

不知火が突然怒鳴るが…

『チート』？

イライラした様子で、不知火はもう一度土橋に言う。

「だから…2つの精霊とペア組んでるなんて反則にならないの？ゲームマスター的には」

「それは……難しい問題でね…彼がシルフィードとペアを組むに至った過程が…私にもよくわからないだよ。君達は、精霊に『一緒に戦いましょう』と言われて、承諾して…パートナーになったんだろ?だが……彼は生まれた時既に、シルフィードのパートナーだった。自らの意思でパートナーとなったのは…ノームのみということになるから」

「生まれた時すでにゲームのプレイヤーだったなんて…何故、そんなことが？」

俺の問い掛けに、土橋は困った様子で首を振る。

ゲームマスターと言っても…何でも知ってるというわけではないらしい。

でも…………

「ゲームって…一体何なんです？」

それは…ゲームマスターならば、答えられるはず。

「二人がやってみての通りだよ…精霊同士の殺し合いだ」

思いがけない答えに…体が一瞬、こわばるのが分かった。

「最後の一人が賢者の石を一つにして、勝者となったとき…その精霊はより力の強い、高位の精霊となることが出来る。しかし彼らのそんな戦いが、我々の世界を惨事に巻き込むことも…無い話では無いだろうね」

世界を惨事に巻き込む…なんて。

確かに俺達が戦った後…街にはその爪痕が、はつきり残ってしまっていた。

『ガス管の爆発事故』とか『水道管の破裂』とか…

そういった、現実世界に起こりうる出来事に変換されてはいたけれど。

「君達の精霊はゲームのことを、そんな風には話さないのかね？」

ウンディーネ…そんな事、一言も言っただけ。

「君達は精霊のことを非常に信頼しているようだから、こんなことを言うのはなんだが……………要は…精霊達が更に大きな力を持つための戦いに、君達は利用されているんじゃないか？ということなんだ」

あいつが……………俺を利用してるなんて。

そんな事…………

信じられない。

あんなに必死で、あんなに懸命な…ウンディーネが？

黙り込んだ俺達をなだめる様に、穏やかな声で土橋が言う。

「私は日記の中の儀式に沿って、ゲームを取り仕切る権限を持つことになったんだが…精霊自体と接触したことは殆ど無いからね。彼らが本当は何を考えているか、なんて……………私よりむしろ、君達の

方がよく分かっているのかもしれないが……あくまで老婆心からの忠告だと思って……心の奥にでも留め置いてくれると有り難いな」土橋の話にどこか……違和感を感じてしまう。

どうしてだろう？

別にこれといって、おかしい事は言っていないし……

俺達の正体もぴたりと言い当てたし……

でも……そう言えば。

「さっき、実験は失敗した……とおっしゃいましたね？」

「ああ……それがどうかしたかね？」

「失敗したのに……精霊使いはどうして、精霊なんか呼び出したり出来たんですか？」

「これはあくまで日記の記述だが……『人柱となった娘の魂が、四精霊を呼び寄せた』というんだ」

「……人柱？」

「以前君達の学校の講演会で、私が話したのを覚えているかな？」彼の問い掛けに……頷く。

『天災を鎮めるために、人身御供を捧げる』という話じゃあ……

『人の命と引き換えに、精霊を召喚する』って……俺がぼんやり思い浮かべたこと。

それが的中したってことか。

精霊使いが居を構える村から遠く離れた西の村では、水害が相次ぎ田畑も荒れ果て、村人達は飢えに苦しんでいた。

藁にも縋る思いで相談を持ちかけた村の領主に、神主は人柱を立てることを提案する。

『水の神は怒り、人柱を欲しておられます。川の神に若い娘を生きたまま捧げれば、神の怒りは静まることでしょう』……と。

白羽の矢が立ったのは、貧しい百姓の娘だった。

娘は数日後、領主の子息と結婚することになっていたが、信心深い領主は神主の言葉に従うこととし、泣く泣くその縁談を取やめたの

だという。

娘は異国から渡ってきた宣教師に洗礼を受けた、いわゆる『キリシタン』であつたが…

『異教の神の為であっても、みんなの助けになるのなら』と快諾したのだそうだ。

かくして彼女は人柱となり、川のほとりに生き埋めにされたのである。

「精霊使いは…『人柱となって死んだ乙女の清らかな魂が、精霊達を呼び寄せてしまったのだ』と役人に語ったそうだよ」

キリシタンと、神社と、精霊…か。

なんだか、色々な宗教が入り混じって…とてつもない話だ。

精霊をこの目で見ている俺ですら…容易には信じ難い気がする。

土橋は難しい顔で、机の上の冷めたコーヒを一口啜る。

「しかも…この話には裏があつてね」

おそらく彼も、俺と同じような疑念を持ったのだろう。

土橋は日記の記述の裏を取ろうと、その村の記録を調べた。

すると……

「この件から一月も経たないうちに、領主の長男は祝言を上げているのだよ」

相手は村の、別の有力者の娘。

領主と親戚関係を持った結果、その有力者は更に大きな力を持つことになった。

「有力者はおそらく…自らの娘を領主に嫁がせようと、前々から目論んでいたのだろうね。だが、そのためには…」

「キリシタンの娘が邪魔だった…」と

なるほど…それなら、有り得ない話じゃなさそうだ。

「信じられない!!! 何て奴らなの!?!」

不知火はどうやら、その娘に感情移入してしまったらしい。

真っ赤な顔で、土橋に怒りをぶつけている。

それを宥めるように…彼は小さく頷いて、また口を開いた。

「しかし…天罰も下ったようだよ…それから数日後、有力者や神主、それにその一件に関わった者全てが…不審な死を遂げている」

「不審な死？」

聞き返す俺に…彼は低い声で言った。

「殺されたのだよ…刀でばっさり斬り捨てられてね」

刀……………？

「そんなの当然よ……！」

不知火は彼等の悲惨な末路を聞いても、まだ怒りが収まらないらしい。

「きっと結婚するはずだった恋人か、親か兄弟がそのこと知って……」

「いや……………下手人はおそらく…婚約者ではない」

犯人と目されるのは、その日を最後に姿を消した…娘の幼馴染の青年。

「それって…つまり……………本当にその子が好きだったのは…婚約者じゃなかったかもしれないってこと？好きじゃない人と結婚させられそうになった挙句に、その事で他人に妬まれて、殺されちゃったって事!？」

不知火は今にも泣き出しそうな顔で…ぎゅっと両手の拳を握りしめている。

人柱事件と…犠牲になった娘の恋人が起こした惨殺事件……………か。

「まあ…今の話の後半は、人柱となった娘の村の歴史を調べていて思いついた…私の勝手な憶測に過ぎないのだがね」

確かに…単なる儀式の話に留まらない、様々な人の利権や、憎悪や

……………

そういうものが絡み合った話だとすれば…日記の記述もそれなりに納得出来る。

姿を消した青年……………

刀でばっさり……………

はっとした。

あの刀さばき…まるで本物の武士みたいな。

まさか……

でも…もしそうだとすれば、あいつは何者なんだ？

精霊が存在するくらいだし、幽霊の一人や二人…いたっておかしくはないけど。

でも……

『生まれた時からシルフィードのパートナーだった』って…そんなこと有り得ない。

「…ねえ、水月もそう思うでしょ!？」

「……………えっ？」

突然話を振ってきて…不知火は恨めしそうな目で俺を見た。

悪い……………でも。

「最後にもう一つだけ、教えてください」

『風群睦月』の目的……………

その疑問を、俺は土橋にぶつけてみた。

「それは……………私にもわからない」

彼は再び窓の外の、冬枯れの木々に視線を向ける。

「私があの若者に会ったのも、たった一度きりだからね…ただ…彼には……………」

種愉快的な趣があった。彼は精霊の力を使って…何かとんでもないことを企ん

でいるのではないかと…思えてしまうときがあるんだ」

『楽しみにしてるよ』

そう言つて…にやりと笑う、睦月。

フードにすっぽり包まれた…あいつの真意は一体、どこにあるんだろう。

「しかし、あくまで第三者の立場でゲームを取り仕切るのが私の役目。私が直接

彼に…手を下すことは出来ん」

土橋は立ち上がり、俺達をじっと見て、頼みがある…と、きっぱりした声で言う。

「…………睦月を止める……ですか？」

俺の言葉に……

土橋は思い詰めた表情で、小さく頷いた。

12月23日 その2

日曜日に一緒に入ったファーストフード店で、同じ席に座って不知火と向き合う。

あの時はまさかこんな事態になるなんて、予想だにしていなかった。展開が早過ぎて…何だか目が回りそうだ。

「……………どう思う？」

不知火が、ハンバーガーを口に運びながら尋ねる。

どう答えようか迷って…コーラの入った紙コップをストローでかき混ぜる。

細かく砕けた氷がぶつかり合って、ガシャガシャ小気味良い音がした。

「俺……………何か、いまいち信用出来無いな。あのおっさん」

「…ウンディーネのこと、悪く言ったから？」

思わず…眉をひそめてしまう。

何だ？その…突っかかるような言い方は。

呆れて一つため息をつく、小さなテーブルに頬杖をついて、不知火の顔を覗き込む。

「ゲームマスターは第三者の立場でなんとか…って言ってた割に、俺達に味方するようなこと言ってただろ？だから…何か、変だなって」

「そりゃ…睦月が悪い奴だからでしょ？」

不知火は昨夜のことがあって、相当腹に据えかねているらしい。

審判だって人間だし…勝って欲しいとか負けて欲しいとか、思うこともあるだろうな。

でもきつと…誤審を下すことは許されないのだろうし。

「確かに…そうかも知れないけど」

「私は完全にあのおっさんの、サラマンドラが私に嘘ついてるみたいな言い方が気に食わなかったな」

……なんだ。

さっきの言い草は…自分がサラマンドラのことと腹立ててるから、俺もそうだと思ったわけか。

何故だか…少し拍子抜けした気分になる。

不知火は何か考え事をするような顔で、両手を頭の後ろで組んだ。

「おっさん自体さ、あんましゲームのこと分かってないんじゃないの？だっておっさんはただ、『ゲームマスターになりませんか？』

『はい、なります』って…私達がプレイヤーになったのと同じようにして、ゲームマスターになっただけなんだから」

土橋が本当にゲームマスターなのか…最初は少し、疑問に思っていたが。

その事には…明確な証拠があった。

『これが…ゲームマスターに与えられる法衣だよ』

白い法衣は、ウンディーネの泉や賢者の石みたい…魔力を秘めているらしき、かすかな光を放っていた。

『ここを見てくれたまえ』

彼は古い書物のような物を俺達の前に広げる。

『この模様…分かるかな？』

茶色く変色した紙には、法衣に刺繍されているのと同じ模様が記されており。

『これがさっき私の話した…精霊使いについて書かれた日記だ』

そこに描かれていたのは『精霊使いの儀式用衣装』で…白い法衣と同じ形。

『この日記に記されていた手順を踏み、ある儀式を行ったら…これが現れたんだ。そして天から声がした。『汝はゲームを取り仕切る、ゲームマスターとなった』…とね』

「そう…だな。確かに…まだどう取り仕切っていけばいいのか、迷ってるような気もした」

「でしょー？だから…やっぱ睦月だよ」

ポテトを数本口に放り込み、不知火はうんうんと頷いて、自分で自

分に賛成の意を表す。

「ゲームのエンディングがどうあれさ…とにかく今、私達がやるべきことは睦月を倒すことでしょ？それがはっきりしただけでも、よかったじゃない」

「まあ、なあ……………」

睦月睦月って……………こいつ、かなりキレてんな。

状況をシンプルに考えれば…確かにそうだ。

睦月が悪い奴で、何かとんでもないことを企んでいて、その為に賢者の石が必要で…

俺も不知火も、ゲームマスターさえも…あいつに踊らされているのだとすれば。

睦月を倒す…か。

不知火先輩は……………何て言うだろう。

けど……………今の俺達に出来ることは、あいつと戦って勝つことだけだ。

反応を待つようにじつと俺を見つめる不知火に、そうだな、と笑いかける。

「とにかく…今夜の決戦か」

うん、と大きく頷いて…

「あ……！そうだ……！」

突然立ち上がった不知火に……………周囲の視線が集まる。
はあ、とため息を付いて…俯く。

「……………またかよ」

「何が？…じゃなくて、睦月のこと……！」

不知火はトレイに敷かれていた紙をひっくり返し、バッグから取り出したボールペンで『かぜむれむつき』と書いた。

「……………何だ？」

「あのさ水月…テレビって、よく観る？」

「……………まあ、それなりに」

「男のアイドルとかって…分かる？」

……何が言いたいんだ、こいつ。

不知火は平仮名の下に、ローマ字で『KAZEMUREMUTSU
KEI』と書いて…

「よく…見ててね」

そう言つて、三箇所にぐるぐるつと丸を付けた。

「K…E…I…?」

「そう、KEI!」

KEIって……

思い出した。

おふくろがカワイイカワイイって騒いでた…あのアイドルか。

何でもモデル出身でルックスは抜群だし、ドラマでの演技力も買われて、今じゃ相当な売れっ子だとかって…聞いた。

そいつの写真を携帯の待ち受けにしてる、クラスの女子も多い。
でも……

「何だよ？KEIって」

「水月知らないの！？あの超キザなアイドル!」

「…そりゃ、知ってるけど」

それが睦月だつて……言うのか？

「KAZEMUREMUTSUKEIの…最初と真ん中と最後の文字
を取るとKEIになるでしょ？あいつの名前つて芸名で、本名もじ
つてつけたんだつて！それに身長も180センチつて睦月と同じく
らいだし、年もあんなもんだし…それに、声だつて」

KEIって奴の声…なんて、俺は思い出せないぞ？

「お前…アイドルなんかに興味あつたんだな」

ちがーう！と不知火は大きく首を振る。

「KEIが好きなのはうちのお姉ちゃん！ラジオとかドラマとか…
あいつが出てると必ずチェックしてるんだもん、好きじゃなくても
分かるようになったちゃうわよ」

先輩が…アイドル……か。

何か…すごく意外だ。

ちよつとショック………っというか

それにね…と、不知火は辛そうな顔で俯く。

「昨夜さ…メール阻止しようとして私、あいつに掴みかかってっただでしょ？」

…そう言えば。

あの後…呆然とした顔で、ぺたりと地面に座り込んだ不知火の姿を思い出した。

「………顔…見たのか？」

こくり、と彼女は大きく頷く。

「街灯のあたりが丁度真正面から当たって………あいつ、KEIに間違いない」

睦月が…KEIってアイドルだなんて。

そんな事…あるのか？

「そいつが本当に睦月なら…何でそんなにゲームに拘る必要があるんだ？」

売れっ子アイドルなら、別に欲しい物なんてないんじゃないだろうか。

一般庶民の感覚からすると…そんな風に思ってしまうけど。

俺の問い掛けに…

不知火は目を白黒させて唸った。

「ん………わかんない」

「………だろうと思ったよ」

夜中に泉に立ち、ウンディーネに会う。

「私が…仁を………騙しているって言うんですか？」

彼女は泣きそうな顔で…じっと俺を睨む。

「どうして？何故…私がそんなこと、しなくちゃならないんですか？」

予想以上の怒り心頭ぶりに…俺は大いに動揺してしまった。

「いや、悪い…違うんじゃないかなとは…思っただけだ」

「違うに決まっています！私は……あなたのパートナーなんですよ！？」

どきりとして…彼女の青い瞳を見つめる。

「私は…仁のことを、パートナーとして心から信頼しています。まだ出会って数日しか経ってませんが…それでも、ずっとずっと一緒にいたような気がします。あなたは私のこと…本当に気遣ってくれて、元の世界に戻るようになって…一生懸命戦ってくれて。だから、私……あなたに嘘なんて、ついたりしません」

ウンディーネの目から大粒の涙がぼろぼろこぼれ…泉に小さな波紋が幾つも出来る。

真っ直ぐな彼女の言葉に……

心臓が…張り裂けそうだった。

「いや……ごめん」

俺…何やってんだろ。

「ウンディーネ、俺…お前のこと信じるよ」

彼女は水の精霊で…人間じゃないんだぞ？

「だから……そんなに泣かないで」

こんな風に切なくなっただって…仕方ないのに。

俺の差し出したハンカチを握り締め、彼女は弱々しく微笑んだ。

「すみません。なんだか…動揺してしまって」

動揺したのは…俺も同じだ。

「ゲームマスターは…何か、勘違いをなさっているのでしょうか？」
勘違い……か。

昔の言葉で書かれた、赤茶けて所々虫食いもある書物から、読み解かれた事実なんて…

確かに若干の誤解があっても、おかしくはない気がする。

「今度会ったら…ちゃんと گفتくよ。お前達はそんな、悪い精霊じゃないって」

ほっとしたようなウンディーネの微笑みに…また、心臓が大きく脈打った。

「仁……あなたが『先輩』と呼んでいた……少女のことなのですが」
彼女は昨夜の出来事を、サラマンドラと一緒に少し離れた所から見守っていたらしい。

「何故か……初めて会った感じがしないんです」

『あの人見て、何か感じないか？』

サラマンドラも……そんな事を言っていたらしい。

でも……それが何なのか、はっきりしたことは二人にも分からないという。

「あの人は……どこか、私達に近いような気がします」

不知火先輩が？

……どうということだろう。

俺の姉ちゃんにウンディーネが見えたように……不知火先輩がサラマンドラのパートナーになっていた可能性だって、無くはないのかもしれない。

でも……精霊に近いって………何だ？

約束の場所に到着したとき、まだ他の精霊達の姿はなかった。

静かな広場に……浜風が吹き荒れる。

ボーッと遠く、汽笛の音がした。

しばらくしてやって来た不知火とサラマンドラも……硬い表情で押し黙っていた。

いつもみたいに、暢気に喧嘩している気分にはなれないのだろう。

「先輩……どうだった？」

少し寂しそうな顔で……不知火が微笑む。

「もう睦月とは会わないって……言ってた」

「もう……って」

「会ったんだって、今日……睦月に。でもね」

『私はすずの味方だから』

先輩は笑って……そう言ったという。

『すずを傷つけようとする人と、一緒になんていられない』……と。

いつてらっしゃいと手を振って、いつもの優しい笑顔で見送ってくれたという…先輩。

何だかその光景が…目に浮かぶ。

「私…決めたの」

不知火は大きく深呼吸をして、俺の顔を見てきっぱり言った。

「絶対あいつに勝って……お姉ちゃんに『ごめんなさい』って謝らせてやるんだ！」

思わず吹き出してしまい…不知火は不満そうな顔で俺を見た。

「…何がおかしいのよ？」

「いや…何も」

ただ…

きょうだいいっていいな……って、思っただけだ。

なんとなく無言になって…どのくらい待った頃だろうか。

睦月が…現れた。

「ごめんね…遅くなって」

目を細めて笑う…その男は。

さつきCMで観てきたばかりの…そのままの姿だった。

ひよろつとして背は高いが、その体つきは華奢でどこか女性的な印象を受ける。

色素の抜けた茶色い髪は、黒い瞳を半分覆い隠しているが。

今日はフードで、顔を隠したりはしていなかった。

KEI……か。

不知火の言ったこと…本当だったんだ。

睦月は昨夜まで同様、首を傾げて楽しそうに微笑む。

「そんなに…俺が珍しい？」

動揺した様子で…不知火が尋ねる。

「…もう…顔隠すのはやめたの？」

「だって…バレちゃったみたいだからね。それに」

自信ありげな様子で振り返る、睦月の背後の暗闇には…

シルフィードとノームが…静かに控えていた。

「今日は真剣勝負って約束したし…フードは正直邪魔だから」
ふっ…と笑って、彼は一步前に進み出る。

「でも…」

はっとして…不知火を背中に庇う。

「最後に一度だけ…警告させてもらうよ」

「……………何だ？」

睦月は、警戒する俺を楽しそうに見つめ…不知火に向かって微笑んだ。

「悪いことは言わないから…石と精霊をこちらに渡しなよ」

「…何ですって!？」

「そうすれば戦わずに済むし……………」

ゆっくりと俺達の顔を交互に見て…睦月は星の見えない、真っ暗な空を見上げる。

「君達の大切なお姉さんが、悲しむこともないだろうし」

…どきんと心臓が高なる。

同じく動揺したらしい不知火が…すかさず彼に反論する。

「お…お姉ちゃんは……………あんたなんかもう知らないって言ってたわよ!？」

「そうだね…確かにそう言われた。でも…悲しんでると思うぜ?文ちゃんは……………俺と君達が傷つけあうことをさはっとした。」

『悪い人じゃないと思うの』

そう言って、寂しそうに笑っていた…先輩。

睦月は…やっぱり……………

腹の底から…沸々と怒りがこみ上げてくるのが分かった。

「それが…お前の狙いか？」

感情を押し殺して…低い声で彼に問いかける。

「俺達の大切な人を盾にして…お前はそこまでしてゲームに勝ったのか？」

「盾になんて…心外だなあ」

睦月は…相変わらずの、愉快そうな笑顔で俺を見る。

「そんなことしてるつもりは全然ないんだけど」

「してるじゃない!!!あんたってサイテーよ!!!」

「サイテーか…しょうがないな」

やれやれという様子で、睦月が額に手をやり…

長い指の間から、柔らかそうな髪がさらさらと零れ落ちる。

「まあ、誰に何と言われようが俺は構わないよ。俺はゲームに…何としても勝たなくちゃならないんだから」

睦月が言い終わるのと同時。

ぐらつと地面が大きく揺れた。

「何!?!」

「すず!!!」

サラマンドラが厳しい声で叫び、不知火に銃を投げる。

急に強い風も吹き始め。

睦月の髪は、荒れ狂う風にさらさらなびいて。

ウンディーネの瞳が、青い光を放ち始める。

俺の右手には、青白い光の球が現れ。

不知火は大きく深呼吸をして…銃口を真っ直ぐ、睦月に向けた。

睦月は一度軽く目を閉じて…………

かっと思開くと…良く通る声で、高らかに宣言した。

「さあ…ゲームを始めよう」

12月24日 その1

まず、最初に仕掛けたのはサラマンドラだった。

「おらあ!!!」

炎の塊がノームに向かって飛び。

横から吹いてきた突風が、炎をかき消してしまう。

ちっ、と小さく舌打ちをする…サラマンドラ。

「おい、仁つつたか？お前…」

「ああ」

「仁…………あの兄ちゃんがやれるか？」

サラマンドラは…精霊達の背後に回った睦月を、厳しい視線で見つめる。

「正直なところ…ノームは隠れてると厄介だが、こうやって出張って来ちまえば大したことはねえんだ」

四精霊の中で、ノームは守備も攻撃も三番手なのだという。

「でも…シルフィードがピンピンしていると、あいつのこと庇っちゃうから、埒あかねえんだよな。だから俺は…先にシルフィードをやつて、その後すぐにノームを叩く。ウンディーネは」

突如、周囲に幾つもの水柱が上がり。

ウンディーネは…ぎよっとする俺達の方をすまし顔で見た。

「私はこれでよいのでしょうか？」

「…………ああ。頼むわ」

ウンディーネには、完全に守備に回ってもらうことにして。

「あの…私は？」

不安そうにつぶやく不知火に…サラマンドラはにやりと笑いかける。
「お前は俺の援護だ！シルフィードの分身達と、土人形達…あれを出来るだけ減らしてつてくれ。ウンディーネの水柱に隠れながら…うまくやれよ」

「よっし、わかった!!!」

ガッツポーズをして…不知火はどこかへ駆けていった。

「よし…じゃ…健闘を祈るぜ！」

「ああ！」

サラマンドラと、がっちり握手を交わし。

俺は…睦月の方へ駆け出した。

睦月の手から放たれる風の刃を避けながら、周囲を必死で走り回る。隙を見て、水の球を彼に向かって投げつけるが…

飛んできた風の刃と相殺されて、空中に消えてしまった。思わず小さく舌打ちする。

でも…まだだ。

まだ…反撃のチャンスはあるはず。

また、風の刃を回避しながら走り…水の球を投げつけるが。

今度も…駄目。

荒い息を整えつつ…流れる汗をぐいっと拭う。

こないだウンディーネと一緒にいた時と違い、じっくり力を溜める時間が無いので…

投げられる水の塊の大きさが…どうしても小さくなってしまふ。

「今日は…チャンバラにはお付き合いもらえないのかな？」

相変わらず、余裕の様子で…睦月が俺に笑いかける。

「お前に…チャンバラで敵いつこないからな」

昨日、ふつと脳裏に浮かんだ…あの考え。

睦月との間に間合いを取りながら、俺はじつと…彼を見据えた。

「お前…武士なんだろ？」

「………何だつて？」

「お前は昔…人柱として犠牲になった娘の復讐のために、沢山の間を斬り殺した……違うか？」

睦月はじつと俺の目を見つめ…

高らかに笑った。

「君は…面白いこと言うねえ。俺がもし本当にその…武士？…だと

したら、俺は一体幾つなんだろう？それとも、武士が幽霊にでもな
って…ゲームの為に蘇ったっての！？」

挑発的な睦月の言葉で、かぁと頭に血が上るが…堪える。
やっぱり……考えすぎか。

『あんたの正体、わかっちゃったの』

不知火のハツタリが上手くいったからって…そうそう何度も上手く
はいかないよな。

拳を握り、大きく一つ息をつく。

今は忘れて…気を取り直して、もう一度だ。

そう思った…その時。

「もし俺が…そいつなんだとしたら」

睦月は表情のない黒い瞳で…再びじつと俺を見た。

「そいつの目的って一体……何なんだと思う？」

………目的？

「せっかく興味深い話だから、最後までちゃんと聞かせてもらおう
と思ってさ…そんな奴が、どうしてゲームに参加して…勝ちたいっ
て思うんだろう？」

「そ…そりゃあ………」

そんなことまで…考えてなかったけど。

「そんなの…決まってるだろ！？彼女の恨みを晴らすために………」

「彼女の敵はそいつ…みんな斬り殺しちゃったんだろ？」

………確かに。

「君がそいつだったら…周囲の人間が憎いと思うかな？」

「………そりゃ…そうだろ」

「でも…いくら恨みを晴らした気になったって、何の足しにもなら
ないんだぜ？」

はっとして………

彼の顔をじつと見つめるが………

その瞳から…やっぱり一切の表情は読み取れない。

彼は俯いて、口の端をちよっと上げるようにして…笑った。

まるで…自分のことを蔑むような、自嘲的な笑み。

「自己満足だよ、そんなものは………そいつの自己満足でしかない」

「睦月………お前」

「そんなことしたって彼女が帰ってくるわけじゃないんだ!!」

………睦月。

ふう、と小さくため息をつき。

彼はもう一度…俺をじっと見た。

「さて…おしゃべりはこの辺にしておこうか」

その黒い瞳がきらりと光り…

「!？」

幾筋ものかまいたちが…俺の体を切り刻んだ。

ジャンパーがずたずたに裂け…

腕や足から…ボタボタと血が流れた。

目眩がして…ぐっと足を踏ん張る。

「大したもんだ」

睦月がにやりと笑う。

「これだけ斬りつけられて…まだ立ってられるんだから」

「うう………」

こいつ…やっぱり………強い。

「でもまあ…ここで終わりにしようかな」

周囲を…激しい風が吹き荒れる。

彼はすつと右手を頭上に掲げ………

その指先が…白く光った。

「バイバイ、仁くん…楽しかったよ」

思わず息を吞んで…

激しい風の刃に、両手をかざし…硬く目を閉じた。

ウンディーネ………

ごめんっ………

その時。

俺の手の平が…青い光を放ち。

飛んでくる…風の刃を受け止めた。

「くっ……………」

ズズズツ…と足元が滑り、数メートル後退。

腕には風圧が重く押し掛かり…気を抜くと折れてしまいそうだとぐつと奥歯を噛み締め…

眩しい光の向こうの…睦月を睨む。

ここまでずっと優勢だった睦月も…やや苦しいらしく。白い額に…一筋の汗が流れている。

正直…ここまでやれるとは思わなかった。

信じられない気持ちと…不意に襲い来る恐怖心。

……………どうしても、勝たなきゃ。

ウンディーネ……………

約束したんだ。

こいつを倒せば……………

彼女を元の世界に返してあげるって約束に…ぐつと近づくことが出来る。

それに……………先輩。

『絶対お姉ちゃんに謝らせてやる』

不知火の言葉。

『自己満足だよ…そんなの』

睦月、お前……………

迷ってるんじゃないのか？

戸惑ってるんじゃないか？

自分が『彼女』のいない世界で…色々な人を傷つけながら、ゲームを戦っていることに。

もう……………

「終わりにしようぜっ……………」

お前が何者で…何が目的か…なんて、俺には分からない。
でも、ここできっちり落とし前つけたら……………」

話せよ、全部。

本当は…誰かに話したくて仕方ないんじゃないのか？

俺じゃなくてもいい。

先輩にでもいいから……………」

だから……………」

「終わりだ、睦月！！！」

叫んで、俺が目を見開くと…

青い光が…風の刃をかき消した。

ふと気づくと。

そこはマウンドの上だった。

9回裏、2アウト満塁。

目の前には…強豪チームの4番バッター。

絶対絶対…打たせるわけにいかない。

でも、あの日は……………打ち取られてしまった。

あの試合に勝てたら…願いは叶うと思ってたんだ。

あの頃の俺は……………」

『姉ちゃんの病気が治りますように。奇跡的に病気がすっかり治って、また一緒にキャッチボールが出来ますように』…って。

願いは…叶わなかった。

勝てなかったし、姉ちゃんはまだ…

『仁のコントロールは抜群なんだって…ひかりはいつも言ってたわ』
先輩…そんなこと言ってたな。

姉ちゃんは…信じてくれたんだ。
そう。

『仁のこと、心から信頼しています』
ウンディーネの言葉。

信じろ…仁。

自分自身を……

ぐつと足を踏み込む。

大きく振りかぶると、手の中に…青く眩しい光が現れ。
バッターをじつと睨み。

キャッチャーミットを真っ直ぐ見据え…

投げた。

「行けえ!!!」

暗い空間を…青い光の球が走った。

一直線に……睦月に向かう。

睦月は不意な俺の反撃に、うまく反応出来ないらしい。
はつとした表情で…飛んでくる水の塊を見つめている。

彼の体は……遥か後方に、吹き飛ばされた。

凄まじい音がして…石畳の地面が大きくえぐれた。

土煙が上がり……彼の姿は大きく空いた穴の中に埋もれてしまっ
ている。

「はぁ……」

大きく肩で息をつく。

「すず!!!!」

サラマンドラの叫び声が聞こえ…見上げると。

負傷したシルフィードと、不知火が空から落ちてくるのが見えた。

「ウンディーネ!」

ウンディーネは俺の声に頷き…何か唱え始める。

「こつちも…しまいだ!」

サラマンドラがきつ、とノームを睨む。

彼の手の平から、巨大な炎の塊が放たれ。

ノームの小さな体は、炎に飲み込まれてしまった。

「不知火は…！？」

「仁、心配ありません」

ウンディーネが明るい声で答えてくれる。

見ると…不知火の体は、ウンディーネの青い光に包まれ。

ゆっくりと地面に着地するところだった。

不知火は…何が起こったのか、一瞬理解出来なかったらしい。

呆然と周囲を見渡す彼女と…目が合った。

『私達の勝ちなの？』と…尋ねるような目をしていて。

俺は答えるように…大きく頷く。

次第に笑顔になっていく彼女に近づこうと、一歩踏み出したとき。
地面に空いた穴の中から…

睦月がゆっくりと…体を起こした。

所々体が痛むらしく、苦痛に耐えるような表情で周囲を見渡し。

諦めたようにため息をついて…

天を仰いだ。

「俺達の…勝ちだ、睦月」

どこか清々しさを感じさせる、睦月の笑顔。

9回を全力で投げきったピッチャーのような…そんな表情に思えた。
が……

「だってさ。どうすんの！？」

突然、睦月が誰もいない暗い夜空に向かって…声を掛ける。

「そろそろ姿…見せたらどう？」

姿………？

周囲を囲む俺達のことなどお構いなしの様子で、睦月はふっ…とため息をつき。

「やれやれ………」

呆れたように笑って…髪に手をやる。

「…そういうことですか。俺達は捨て駒ってわけ」

………捨て駒？

どういうことだ。

つまり、他にも……ゲームに関わる……誰かが？

睦月は黙って俯き。

低い声で……つぶやいた。

「………ならいいよ。これにて……交渉は決裂だね」

苛立った様子の睦月の手の平から、大きな風が巻き起こり。

サラマンドラとの戦闘で黒焦げになった、ノームの体を吹き飛ばす。

その小さな体は地面に叩きつけられ、小さなうめき声上がる。

「なっ………お前！？」

動揺して叫ぶサラマンドラを……睦月の冷たい視線が制す。

「君達は邪魔しないで……ここは俺達と彼らの問題だから」

更に、彼の右手からはかまいたちが放たれ。

ノームの体をずたずたに切り裂いた。

彼を倒す……というのではない。

あくまで……痛めつけているといった様子。

まるで……姿を見せない『誰か』に対する……あてつけみたいな。

「む……つき………き……さま………」

傷だらけのノームを蹴り倒し、睦月は吐き捨てるようにつぶやく。

「そこではらくノビてなよ……とどめは後で刺してやるから」

その長身の体がその場からすっと消えた……と思った瞬間。

「動くな」

はっとして……見ると。

睦月は、以前と同じ白く光る刀を……不知火の首に突きつけていた。

「すず………」

「動くなって言ってるだろ？」

叫ぶサラマンドラを睨み……彼は静かに言う。

あいつ………まだ、あんなに余力があったなんて。

「何を……する気だ！？」

睦月は俺の顔をじっと見つめ……

「賢者の石をこちらへ…渡してもらおう」

低い声で……………要求した。

「さあ、どうする？君達は、パートナーの女の子を見捨ててまで…ゲームに勝ちたいのかな？」

「てめえ！！！」

「そういう態度は良くないな」

不知火の細い首に更に刀が押し付けられ…

サラマンドラは悔しそうな顔で…両手を上げて降参の意を表し、一歩後ろに退いた。

睦月はいつもの余裕の笑みになって、不知火に向かって声をかける。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ…悪いようにはしないさ」

「…何が悪いようには、よ！あんたどうせ、とんでもないこと企んでるんでしょ！？石の力で…土橋にすごい精霊呼び出させて、それで…世界征服とか、そんな願いを叶えさせようと思ってるんでしょ！？」

目一杯強がって見せる不知火。

ここまで虚勢を張れる彼女に…正直俺は感心した。

睦月は不知火の耳元で……………小声で尋ねる。

「土橋が…精霊を呼び出す？」

その声は…不知火とすぐ傍にいる俺にしか、聞こえてはいないだろう。

「そっ…そうよ！だって……………あいつはゲームマスターで」

俺の方をちらりと見て。

睦月は何か考えるような顔で……………つぶやいた。

「……………ずいぶんうまく丸め込まれたもんだね、君達も」

……………何だって？

丸め込まれたって…

じゃあ…あいつは一体……………？

「それに、世界征服なんて、馬鹿馬鹿しい…そんな気は毛頭ないよ。俺の目的は……………ゲームの勝敗とか、祈願成就とか…そんな所には

ない」

感情の無い黒い瞳で…睦月はきつぱりと断言する。
だが……

「……………じゃあ、一体」

お前の目的は何だ？と問いかける俺の言葉を、彼は強い視線で遮る。
「けど…他のペアを勝者にすることだけは…絶対に出来無い。だから」

睦月……………

「すぐに石を渡せ！さもなくば…」

厳しい声で怒鳴る睦月は…

一体……………何を求めているんだろう。

その時…不意に聞こえてきた声。

空耳かと思うくらい、遠くに聞こえたその声は…

不知火にも、どうやら聞こえたらしい。

目を輝かせ…彼女は大声で叫んだ。

「お姉ちゃん！…！」

先輩は薄いパジャマの上に、昨夜不知火が着ていたダッフルコートを羽織っていた。

相変わらず、顔色は悪い。

でも、顔が青ざめているのは…多分、そのせいだけじゃ無い。

「睦月さん……………」

悲しそうな声で…彼女は睦月の名を呼ぶが。

一度目を伏せ…何かを決心するように顔を上げて。

じっと彼を見据え…叫んだ。

「ずずを離してください。その子は…私の妹なんです！」

「……………文ちゃん」

睦月が先輩の名を呼ぶ。

それはまるで…叱られた子供のように。

「ゲームっていうのが、何なのか…私は全然わかりませんけど…も

うやめてください！これ以上私の大事な人達が傷つけあうの…見てられないんです！！！」

先輩…………

「メール見ました。あれ…どういう意味ですか？」

彼女は悲しそうな目をしたまま…強い口調で睦月を問いたです。

「この期に及んで…私のこと…からかつてるんですか！？」

「…文ちゃん、それは……………」

「睦月さんは…一体私をどうしようっていうんですか！？すずや仁くんと戦うのに、私を味方につけておけばゲームを有利に戦えるって…そういうことですか！？」

先輩は厳しい声で言いながら…涙を流していた。

「私のこと…利用したんですか！？」

「文ちゃん！？」

「本当は分かっているんです私！自分がどれだけ馬鹿か…あなたのこと、本当に良い人だって…思ってたんです。睦月さんはきっと、私のこと守ってくれる、優しい人だって……………」

「違うんだ、文ちゃん！そうじゃなくて…」

激しく首を振って…睦月は必死で弁解しようとしているように見える。

睦月…………

先輩のこと利用してたわけじゃ…ないのか？

だとしたら…………

先輩は流れる涙をコートの袖でぐいつ、と拭って…叫んだ。

「でも…騙されてたってわかってても…やっぱり私、嫌なんです！あなた…すずや仁くん達と戦うの…見てられないんです！！！」

俺と不知火の身を案じつつも…睦月のことも信じたい。

どっちにも…傷ついて欲しくない。

優しい…先輩らしい言葉だと思った。

睦月は、辛そうな表情で俯き。

刀を持つ腕を…だらりとおろした。

先輩にもらい泣きしていた不知火は、緊張から解き放たれて…その場に座り込んでしまう。

「不知火！」

不知火は俺の顔を呆然と見つめ、青ざめた顔で…大きくため息をついた。

睦月は先輩に向きあい…ぽつり、とつぶやく。

「ごめん……………」

どこか寂しげに…先輩は彼に微笑みかける。

「睦月さん…私……………」

その時だ。

睦月に痛めつけられていたノームが…不意に起き上がり。

両手を大きく、空にかざす。

現れたのは…巨大な岩の塊。

気づいたときには…既に遅く。

その岩は真っ直ぐに……………不知火先輩に向かって放たれていて。

不知火がぎゅっと目を瞑って…叫ぶ。

「お姉ちゃん！！！」

不思議な光景が…目の前に広がった。

真っ白な光が……………先輩の体から放たれる。

目が眩むような光の中、必死で目を凝らすと。

先輩を襲った巨大な岩の塊は…一瞬で粉々に砕け散った。

砂のように細かい粒子が、さらさら地面に落ちていく。

音も無く…スロー再生を観ているような速さで。

これは…何だ？

これは……………そうだ。

この前の……………

気づいたら、光は消えていて…

先輩は、地面にぐったりと体を横たえていた。

「お姉ちゃん!？」

不知火が慌てて彼女の傍に駆け寄り、体を揺さぶる。

「大丈夫!？ねえ…お姉ちゃん!？」

どうやら、怪我はしていないらしい。

周囲を見渡すと…ノームの姿はなく。

睦月とシルフィードの姿もなかった。

「俺…見てくる」

ウンディーネとサラマンドラに告げ、俺は周囲のビル街を駆け回った。

どこにも…あいつらの姿はない。

静かな街に、吹きすさぶ風の音だけが響く。

さっきの光……

不知火が昨日包まれた真っ白な光と…良く似てた。

あいつ自身昨日の事は、何が何だかさっぱりわからないと言っていたが…

あの時、あいつが着てたのは…

先輩のダッフルコートだ。

もしかしたら……先輩にも何か…大きな力があつて。

でも……それは一体…何だ？

しばらく探しまわってみたが…彼らの痕跡を見つけることは出来なかった。

諦めて、みんなのいる広場に戻る。

「ごめん…」

不知火はいいよ、というように首を振って。

携帯のディスプレイを…俺に見せた。

メールは……睦月からだ。

『また明日ここで』

小さくため息をついて…空を見上げる。

「睦月………」

12月24日 その2

疲れた体を引きずって…登校してはみたものの。

その日の授業は、ほとんど耳に入ってこなかった。

帰り道、不知火の姿を見つけて…声を掛ける。

「ゲームのこと、今朝お姉ちゃんにも色々説明しといたわ。巻き込んでしまったのは事実だし、知らないで何か危険なことに巻き込まれても困るから」

コートのポケットに手をつつこんだまま、素っ気ない様子で彼女は言う。

「何か……変わった事、言ってなかったか？」

え？と不思議そうに俺を見て…小さく首を振る。

「『引き分けには出来ないの？』って…聞かれたけど」

「…引き分け？」

「そう。ウンディーネよりずっと激しいわよ、3人みーんな同列で引き分け。あのおっさん次第だと言ってたらさ、『聞いてみたら？』って…きょとんとした顔して言うわけ」

やれやれ、というようにため息をつく。

「私もさあ…どうでも良くなってきた。何か…ゲームなんてなかったらもつと、私達ハッピーになれたような気がしない？」
だつてさあ、と首をコキコキ鳴らす。

「私は全然興味ないけど、有名人と知り合いになれたのよ？お姉ちゃんだつて大好きな『KEIくん』と仲良くなれたんだし…それより何より、精霊なんてテレビゲームの中だけの生き物だと思ってたものに会えて、友達になれたんだから…」

「それ………そもそもゲームが無かったら…出来てないだろ？」

俺の的確な指摘に、不知火は一瞬硬直して………
顔を赤らめて…頭を掻く。

「まあ…だからさ！もう、それでいいじゃない！？って思うわけ。

ほら、今日はイブだし…クリスマスってみんなで平和に楽しく過ごすものでしょ？」

……そう…かな。

まあ……いいか。

今日は部活に参加せず、まっすぐウンディーネの泉へ向かった。

不知火はもうゲームからも睦月からも…興味を失ってしまったみたいだけど。

人柱になった娘と…その仇を討った若い武士。

そいつがゲームに参加して、やろうとすることって…一体何だ？

それに…不知火先輩。

『初めて会った気がしない』ってウンディーネは言ってたけど。

自暴自棄になっっているようにすら見えた睦月を…黙らせた。

あの人は………一体何者なんだろう。

でも…この前のあの…取り乱した様子。

きつとあれは…嘘じゃない。

ゲームのことも知らなかったって…不知火は言ってたし。

ゲームマスター次第…か。

あの土橋って奴………何なんだろうか。

ゲームの審判だと言っていたが、俺の知る限り一回もフィールドに現れたことはない。

白い法衣も本物だろう。

睦月の反応からして…人柱の話も真実のような気がする。

だけど………

『精霊が俺達を利用しようとしてる』…とか。

睦月も…気になることを言っていた。

『ずいぶんうまく丸め込まれたもんだね』

あいつ………

言ってることの本筋は多分…間違っただけなんだろう。

ただ………

小さな嘘を時々織り込むことで…俺達をミスリードしようとしている気がする。

「仁？」

考え込んでいた俺に、ウンディーネが心配そうに声を掛ける。

「あ…ごめん、大丈夫だよ」

「そうですか……」

ウンディーネは神社の石段の、俺が座るすぐ隣にちょこんと腰掛けた。

何故か少し…動揺してしまう。

「元気ないですね…仁は」

「………えっ？」

「ずさんは仁と同じ年なのに、もっと…明るくて、覇気がある感じがしますけど」

ああ…あいつね。

「あいつの元気は人一倍だからな…あんなにいつも元気いっぱい、よく疲れないよなって思うけど…だってそうだろ？元気な時は元気だけど、そうじゃない時はセーブして…そういうもんじゃないか？」

ん…と首を傾げるウンディーネ。

「じゃあ仁は…どんな時、元気なんですか？」

「………どんな時…って」

「セーブしないのは…どんな時なんですか？」

…確かに。

謎が多すぎて、危険なことが多すぎて…

ウンディーネと過ごすこの約一週間は、いつもセーブしてる状態みたいな気がする。

部活も…まあ、任意とは言われてるけど…サボりがちだし。

………そうだ。

「ウンディーネ、ちょっと待っててくれるかな？」

勢いをつけて立ち上がり、俺は家に向かって走り出した。
待って…と呼び止める彼女を、神社の境内に残して。

グローブを手渡すと、ウンディーネは不思議そうな顔をした。

「これ…何ですか？」

はめ方を教えてやって、簡単にキャッチボールの説明をすると。

「私に…出来るでしょうか？」

彼女は眉間に皺を寄せて…不安そうに俺を見る。

「大丈夫！軽く投げるから…取れなかったら無理しなくて良いし」

我ながら、変なことを思いついたなあ…と思ったけど。

意外とこれが…面白かった。

初めてにしては、ウンディーネはなかなか筋が良くて。

「えいっ！」

可愛い声と共に投げたボールは、大きく放物線を描いて…俺の方に飛んでくる。

パシッとグローブに収まる…ボールの重み。

「ナイス、その調子！」

俺がゆっくりした弓なりの球を投げると、慌てた様子でちょこちょこ走り…

ぎゅっと目を閉じて、バンザイみたいな格好で…ボールをキャッチした。

「おいウンディーネ！ボールが落ちてくる時に、目つぶっちゃうと危ないぞ」

「だって…怖いんです」

顔を赤らめて…しどろもどろに言い訳をするウンディーネ。

「大丈夫だって！しっかり落ちてくる所見て、構えるのはここ！おへその所で取るんだよ」

「出来ませんよ…そんなこと」

口を尖らせる彼女は…何だかとても可愛くて。

「えいっ」

投げたボールは…明後日の方向へ飛んで行ってしまふ。

「あつ、仁！？ごめんなさい私っ…」

真つ赤な顔で頭を下げる彼女を見て、思わず嘖き出してしまふ。
「ドンマイドンマイ！行くぞー」

キャッチボールに興じていたら、いつの間にか…日が傾き始めていた。

俺が買ってきたジュースの缶を手にして（精霊ってジュースも飲めるらしい）、ウンディーネはにっこり笑った。

「何だか…とても楽しかったです」

「そっか…よかった」

「仁もすごく楽しそうでしたね」

「…ああ」

キャッチボールをしてみても…

やっぱりこいつは姉ちゃんとは別人なんだよなって…

ごく当たり前のことを…実感した。

ひょっとして、ボール握らせてみたら物凄く上手くて…なんて、想像しなかった訳じゃないから…若干、がっかりしなくもなかったけど。

「私…上手く出来たでしょうか？」

心配そうに聞くウンディーネに…うん、と大きく頷く。

「初めてで、しかも女の子で…あんだけ出来れば上出来だよ」

ふふ、と…少し顔を赤らめ、嬉しそうに微笑むウンディーネ。

俺と同じくらいの女の子らしく、ウンディーネはこんな風に思いきり遊べたことに大満足している様子だった。

喜んでもらえたみたいだし…ま、いいか。

「またキャッチボールしましょうね。そうだ！今度はすすさん達も一緒に」

また……か。

こんな風に…俺はいつまで彼女と一緒にいられるんだろう。

睦月との決着も、近いうちにつきそうだし…

その時が来たら…彼女は元の世界に帰ってしまうのだ。

そんなことをぼんやり考えていたら……どうやら彼女にも伝わってしまったらしい。

急に寂しげな目になって……神社の石畳に、視線を落とした。

「私………何だか………帰りたくなってきました」

「……ウンディーネ？」

「こんな風に……いつまでも、仁と一緒にいられたら………」
ドキンと心臓が……高鳴る。

「馬鹿だな……ウンディーネ………お前……ずっと一人ぼっちで……帰りがかったんだろ？ 家族のいる……元の世界に。だったら………」

切なげな目で俺を見て、彼女はそうですね……と微笑んだ。

馬鹿なのは……俺も一緒だけどさ。

「お前のいた世界って………どんなところだったんだ？」
尋ねると……彼女は懐かしそうに、夕焼けの空を見上げる。

「水が豊かで、澄んでいて……とても美しい所です。水が豊かなのは

……この国も同じですが」

「でも………昔と比べると、かなり自然は無くなっちゃったからなあ」

「でも……仁達の世界も、美しいと私は思います」

何だか……自分が誉められたみたいで、体が少し熱くなる。

「ウンディーネの家族ってというのは……さ」

実はずっと気になっていたのだ。

「やっぱり……水の精霊なのか？ つまり………ウンディーネっていうのはお前個人の名前じゃなくて……みんなの名前なのか？ ……うまく……説明出来ないんだけど」

「私には、母と父と、姉と妹がいます……皆水の精霊で、ウンディーネという名で。つまり………仁の質問にお答えするなら、ウンディーネというのは私個人の名前でもあって、私達全体の名前でもある……ということでしょうか」

姉と妹………か。

弟はやっぱり……いないのか。

「姉妹っていうと…不知火んちみたいな感じかな」

そうですね、と彼女は懐かしそうに笑う。

「お二人はすごく仲が良いですね。それに…とっても良く似ていて」

「……………そうか？」

穏やかで優しい不知火先輩と気分屋な不知火…そんなに似てる気はしないけど。

「ずずさんと文さんを見ていると…何だか懐かしくなります」

……………そっか。

俺は携帯に収められた…一枚の写真を彼女に見せた。

彼女は……………やっぱり驚いたらしく、言葉を失う。

「これ…おれの姉ちゃん。そっくりだろ？ウンディーネに」

まだ声が出てこないようで、目を丸くして、こくり…と黙って頷く。

「むかーしウンディーネに声を掛けたのって多分、うちの姉ちゃんだよ…言ってたんだ、『小さい頃この泉で、妖精を見たことがあるの』って」

「そう…でしたか」

感慨深げに…彼女は大きくため息をついた。

「でも……………」

何故か涙がこみ上げてきて……………

「3年くらい前…病気で……………死んじゃったんだけど…さ」

「仁……………」

こんな風に泣いたこと…友達の前でもなかったのに。

両腕に顔を埋めて深呼吸するが…涙はなかなか止まらない。

姉ちゃんに…教えてやりたかった。

『水の妖精はちゃんといたよ』って…

こんなに自分に似てるなんて知ったら…姉ちゃんどんなに驚くだろう。

それに…どんなに喜ぶだろう。

そう……………絶対姉ちゃんは喜ぶと思うんだ。

そういう人だったから。

ふと。

冷たい手が、俺の額に触れた。

見ると…それはウンディーネの手で。

彼女は優しい笑顔で…俺をじっと見つめていた。

「泣かないで…仁。あなたの気持ちはきつと…お姉さんに伝わって
ると思います。だから」

柔らかい手の触れた額から…体中が癒されていくような感覚。

「ありがとう…ウンディーネ」

涙はいつの間にか…乾いていた。

右手の小指を差し出すと、また彼女は不思議そうに目を丸くする。

「指きりげんまんっていうんだ」

俺に促されて…おずおずと差し出された小指に、俺は小指を絡ませ
た。

「絶対絶対…お前を元の世界に返してあげる…約束するよ」

はつとした顔でじつと俺を見つめ。

目を潤ませて…ウンディーネはにっこり微笑んだ。

『また明日ここで』

睦月のメール通り、あの街に行くために。

俺は夜、家を抜け出して、ウンディーネの泉に向かった。

「ウンディーネ？」

呼ぶが……姿は見えない。

「ウンディーネ！？」

何故か…胸騒ぎがする。

どこに行っちゃったんだろう……

睦月が…また何か、仕掛けてきたんだろうか？

しかし…それだったら俺も一緒に行くはずだし。

何かあったんだろうか？

とりあえず、まだ動いている電車に飛び乗り…約束の場所へ。
ゲームのフィールドにも…ウンディーネの姿はなく。

不安そうな顔で佇む、不知火の姿だけがあった。

「不知火！」

少しほっとしたような顔で…俺を見つめる不知火。

「サラマンドラは…？」

必死な顔で首をふり、ウンディーネは？と訊くが、俺も仕方なく…首を振る。

「どうして…？」

呆然と…つぶやいて。

彼女はぐいつ、と俺の腕を掴む。

「一体…二人はどこへ行っちゃったの？」

しかも。

不知火先輩の姿も見えない…という。

こんな夜更けに行方がわからない…なんてやっぱり…ゲーム絡みしか、考えられない。

「睦月の奴……まさか、また何か」

その時、人の気配を感じて…振り向く。

「お待たせ」

そこに立っていたのは…睦月だった。

不知火がはっとした顔をして…睦月に食って掛かる。

「あんた…お姉ちゃんを…どこにやったの!？」

「精霊達が見あたらないみたいだけど？」

彼は飄々とした様子で…周囲を見渡す。

かつとなつて…怒鳴る。

「お前つ………!？」

「そう怖い顔するなよ…」

なだめる様に笑い…彼は首を傾げてみせる。

「俺も同じ状況なんだから………で、賢者の石はどこにあるの？」

同じ状況って………

そういえば…彼の傍らに、シルフィードの姿はない。

それに………ノームの姿も。

賢者の石……

あれは…ウンディーネが…

困惑する俺達に、そうだろうと思った、という顔をして。

彼は…ぽつりとつぶやく。

「精霊達を持つて…姿を消したってわけ」

「あんだじゃ…ないの？」

不知火が問いかけ……彼は無言で頷いた。

「じゃあ……一体…誰が」

「土橋だろうね、多分」

……土橋！？

「土橋つて……だつて！あいつはゲームマスターで、ゲームの進行には関われないって」

混乱している不知火を見て…彼は静かに言う。

「ゲームマスターの意味を…君達はどうかやら取り違えているみたいだし、それに……あいつはゲームマスターなんかじゃない」

……ゲームマスターじゃない？

あの男…一体。

「炎の精霊を操るのが…不知火すず。水の精霊が…水月仁。風の精霊が…風群睦月。とくれば、土の精霊は……誰だと思う？」

……そうか。

何で今まで…気づかなかつたんだろう？

「土橋…研二郎……か」

「その通り」

睦月は頷いて。

きっぱりとこう…言い放った。

「土橋研二郎…彼は土の精霊ノームのパートナーであり…ゲームのプレイヤーだ」

12月25日 その1

俺達をじつと見つめ、睦月は静かに語り始める。

「君達の話から想像するに…あいつはまず、俺一人を悪者にして、君達に排除させるつもりだったんだろう。そして…君達に『精霊達は君達を都合良く利用している』と吹き込んで…精霊達と君達の間係を悪化させようとしたんだろうね」

そして…俺達から賢者の石を騙し取り、ゲームの勝者になろうとした。

しかし。

「君達と精霊達との絆は想像以上に強くて…君達は彼の言葉に、耳を貸そうとはしなかった。しかも…完全悪に仕立て上げようとした俺に、君達は興味を抱き始めた。俺と君達がこんな形で接触しては…計画はパーになってしまう。だから…別の作戦を考えたい」

「別の作戦って…何？」

恐る恐る訊く不知火に、睦月は難しい表情で答える。

「…精霊達と君達を、強制的に引き離すことさ…ゲームマスターの力を使ってね」

…ゲームマスターの力？

「精霊と賢者の石さえ手元に集まれば、ゲームマスターの力を更に用いて、高位の精霊を召還することも可能だからね。だから…」

「ちよつと待ってよ」

不知火が強い口調で言う。

「ゲームマスターゲームマスターっていうけどさ…あいつはゲームマスターじゃないって、あんたついさっき言っただけでしょ！？それに…百歩譲って、土橋が変な力使って精霊と石を自分のところに集めたんだとして…そのこととうちの姉ちゃんがいなくなったことに、一体何の関係があるの！？」

睦月は彼女を見て、小さくため息をつく。

「まだ…わからない？」

むっとした顔をして、不知火はわかんないわよ！と言い返すが、その話の流れであれば…もしかして。

「先輩が…ゲームマスターなのか？」

「………その通り」

睦月の言葉に…

不知火は呆然とした表情で、地面に座り込んだ。

そして…否定するように何度も大きく首を振る。

「…そんな筈…ないじゃない！？だってお姉ちゃんはゲームのこと、何にも知らなかったのよ！？それなのに」

「精霊の召還…そのトリガーになったのは何か…君達はいいつから聞いた？」

彼女の言葉を遮るように…依然低い声で、睦月は俺に問いかける。

「………キリシタンの娘の………魂が呼び寄せたって」

はっとした顔をして…不知火が言う。

「お姉ちゃんがその…キリシタンの女の子だって言うの？」

「………そうか。」

それなら…色々納得出来る。

『初めて会った気がしない』というウンディーネの言葉も。

それに、先輩自身の不思議な力も。

こいつが…先輩に執着していたわけも。

「おそらく土橋は、彼女をうまく言いくるめて…自分の計画に加担させたんだろうね。『精霊達は皆、土橋の管理下に入るように』とでも言わせたんじゃないかな」

「言いくるめてって…お姉ちゃんはそのこと」

言い返そうとする不知火を…睦月は哀しげな瞳でじっと見つめる。

「………俺達をゲームから引き離す…これ以上傷つけあわないために」

「………そうか。」

「大事な人達に戦って欲しくないって…言ってたもんな、先輩」

「……………だとすれば」

うな垂れていた不知火が顔を上げ…きつ、と睦月を睨む。

「お姉ちゃんが騙されて、あいつに利用されてんのはあなたのせいでしょ！？あなたが私達にゲームなんか仕掛けてくるから…」

「……………確かに」

小さくため息をついて…

睦月は俺達に背を向けた。

「そのことに…反論の余地はないな」

「…ちよつと」

歩き出すその後姿に向かい、不知火が声をかけるが。

「待ちなさいよ！責任感じてるんだったら…」

「彼女は俺が助ける。だから君達は…ここで待ってて」

睦月が歩みを止める気配はない。

「あんたも…シルフィードいなくなって困ってるんでしょ！？だったら…」

「俺の中にはまだ、風の魔力が残ってる。プレイヤー歴が一週間たらずの…君達とは違うんでね」

彼の言う通り、俺も不知火も…精霊がいなければ何も出来ない。

「でも…俺達にも何か出来ること」

「足手まといになるだけだよ。そうなれば…余計に彼女が悲しむ」
…確かに。

だとすれば、やっぱり…

ここで睦月を待つしかないってことが。

「待ちなさい！」

不知火は…依然自信満々に、彼を呼び止めようとしている。

彼女の顔を見つめ、睦月はやれやれという風に溜息をついた。

「……………何？」

この期に及んで、何か策があるとでも言い出すんだろうか。

さすがの不知火も…こいつの言う通りにする他ないと思うんだけど。

不安な俺を見て自信満々に大きく頷き、彼女はジャンパーのポケットに手を突っ込んだ。

「私達にだって出来ることはあるわよ。だって……これ！」
につこり笑う不知火の、手の平にあったもの……

俺は…言葉を失った。

「これ……まさか」

「そう！」

同じく目を丸くしている睦月に、ざまあみろとばかりに舌を出し、明るい声で彼女は言う。

「賢者の石の欠片…の欠片！ウンディーネの分とサラマンドラの分、どっちもあるわ」

「お前……こんなもん…どうやって」

「あのさ、水月…鉱石の性質には『硬い』と『脆い』があるって…中学受験でやったの、覚えてない？」

突然、何を言い出すんだ…お前。

呆れかえる俺に、得意げに片目をつぶってみせる…相変わらず楽しそうな不知火。

「この『賢者の石』は…硬いけど脆い、ダイヤみたいなものみたい」この前、校舎の裏で精霊達と作戦会議をしていた時。

何故かご機嫌斜めだった彼女は、話に全く参加せず二つの石を弄っていた。

太陽の光に透かしてみたり、並べて形を観察したり。

「あの時、境界線でくつつけるなって…サラマンドラに怒鳴られたでしょ？だから、そこは気をつけて、適当な所をコツコツぶつけてみてたのね。そしたら……」

なんと…石が割れてしまったのである。

幸い（というか…）角が欠ける程度だったので、また怒鳴られると思った彼女は…

その場はだんまりを決め込んで、石を机の引き出しの奥深くに隠した。

それが…この石というわけ。

「お前なあ…何でそんな大事なこと……………」

「まあまあ。結果オーライだって！どう！？睦月…私達も一緒に行つていいでしょ！？」

「……………すずちゃん」

「石の欠片を一つにするためには、この欠片も必要でしょ。だから、私達がこうやって持つてたら、土橋の奴石を奪いにここに来るわよ？そ・し・た・らっ？」

「…わかった、いいよ。一緒においで」

ぱつと顔を耀かせて…彼女は俺の顔を見た。

思わず…大きく溜息をついてしまう。

何よ？と不思議そうな顔をする不知火に…

俺は今までずっと思つていた事を…言葉にして伝えることにした。

「俺…尊敬するよ、お前のその…底抜けにノー天気な所」

「初めてシルフィードに出会ったのは、あの…惨劇の後だった」

『力を貸して差し上げましょう』

血まみれの若い武士に動じることなく、彼女は穏やかに微笑んだのだという。

『いつか再び彼女が、この世に生を受けたとき…あなたが隣にいられるように』

懐かしそうに笑いながら、睦月はそんな風に話してくれた。

「ゲームがどうかかも、その時確かに聞いたけど……………俺としてはそんなこと、どうでも良くてさ。ただ彼女にもう一度会えるならつて…それだけだった」

シルフィードが不知火先輩を見つけたのと、『手を組まないか？』と土橋が声をかけてきたのは……………ほぼ同時だった。

「あいつが危険な男だっていうのは…会つてすぐにわかったよ。けど……………ここで突き放して、彼女の身が危険に晒されるようなことがあつては困るからね。文ちゃんはどういう訳か、『彼女』と同じ

誕生日だっと言うし……」

一つため息をついて、不意に厳しい表情になる睦月。

「『彼女』はあんなことがあって……18になる前に命を落としてしまったから……彼女のことが、今度こそ俺の手で守りたいって……そう思った」

「あの……誰にも勝ちは譲れない」っていつのは？」

不知火が訊くと。

彼は表情を曇らせて、黙り込んでしまった。

「……ねえ、ちょっと」

「……『石を一つにすると願いが叶う』って話……精霊達から聞いた？」

顔を見合わせる俺達に……彼は低い声で言う。

「石を一つにして、高位の精霊を召還し……願いを叶えてもらうためにはね」

感情の読めない黒い瞳が……じっと俺達を見据える。

「ゲームマスターの……彼女の魂を捧げる必要があるんだ」
はっとして……

思わず……言葉を失う。

「土橋持っている、精霊使いの残した書物には……全てが書かれている。書物の記述に即してあいつが呼び出した法衣を彼女に着せて、召還の儀式を行う……」

「そうすれば……高位の精霊が召還されて」

言いかけた俺の腕を……不知火がぎゅっ、と掴む。

「お姉ちゃんは……人柱の女の子みたいに……消えちゃうって言うの？」

「……不知火」

彼女は目に涙をいっぱい溜め……睦月の胸倉を掴んだ。

「そんな大事なことを、何でもっと早く言わなかったのよ!? 言ってくれたら私達だって」

「言ったら……信じた？」

「…そ…そりゃあ……………信じなかったと…思う」

ふう、と小さく溜息をついて…睦月は俺達を見た。

「…着いたよ」

それは…都会のと真ん中に建つ、高層ビルだった。

黒い雲に覆われた空に星は一つもなく、ビルの頂上は確認できない。ビルの周囲には不穏な風が吹いており。

遙か遠くに…精霊達の姿が見えた。

「で……………どうする？」

やめるならやめてもいい…とでも言いたげな睦月に、むっとした表情の不知火が怒鳴る。

「決まってるでしょ！？土橋からサラマンドラを取りかえすわ」

「…ゲームマスターの命に反して…あいつがお前んとこに戻るっていうのか？」

「あつたりまえよ！付き合いは短いけど、あいつとの絆は相当固いんだから！！！」

そうでしょ！？という目で、彼女はじつと俺を見る。

不安な気持ちが無いとは…言い切れないけど。

ウンディーネ……………

俺の手で…必ず元の世界に返してあげるって……………約束したんだから。

頷く俺達に、睦月は穏やかに微笑みかけた。

「じゃあ、お互い自分の目的を果たして……………もう一度、この場所で」

秘密を全て打ち明けた後の…晴れやかな表情。

背の高い彼が俺達の頭にぼん、と手を置いたのだけは…ちょっと癢だったけど。

「彼女がよく言ってたけど…『全ては神のお導き』だからね。また…ここで会えるさ」

一歩足を踏み入れたゲームのフィールドは…

灼熱の火柱が幾つも上がっていた。

土人形達は警戒するように、こちらに体を向けたまま動きを止めており。

穏やかな笑みをたたえたシルフィードの群勢がその背後に控え。

一番奥、水の透明な壁の向こう側に……

精霊達の姿が見えた。

『石の欠片をこちらへ渡せ』

サラマンドラの声が直接頭に響いてくる。

彼の赤い目は妖しい光を秘めているように見え……

隣に佇むウンディーネの青い瞳も、一切の感情を失っているように見えた。

二人の横には小柄なノームの姿も確認出来たが……

「シルフィードの……本体が見当たらないな」

こくりと頷く不知火と、背後に視線をやると。

睦月の姿はもう、そこにはなかった。

「あいつ……本当にちゃんとお姉ちゃんのこと、助け出せるのかしら」

親指の爪を噛む彼女に、大丈夫、と頷いてみせて。

大きく一つ……深呼吸をする。

『もう一度だけ言う……』

サラマンドラの厳しい……しかし、一切の感情を排したような声。

『石を渡せ。さもなければ』

「……全力でお断りよ……!!」

不知火が怒鳴ると。

口を噤んだサラマンドラの手のひらに……

大きな炎の塊が浮かんだ。

一瞬怯んだように半歩程後退した不知火だったが……

俺と同様、大きく深呼吸をして……両手を胸の前に掲げた。

現れたのは……シューティングゲームの銃。

それをぎゅっと握り締め……低い声で不知火が俺を呼ぶ。

「行くよ……水月」

俺も両手を左右に広げ… ウンディーネに言われた通り『球体をイメージする』

青白く光る水の塊が手の中に浮かび上がり…

俺はぐつと、前方を睨んだ。

『やる気が… 小僧ども』

臨戦態勢の俺達をせせら笑うように、ノームが言い。

『ならば… 仕方あるまい』

感情の無い… サラマンドラの声。

ウンディーネは依然、感情の無い瞳でこちらをぼんやりと見つめており…

俺は………

そんな彼女に、大声で呼びかける。

「ウンディーネ！ 今行くぞ！！！」

動じる様子は無いが… ウンディーネは、今まで見開いていた目を静かに閉じた。

それが俺には… 何かの意思表示のようにも思えて。

不知火の言うとおりだ。

俺達の絆は……… あいつが思ってるよりずっと固いんだから。

「不知火、気いつけるよ」

「あつたりまえでしょ。あんたもね、水月！」

せーの、で俺達は…

精霊達のいるほうへ、駆け出した。

12月25日 その2

土人形達は数を減らす気配も無く、シルフィードの分身達が起こす風に、幾度となく吹き飛ばされそうになる。

ウンディーネの元には…なかなかたどり着くことが出来無い。

土人形達に水の球を投げつけてみても、立ち上る水柱に遮られて思うようにいかず。

完全に…手も足も出ないような状況だった。

土人形や分身達の攻撃を避けながら、建物の陰に身を潜め、荒い呼吸を整える。

不知火…大丈夫だろうか。

サバイバルゲームよろしく、前回同様ゲリラ戦法をとっているらしいあいつの姿は、さつきからずつと確認出来無いのだけど…

殺しても死ぬ奴じゃなさそうだし、多分…大丈夫だろう。

と………

「!？」

目の前に突然現れたシルフィードの分身が…風の刃を放った。

咄嗟に身を庇うように組んだ両腕が、ざっくりと切りつけられる。

「いつ………」

激痛に耐え、両手を前方に突き出す。

手の平から放たれた水の塊に、分身は体を貫かれ…すつ、と姿を消した。

流れる血に一瞬…意識が遠のきそうになるが。

腕がズキンズキンと心臓の鼓動に合わせて痛むので…

どうやら、そうはいかないらしい。

苦痛に顔を歪めてしまいがら、俺は建物の陰から走り出た。

「ウンディーネ!!!」

遠くに佇む、彼女に向かって呼びかける。

「聞いてくれ!助けに来たんだ!!!」

ウンディーネは無言で、ただ虚空を見つめているだけ。

俺の声に耳を傾ける気配はない。

「先輩がお前に何を命じたのかはわからないけど…俺、お前とこんな所でさよならするのは嫌なんだ！！だって約束したろ！？お前と別れるのは…」

周囲を吹き荒れる激しい風が急に動きを変え、俺の体を斬りつける。まるで…俺の言葉を遮ろうとしているかのように。

ずたずたになったパーカーからは血が滴り、痛みに思わず叫び声を上げそうになるが。

懸命に堪えて、奥歯を噛み締める。

ウンディーネのもとに、この声が…届きさえすれば。

きつと彼女は……目を覚ましてくれるはずだ。

両手をぐつと握り締め…ウンディーネの姿をじつと見据え。

俺は……再び、叫んだ。

「お前と別れるのは、お前を元の世界に送り出す時だ！」

相変わらず虚空を見つめている彼女。

俺の必死の叫びを遮るように…唸る、激しい風。

激痛に耐え、土人形達の攻撃を掻い潜って……

俺は、彼女の前に…

ウンディーネの前にたどり着いた。

俺達を隔てる水の壁。

それは物凄く厚くて…

俺の声が彼女には、届いていないのかもしれない。

腕から血がぼたりぼたりと…地面に落ちる。

ズキンと全身の傷が痛み、思わずその場にうずくまる。

「ウンディーネ………」

水の壁のすぐ向こうに…彼女の姿は見えるのに。

どうして…俺の声は届かないんだろう。

感情のない、青い瞳。

ついさっきまで、あんなにきらきら輝いてたのに。
この壁さえ…無ければ。

俺はポケットの中にある、石の欠片を取り出した。

「壊してやる…こんなもん」

ウンディーネの守りの力は、他のどの精霊よりも強いと言っていた。

…俺に出来るか？

いや……………出来るさ。

短く自問自答して、微かに光る石を右手に握り締め。

大きく息を…吸い込んだ。

石は輝きを増し、濃青の光が俺の体を包み込む。

腕を頭上に、高く上げる。

至近距離だし、いつもみたいにピッチングのフォームをとる必要は
なさそうだ。

「行くぞ」

行くぞ…ウンディーネ。

ありったけの力を込めて。

俺はその、青く光る石の欠片を…

俺達を隔てる…水の壁に叩きつけた。

目がくらむような青い光に、周囲が明るく照らされて。

そびえ立つ水の壁は、厚いガラスの割れるような音と共に…砕け散
ってしまう。

しかし。

「ウンディーネ…」

俺の声に……………

彼女は、全く反応しなかった。

「ウンディーネ!？」

動揺してもう一度、呼びかけると。

彼女は堅く目を閉じ、白い右手を俺の前にかざす。

次の瞬間。

ウンディーネの手から、物凄い勢いで水が噴出し。

俺の体はその水圧で…地面に叩き付けられた。

激しい衝撃が全身を伝い、滝のような水が目の前を覆い…

呼吸が……出来無い。

もう一度、彼女の名を呼ぼうと口を開くが。

口の中に入ってくる大量の水で声が出せず、ゴホゴホ咳き込んでしまふ。

…何でだよ？

どうして……

ウンディーネは相変わらず遠くを見るような目をしていて。

俺の声なんか全然、届かないみたいだ。

やっとここまで来たのに…

やっぱり…駄目なのか。

絶望感か、呼吸がうまく出来無いからか、それとも、出血が多いからなのか。

だんだん意識が…遠くなっていく。

ゲームマスターの命令じゃ…仕方ないよな。

『ルールですから』と、彼女はきつと言っただろう。

本当にウンディーネは頑固で…

本当に…姉ちゃんにそっくりだ。

姉ちゃん…か。

そういえば、ウンディーネが姉ちゃんにそっくりじゃなかったら、俺は…

こんなゲームには、最初から参加しなかったかもしれない。

俺はあいつに…姉ちゃんの幻を見ていたのかもしれない。

姉ちゃんはある日、煙も上げずに綺麗に燃えて。

白くて軽い、小さな塊になってしまった。

…そっか。

大好きだった姉ちゃんに、会えたような気になってたんだ、きっと。
…馬鹿だよな。

もう二度と…会える筈なんて、ないのに。

俺はこのまま……

あの日の…姉ちゃんみたいに……

『馬鹿じゃないの!?!』

………不知火?

いや………違う。

………幻聴か?

『仁!』

きつと…そうだ。

『約束したでしょ?あの時』

約束………

そうだ。

『私の夢、あんたに託したからね』

久々に顔色の良い姉ちゃんにほっとして、沢山の機械に囲まれて、
厚いビニールみたいな壁に隔てられながら、黙って一緒にテレビを
観ていた…あの時。

『…何だよ、それ?』

動揺する自分を抑えながら、なるべく素っ気ない調子で、俺は尋ね
る。

『姉ちゃん、ソフトボールの選手になるんだろ?』

『………そうだけど』

『俺がやってるのは野球なの。夢諦めんのは姉ちゃんの勝手だけど、
そんなもん俺に押し付けんなよ』

そう言っ…しまったと思った。

ちよっと言い過ぎたかな…

でも、正直…そんな悲しい話、聞きたくなかったのだ。

姉ちゃんは…もうあんまり、長くは生きられないかもしれない。

それはなんとなく…俺も……姉ちゃんもわかっていた。

だけど……そんな負けを認めるみたいなこと、言つて欲しくなかったんだ。

姉ちゃんは、少し考え込むように黙つた後。

につこり笑つて頷いた。

『まあ、細かいことはいいいじゃない！野球の選手でもいいわよ』

『……姉ちゃんは？』

『私は……そうねえ』

いつも通りの笑顔だったけど。

その目は少し…潤んで見えた。

『病氣の子供に野球、教えてあげるの。だから…プレイヤーはもう卒業！その夢の続きは仁、あんたに託す』

学校の成績は、下から数えた方が早かつたくせに。

こんな風に言い訳する時だけ……よく頭が働くんだよなあ。

姉ちゃん自身も、我ながらうまいことを言つたと思つたらしく、満足気に頷いた後。

晴れ晴れとした顔で、天井を見上げた。

『私も仁と一緒に…見るわ。夢の続き』

……負けられない。

姉ちゃんの為にも。

それに……

ウンディーネは、姉ちゃんとは違うんだ。

野球出来ないし、もっと頑固だし生真面目だし、それに……寂しがりやで。

強がりだけど…本当は怖がり。

姉ちゃんに似てたからじゃない。

俺は……

あいつと一緒にいてやりたかつたんだ。

あいつの願いを、叶えてやりたかった。

じゃなけりや、こんな辛い思いして…ここに来たりしない。
もう一度、あの笑顔を…

取り戻したいと思ったんだ。

ぐつと拳を握る。

叩きつけるような水の流れの中、懸命にもがきながら。

虚空を見つめるウンディーネを、じつと見据える。

俺は……

全身の力を振り絞って…叫んだ。

「俺は…お前が好きだ！！！」

目の前を覆っていた水流がぴたりと止み。

ウンディーネの青い瞳に…

光が戻った。

唇が微かに動き。

「……………仁」

その声は確かに…俺の名を呼んでいた。

「ウンディーネ！」

抱きしめた華奢な体は、何故か小刻みに震えていた。

「大丈夫か？」

「……………ええ」

微かな声は、一体…何に怯えているんだろう。

土橋の命令に背くことに？

それとも…ゲームマスターの命令に背くことだろうか。
でも……………

「ゲームなんてさ…」

冷たい小柄な体を温めようと、俺は腕に力を込めた。

「もう…どうだっていいじゃないか」

「……………？」

「元の世界に帰れなくても…いいよ。この世界にずっと居たらいい

だろ？」

「……………仁」

手の中の、賢者の石の小さな欠片を握り締める。

「これは…絶対、土橋には渡さないから」

この石は…ほんの小さな一欠片だけだ。

これさえあれば、ウンディーネが消えてしまうことはないのだから。

「お前のことはずっと、俺が守ってやるから。だから……………一緒にいよう」

彼女の小さな手が、俺のジャンパーをぎゅっと掴んだ。

白い頬を、一筋涙が伝う。

「仁……………私……………」

泣き顔で、一生懸命微笑もうとするウンディーネを見ていたら。

何だか俺も、笑顔になってしまう。

「帰ろう、ウンディーネ」

俺の言葉に、彼女は小さく頷き答える。

……………よかった。

ほっとして、思わず大きくため息をついた。

その時だった。

彼女の大きな青い瞳が、かっと見開かれ。

「仁！！！！」

今まで聞いたことがないくらい、大きな声で俺の名を呼び、そして

……………

タツクルするように俺の体を突き飛ばした。

「ウンディーネ！？」

何が起こったのか…よくわからなかった。

地面に倒れ、起き上がった時には…

彼女の体は、無数の礫のような物に貫かれて。

音も無く…地面に崩れ落ちていた。

「ウンディーネ!!!」

気がついたら。

彼女を抱きかかえて泣いていた俺は、いつの間にか…どこか別の場所にいた。

ここは…空が近い。

痛いくらいに風が強くて。

…ゲームの力で、ここまで運ばれてきたのだろうか。そうだ。

あれは……

「土橋!!!」

ノームの力。

あいつの力だ。

高らかな笑い声を響かせる黒服の男に。

歯を食いしばって立ち上がり、向かっていこうとする俺の腕を…
ウンディーネが…震える指で掴んだ。

「じ…………ん…………」

行かないで、と…………彼女の瞳は語っていた。
こわいから…傍にいて。

そんな風に…俺に訴えかけていた。

「…ウンディーネ」

白い服は血で真っ赤に染まっでいて。

頬と唇は青ざめていて。

体はガタガタ震えている。

精霊も…人間と同じように…………死が迫ると、寒さを感じるのだろうか。

「…やだよ……………そんなの」

「じん……………わたし……………」

彼女は必死で、微笑もうとしているみたいだけど…

そんな力はもう、残ってはいないらしい。

俺にも……笑いかけてやる余裕なんて……なかった。

「死んじゃ駄目だ……」

「わたし……も……ね……」

私も仁が好きでした。

彼女は最後の息を吐ききって……そう呟くと。

すうつと……

冷たい風の中に消えた。

嘘だろ？

ウンディーネ……

どうして？

どうしてだよ。

ああ。

これは……

あの時と一緒にだ。

本当に悲しい時……俺は泣けないタチらしい。

姉ちゃんの葬式の時と同じ。

俺は……たった一つだけ。

『どうして？』という言葉に、体全体を支配されて。
動けなかった。

ウンディーネの消えた空間を……呆然と見つめる俺に。

岩で出来た人のような物が、大きな手を差し出す。

ずっと離れた所で、不知火の叫ぶ声が聞こえた気がしたけど。

もう……何がなんだか……俺には全く分からなくて。

微かに青く光る石の欠片は、握力の抜けた俺の手から……岩人形の手
に。

「水月……」

……ごめん、不知火。

声の方に、何とか目を向ける。

地面に横たわる、睦月の体。

夜風にさらさらと揺れる髪。

その体が……動く気配はなかった。

あいつ……

駄目だったのか。

そうか。

彼の頭を膝に載せ。

不知火先輩は無言で、俺を見つめていた。

いつもの優しい光を失った……黒い瞳。

ごめんなさい、先輩。

俺……

助けてあげられなくて。

それに……

ウンディーネ。

土橋は不知火を拘束しており、ピストルのような物を彼女に向けている。

人質を取られて、サラマンドラもシルフィードも身動きがとれないらしい。

一番遠く離れて、土橋の背後の暗闇の中に……ノームはじっと立っていた。

「聞き分けが良くて結構なことだね、仁くん」

土橋の低い声が、夜風に乘って俺の耳を通り抜けて行く。

「さあ、ゲームマスター！君はどうする？」

はつとした顔で、先輩は彼を見る。

「石はこれで全て揃った！そして、君のかわいい妹さんの命は……私の手の中にある」

もがく不知火の体をぐっと締め付けるようにして、彼は銃をこめかみに突きつけた。

「さあ！！！！儀式を行い私の願いを叶えたまえ！！！！」

「あなたの願い事って…何？」

先輩の穏やかな声が…静まり返った屋上に響く。

「…何？」

「まだその事…聞いてなかったじゃない」

はっとした表情で、不知火はバタバタ体を動かしながら、懸命に叫ぶ。

「駄目！！！！お姉ちゃん！！！！」

「おいおい、君は黙っていたまえ」

「うっさいわねえ！お姉ちゃん！！！！こいつの願いなんて…そんなことしたらどうなるか、わかってるの！？お姉ちゃん」

「すず」

彼女の叫びを制する…凜とした先輩の声。

「大丈夫。だから…大人しくしてて」

一体…どういう意図なんだろう。

…先輩のことだ。

ひよっとしたら、自分を犠牲にしても、俺達を助けようとか…

そんな悲しいこと…考え兼ねない。

「私の願い…か。そうだな……………」

土橋は勿体ぶった声でつぶやき、少し緊張したような面持ちで…言った。

「私を……………民俗学研究の権威に」

「……………はあ！？」

不知火が素っ頓狂な声を上げる。

「世界中の研究者がひれ伏すほどの最高の権威を、私の手に……………それが、私の願いだ」

「信じられないわあんた！！！！そんなことの為に、私のお姉ちゃん死なせようっていうの！？それに…あんたのせいで、ウンディーネも…睦月も死んだのよ！？」

凍りついた心に、体に……熱が戻ってくるような感覚。
怒りなのか。

それとも、悔しさか。
よく分からないけど……

不知火の言う通りだ。

こんな奴のせいだ……

「あんた目覚ましたらどう！？そんなちっばけな願い事なんか……」

「黙れ！！！」

握りしめたピストルを強く不知火に押し付け、土橋は大声で怒鳴る。

「お前のようなガキに何が分かる！？」

「だ……からっ……」

一瞬怯んだようだったが、気丈な彼女は尚も反論しようと試みる。

「それはあんたの努力不足でしょうが……」

「違う！」

不知火の言葉に逆上したのか、強く地面を蹴り、駄々をこねるみたいに土橋は怒鳴り続け。

「この業界はな……努力だけではどうにもならんだ！何が真実であるかなど二の次、金や権力を持ったものの言い分が通る……勝ち組はずっと勝ち続け、そこから漏れた人間は……」

悔しそうに唇を噛み、不知火の顔をぐつと覗き込む。

「分かるか！？私は精霊の研究に何十年もの時間を費やしてきた。

その間……どれだけの人間に絵空事と揶揄され、嘲笑われ続けてきたか……お前には想像出来るか！？」

俺と先輩の顔を見て、同意を求めるように必死な声で彼は叫ぶ。

「お前達も見ただろう！？確かに精霊は存在しているんだ！！！！長い眠りから覚めた『精霊の書』は確かに本物だった！！！！だが世間の一体誰が、それを信用すると思う！？だから私には石の力がどうしても必要なのだ！！！！この世紀の大発見を証明し、世界に発信し……今まで馬鹿にしてきた連中を嘲笑うのは……今度は私の番だ！！！！」
……信じらんねえ。

そんなことの為に… ウンディーネは。

……いや。

人の願いなんて、そんなものかもしれない。

プロ野球選手になりたいとか、そんなことだって… チンケな夢でしかない。

でも……

『元の世界に帰りたい』

そんなささやかな願いすら… 俺は叶えてあげられなくて。

俺は……このまま。

先輩のことも、守ってあげられないんだろうか。

暗闇の中、静かに横たわる睦月の姿が視界に入る。

あいつ、きつと… 命がけて先輩を守ろうとしたのだろう。
それなのに……

俺には… 何も出来無いんだろうか。

冷たい空気に、思わず小さく身震いをして。

俺は大きく首を振った。

駄目だ。

こんなところで… 無様に終わってたまるか。

まだ……

ゲームは終わっちゃいないんだ。

立ち上がった俺の前に、大きな泥人形が立ちふさがる。

「そこをどけ!!!」

「そうはさせられんよ、少年」

ノームのしゃがれた声が、背後から聞こえてきて。

急に、体が重くなる。

振り返ると。

何体もの泥人形が、俺の体を押さえつけていた。

振り払おうと懸命にもがくが…

先輩達から遠く離れたこの場所を、全く動けそうにない。

「くっ……………」

「すまんの、少年」

ちっともすまなそうじゃなく、平然としたその声に、俺は思わず怒鳴る。

「お前は何とも思わないのか！？いくら敵だって言っただって…精霊が死んだんだぞ!？」

長い髭を一撫でして、彼はちらりと俺の方に目をやる。

「…プレイヤーの望むことならば、仕方がなかるう」

…何だって？

「じゃあ、お前は…」

「意に沿うか否かは、問題ではない。精霊は、プレイヤーとして選んだ人間の命に従うこと。それがゲームのルールじゃよ」

「そんなこと…納得出来るかよ!」

威勢がよいのう、と愚痴るように小さくつぶやいて。

ノームは、くると俺に背を向けた。

「納得出来ぬというのなら…」

そして…

ゆっくりとした動作で、片手を肩の高さに上げる。

「己の力で…わしを納得させてみよ」

急に…目の前が真っ暗になり。

周囲の泥人形達が、一斉に俺の上に覆いかぶさってきた。

「うっ……………」

背中の骨が軋むような感覚。

胸が圧迫されて…息が苦しい。

冷たい泥に、体温もどんどん下がっていくような気がして。襲い来る恐怖心を……………

俺は必死で振り払い、叫んだ。

「ウンディーネ!」

何故彼女の名を呼んだのかは、自分でもよく分からない。
でも…………

さつき夜の闇に消えてしまったはずの、彼女の気配を。

一瞬、感じたような気がした。

手の平が眩しい光を放ち。

不意に体が軽くなり。

見ると……

無数の泥人形は、青い光の中に溶けていつてしまっていた。
驚いた様子で目を見開いたノームを、じつと見据え。

手の中に浮かんだ水の塊を、高く頭上に掲げる。

「これで……………」

残りわずかな彼女の力の……全てを込めて。

俺は…………

「どうだ!？」

青い光の球体をノームめがけ、投げつけた。

その、一直線に向かった青い光は…………

白い眩い光の中に消えてしまう。

「何だ!？」

『そう老人をいじめるものではないぞ、少年』

どこからか、聞こえてきたのは……年老いた男の、穏やかな声。

『君がそんなにムキにならずとも、ゲームはもうじき終わるよ』

「けど……そんなこと言ったら、先輩が」

『お嬢さんなら大丈夫じゃ』

「……………大丈夫……って」

『ほれ……見るがよい』

白い光の中に立つ、不知火先輩。

一見儚げで……その姿は毅然として凛々しく見えた。

穏やかな中に、強さを帯びた瞳で……一瞬暗い空を見上げ。

よく通る声で……
宣言した。

12月25日 その3

「ゲームを……リセットします」

突風が吹き荒れ、眩しい光が目を刺すようで。
俺は思わず身を固くして、ぎゅっと目を瞑る。
そして……

風の中で見つけた……その大切な手を。
絶対に離すまいと、強く強く握りしめた。

ふと、気づくと……

赤く見えた瞼の裏が、また真っ暗になり。

屋上は元の暗闇の中に沈んでいた。

目が慣れず、周囲の様子はまだよくわからない。
でも……

「………仁？」

よく通る澄んだ声で、彼女が遠慮がちに俺を呼ぶ。

「あの………手、痛いんですけど」

はっとして、思わず一度その白い手を離す。

「あつごめん……つい……強く握り過ぎちゃってた……かな」

顔が熱くなるのを感じながら、笑いながら頭をかく俺に……

ウンディーネは……優しく微笑んでくれて。

もう一度……そつと俺の手を握った。

少し冷たいその手は……確かに本物で。

「一体……何が起こったんだろう……」

俺の問い掛けに、困惑したように首を傾げる彼女。
と……

「……………うおおおお！！！！！！」

少し離れた所で、土橋の叫び声が上がった。

はっとして見ると、彼は半狂乱になって、先輩に銃口を向けている。

「貴様！！！！一体どういうつもりだ！？」

「どういうって……………」

いつ発砲してもおかしくない様子の彼に、怯む様子は微塵もなく。

先輩は毅然とした声で、見ての通りよ、と言いつつ放つ。

「……………私を…騙しおったな！？」

「騙す！？先にそれをやったのはあなたじゃないですか！？」

今までに見たことの無い厳しい表情で、先輩は怒鳴った。

「私はゲームマスターなんです！！！！ゲームマスターとして……………」

こんなゲーム、到底認められません！！！！」

「……………何だと！？」

「人の気持ちを利用して、操って…自分は最後においしいところだけ持っていくなんて、しかも…勝利の為には人の、精霊の命なんてどうでもいいなんて、そんなの…だからリセットしたんです！どうしても願いを叶えたければ、もう一度ノームと契約を結んで、そして他の精霊達から石を集めたらいいじゃないですか！？」

それは……………」

この一週間、ゲームをもどかしい気持ちで見つめ続けてきたのであるう、彼女の心からの叫びに間違いなかった。

土橋は必死の形相で、救いでも求めるようにノームを見るが…

「わしは…下りるぞ」

さっき、俺を挑発したのと同じ、のんびりとした声。

「……………何だと！？」

皺くちやの手から、ぽーんと大きく放られた賢者の石。

放物線を描いて……………」

先輩の手の中に、すんと収まった。

信じられないというように、土橋は目を見開いて怒鳴る。

「……………どうということだ、貴様私を裏切るのか！？」

「裏切る？わしはまだ、貴様とは契約を結んでいない…裏切るも裏切られるも無いわい」

何十年も何百年も、ゲームの中で生きてきた…小さな老人の、悟りきった声。

『ゲームにはもう、何の興味もない』

ノームの迷いの無い表情は、俺にそう訴えていた。

「どうする？すず…」

「どうって………当たり前でしょ！？あんと組むのは私だけよっ」

「よし、上等！」

不知火とサラマンドラが、そんな風に笑いあっている。

俺も、隣に立つウンディーネの方を…そつと見る。

彼女は、嬉しそうに目を細め。

ゆつくりと、小さく頷いてくれた。

「シルフィード？」

よく通る、楽しい睦月の声に…

「はい…睦月」

シルフィードが答え、彼の傍らにふわりと降り立つ。

土橋は動揺したように俺達を見回し………

がくつと地面に膝をつき、うつむいた。

黙り込んで、小刻みに体を震わせる彼に。

先輩は、ゆつくりと近づき。

「土橋…先生？」

座り込んで静かに手を差し伸べ、たしなめるように話し始めた。

「あなたがさつき…おっしゃっていた通りです。精霊は確かにいて

…『精霊の書』は本物でした。たとえ誰もが信じなくても………私

達には…先生の研究が真実だって、ちゃあんと分かってますから」

一つ一つの言葉を大切に語りかける先輩。

「正しいことを言ってる研究者が、信じてもらえないことって…よくあることじゃないですか。長いときを経て、それが真実だってようやく分かってもらえて、そうして名前が残ってる研究者って…世

界にたくさんいるじゃないですか」

ぼんやりと見つめる土橋に、先輩はにっこりと微笑みかけた。
優しく、それに強い…彼女の笑顔。

「私達…応援してますから。どうかこれからも…」

目を見開いて硬直する土橋に…さっきまでの暗い影は、微塵もなく。
彼女の想いは、届いたかに見えた。

……だが。

「………黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ……！」

がばつと立ち上がり、狂ったように叫びながら。

彼は…俺達にピストルを向けたまま、ビルの端に向かって走り出した。

「待ちなさい……！」

不知火の声を遮るように。

土橋は、大きく首を振りながら喚く。

「うるさい……！貴様らのようなガキにはわかるまい……！私の…
私は………」

彼はフェンスをよじ登り、金網ごしに俺達と向き合い。
絶望しきった目で………じつと俺達を見た。
そして。

「………うわあああ……！！！！！！」

今までに聞いたことが無い…身の毛がよだつような叫び声。
ただ…それだけを残し。

土橋の姿は…

ビルの屋上から…消えた。

「………どう……して？」

フェンスの傍に佇み、俯いてつぶやく先輩の肩に…そっと手を置き。

睦月は…厳しい表情で言う。

「ゲームの勝者になるということ…数十年という長い長い年月、あいつはそれだけを思っで、ここまで生きてきたんだらう……生活の全てを犠牲にして、ただひたすらそれだけのために…ね。このゲームに勝ちさえすれば、自分は名誉を手に入れ、生まれ変わることが出来る……そんな風に思っでたんじゃないかな」

「でも……」

口を尖らせる不知火を、真剣な視線で制し。

彼はまた、話し始める。

「あいつはきつと、ゲームに囚われてしまっでいたんだらう……研究を世に知らしめるとか、そんな純粋なものだつたらう最初の目的が……いつの間にかゲームの勝者になる、という欲望にすり替わっでしまっでいたのに……あいつは気づかなかつたのかもしれない」

「……囚われる…か」

思わず口からこぼれた言葉に、睦月は小さく頷いて。

大きく一つ息を吐き、空を仰いだ。

「ゲームの勝者になれないとわかつた瞬間に…あいつは、生きる意味を失っでしまつたように感じたのかもしれない。絶望に全身を支配されて…だから」

何かを思い返すように、ゆっくりと瞼を閉じる。

「土橋もまた…ゲームという虚しい夢に囚われた、哀れな男だつたんだな」

自分を重ねたような、そのつぶやきに…

不知火はちよつと困つた顔をして、救いを求めるように俺を見る。

しばし…沈黙が流れ。

「帰りましよう…一緒に」

先輩が睦月の手をぎゅつと握り、明るい声で言う。

「……文ちゃん」

「睦月さんは、長い長い時間をかけて、私のこと見つけてくれたんですから…」

驚いたように目を見開き。

睦月は少し瞳を潤ませて顔を伏せ…ゆつくりと先輩を抱きしめた。彼女はそれに答えるように、そつと背中の手を回し。

「私はもう…どこにも行ったりしませんから」

母親のように優しい、穏やかな声で…彼に語りかけた。

「だから…ずっと…一緒にいて下さいね」

その時。

ふいに、背後が明るくなる。

はつとして、振り返ると……

そこには……光る魔法円と、白い長い髭の老人の姿。

痩せて皺くちやの顔に、思慮深そうな青い瞳が光っている。

あれはもしかして、さっきの……

きつとそうだ。

それに……

『また…大胆なことを考えたもののう、ゲームマスターよ』

先輩は、初対面の筈の精霊使いの問いかけに、親しげな笑顔を浮かべて答える。

「ええ。リセットしちゃいけないなんて…ルールにはなかったでしょう？」

『ふおおおお…利口なお嬢さんじゃ』

「ただ……」

声のトーンが、急に低くなる。

「プレイヤーを一人失ったことは…誤算でしたけど」

『それは仕方がなからう……』

慰めるような、老人の優しい声に。

不知火が、いつもの調子で噛み付く。

「仕方…なからうじゃないわよ、じーさん！あんたの仕掛けたこのゲームのせいで、私達ただけ大変な思いしたと思ってるのよ!？」
ふおおおお…とのんびりした声で笑い、彼は探るように不知火を

見る。

『しかし…お嬢さんらも命を賭けてゲームを戦っておったのじゃろう?』

「……………だから!!!」

『このような過程が…石を昇華させるには必要だったんじゃない』

「……………昇華!?!」

『左様…』

小さく頷いて、精霊使いは遠い昔を思い返すような目をした。

『偶然とはいえ、このような事態を招いた、禍々しい石を…再び無に帰すためには、どうしてもゲームという過程が必要で…う。しかし、お嬢さんらの言う通り、沢山の犠牲も出るであろうゲームが…実際に Rowe 行われてしまうことを、わしも望んではおらんのだ』
…そうだった。

このじいさんも…好きでゲームを作り出したわけじゃないんだ。

『そんな訳じゃから、極力先延ばしにするため、石を各地に隠したんじゃないよ。長いこと眠りに付かざるを得なかった精霊達には、気の毒じゃったが……………』

彼の言葉に…

隣に立つウンディーネが、寂しそうに笑って首を傾げた。

精霊使いは、張りのある声で先輩に問う。

『して…ゲームの勝敗は如何に?』

ゆっくりと瞬きを一つして。

小さくため息をつき…

先輩は清々しい顔で…静かに言う。

「勿論…引き分けです。ゲームが始まり、どんな形であれ終了する…それが精霊使いさんのおっしゃる『過程』でしょ?」

青い目を丸くして、参った、というように笑う精霊使い。

『…これはこれは、本当に利発なお嬢さんじゃわい』

難しい顔で小さく手を挙げ、不知火が彼に尋ねる。

「願いを叶えるとか…そういうのしなれば、ゲームマスターは消

えなくて済むの？」

彼女を安心させるように、勿論じゃ、と老人が笑う。

『賢者の石が昇華する際に発する大きな魔力を用い、ゲームマスターの命を捧げることで願いを叶える…実際のところは、そういった仕組みでの中』

大きな目を、更に丸く大きく見開いて…

不知火は、大きく両手を天に突き上げる。

「…やったああ！！！」

歓喜の声は、静かな屋上に響き渡るが……

俺にはまだ…気になっていることが、一つあった。

「ウンディーネ達は…どうなるんだ？」

うむ、と小さく唸り。

精霊使いは、四体の精霊を見渡した。

『それは…彼ら次第よ』

「……………彼ら次第？」

「左様。ゲームが終息した以上、彼らは賢者の石から解放放たれることとなる。さすれば、どこへ行くも、何をするも、これからは…精霊達の意味次第、ということじゃよ」

ウンディーネが、ぎゅっと…俺の手を握る。

見ると、青い瞳は…迷いの色を秘めていて。

『帰りたくない』

そんな風に訴えている彼女の瞳を…じっと見つめる。

何て声をかけよう。

長い長い月日を、一人ぼっちで過ごしてきたウンディーネ。

キャッチボールをした時の、はしゃいだ笑顔。

少し冷たくて、柔らかい右手。

離れたくないと…思った。

でも……………

「……………行きな」

「仁……………」

泣くな、と自分に何度も言い聞かせ。

俺は、にっこり彼女に笑いかける。

「だって…約束だっただろ？元の世界に帰してやる…って」

「でも……………」

悲しそうに目を潤ませて…

彼女は顔を伏せる。

「仁は…それでいいんですか？」

「……………俺？」

「…はい」

そんなの……………答えは決まってる。

なるべく重く悲しく聞こえないように、おどけた調子で言う。

「いいわけないだろ？」

「…だったら」

「でも……………いいんだ。精霊は俺達人間より、ずーっと長生きなん
だろ？」

怪訝そうに、小さく頷くウンディーネ。

「だったら…俺は多分お前より先に死んじゃうし、そしたらお前は
また、一人ぼっちになっちゃうだろ？そんなの可哀想だもん」

「……………仁」

「きつと…お前の家族も心配してるぜ？早く帰って、安心させてあ
げなきゃ」

でも…と言いかけて。

彼女は辛そうな顔で…頷いた。

「よし！それでいい」

柔らかい彼女の髪を撫で、笑いながら…

俺は、こみ上げてくる色んな想いを…封じ込めた。

精霊使いの前に立つ、四体の精霊。

最初に口を開いたのは…ノームだった。

「わしは…もう、疲れましたわい」

『ほう…疲れたとな』

ノームは頷いて目を閉じ、穏やかな調子で話し始める。

「四体の中で最長老として、あの本を守っておったが…これまでの長い時の中で…ゲームにまでは至らずとも、石の魔力に魅了され、己の欲望の為に狂う人間の姿を幾度も幾度も見て参った。ちと…疲れましてな」

悟ったような表情を見て…

さっきのことを思い出した。

『それがゲームならば仕方がない』

確か、あいつ…そんなことを言っていた。

『して…どうする？』

「静かに眠らせていただきたい。わしは年じゃて…故郷に帰ったところで待つ者もおらぬ、故郷にずっとおったとすれば、もうとつくに命も尽きておろう」

そこまで言い切つて。

ノームは晴れ晴れとした表情で、俺達の方を振り返った。

「長い月日の中、色々な人間を見てきたが…お前さんらのような、気持ちのいい人間と出会ったのは初めてじゃったよ」

「いいのか！？本当に……」

自ら死を選ぶ…なんて。

そんなのまるで…土橋みたいじゃないか。

けど、彼の決心は固いらしく…穏やかな表情のまま、首を横に振る。「お前さんような、若い者にはわからんじやろうが…ゲームと同じじゃよ。物事には全て、潮時というものがある」

「…ノーム」

説得するようなノームの口調に…それ以上、反論することは出来なかった。

「その…最後の最後に出会った人間が、お前さんらのような人間で…本当によかった」

ありがとう…と、優しい笑顔で笑いながら。

その小さな体は白い光の中に…消えた。

ウンディーネは、精霊使いの前に進み出ると。

振り返って、不安そうに俺の顔を見る。

さつき…ちゃんと約束したのに。

彼女の青い瞳を見ていると…

さつき封じ込めたはずの寂しさに、覆いつくされそうになる。

そんな気持ちをぐっと堪え、笑って…ウンディーネを促す。

『ウンディーネ、そなたはどうする？』

機械的な精霊使いの問いかけは、どこか残酷に響く。

躊躇うように、沈黙する彼女の頬を…

涙が一筋…流れる。

頑張れ…という、心の叫びが通じたのか。

意を決した様子で、ウンディーネは口を開いた。

「元の世界へ…帰ります」

ウンディーネの振り絞った声に、精霊使いは頷いて、右手を空にかざす。

と……

そこに現れたのは、光り輝く、大きな扉。

大きく開かれたその先は、眩い金色の光に包まれており…

どこか…俺の手の届かない、遠い世界へと続いているのだろう。

『では…行くがよい。この先に見える道をまっすぐに進めば、やがて…そなたの故郷へと辿り着くであろう』

はい、と答える彼女の声は…

この上なく、頼りなく響いた。

シルフィードは、いつもの歌うような声で、精霊使いに告げる。

「私も、元の世界へ戻ります」

『では…お主もウンディーネと同じく、この扉をくぐるが良い』
「はい」

小さく首を傾げて答え、彼女はにっこりと微笑んだ。

長い時を過ごしてきた、睦月の願いを叶えることが出来て…
シルフィードはきつと、満ち足りた気持ちでいるのだろう。
そして。

サラマンドラは、今まで見たことがないくらい、大真面目な表情で。
不審に思ったらしい不知火が、甲高い声で叫ぶ。

「待つてよ！サラマンドラ！？」

「何だ？」

「あんた…帰っちゃうの！？そんなの…」

きょんとした顔で、非難する不知火を見つめ。
にやつと笑って、彼は精霊使いに宣言する。

「俺…このまま、この世界に残るよ」

「……………え！？」

目を輝かせる不知火を見て、気まずそうに笑い。

サラマンドラは…更に言葉を付け足した。

「俺、もっと…こいつらの世界を見てみたいんだ」

『…世界、とな』

「そーあの街だけじゃなくてさ、色んな国の色んな人間を見てみた
い。世界中を旅して…俺、どうせあつちに身寄りもねーし、帰りたい
くなつたらなつたで、きつと何か方法はあるだろうしさ」

好奇心いっぱい、彼の瞳に……………

あの、おしゃべりな不知火が…口を噤んだ。

俺達の様子を一通り眺めた後。

精霊使いは、穏やかな調子で、精霊達に声をかけた。

『…左様か。ならば皆、パートナーに別れを告げるがよい。過酷な
ゲームを共に戦い…お主達に命を預けた…この、勇敢な若者達に』

「仁…」

青い瞳が、不安そうに俺を見る。

そんな風に見られると…辛い。

「さつき、二人で決めたことだろ？」

「…………でも」

「大丈夫！すぐに家族に会えて、寂しい気持ちも吹っ飛んじゃうからさ」

「……………そうですね」

目を伏せる彼女を…笑顔で送ってやりたくて。

「じゃあな、ウンディーネ…元気で」

俺は…精一杯の空気を振り絞って…笑う。

一瞬、何か言いかけた後。

彼女は、はつきりした声で俺の名を呼んだ。

「仁……………」

ふう…と大きく息を吐いて。

さよなら…と、呟いた彼女は。

不安と、名残惜しい寂しい気持ちをぐつと堪えるように。

唇を噛み、拳を握って…扉へ一步一步、近づいて行く。

か細くて頼りない…その背中。

『あなたの力が必要です』

必死な声で訴えた…あの時の彼女の姿。

帰りたい…と俯いた、寂しそうな瞳。

水の守りを駆使して戦う、勇ましい表情。

キャッチボールをしながら、楽しそうに笑う、あの声。

それに……………

『泣かないで…』

俺の頬に触れた……………優しい指先。

「ウンディーネ……！」

気づいたら、俺は……………

彼女の名を叫び、駆け出していた。

ぎゅっと強く抱きしめると、一瞬、驚いたように体を強ばらせたが…

すぐにその力は抜け…彼女は、その華奢な体を、俺の腕に預けてくれた。

「仁……………」

腕の中から聞こえる…温かい声。

「ありがとう、ウンディーネ……………お前に会えて、本当によかった」
「……………仁」

「俺…お前のこと、一生…忘れないから」

この先、数えきれないほど沢山の人と出会い、そして別れるだろう。
それでも俺は……………

ウンディーネのことだけは、絶対に…死ぬまで忘れない。

そう……………誓った。

すると、彼女は……………

思いがけないことを…俺に尋ねる。

「人も精霊も……………生まれ変わるのでしょうか」

「…ウンディーネ？」

「命が巡って、また…あなたと出逢うこと、出来るんでしょうか」

彼女はじつと、先輩と睦月の方を見つめ。

祈るように…囁いた。

「文さんと…睦月さんのように……………私も生まれ変わったらまた…
仁と会いたいです」

ウンディーネの言葉に、胸がいっぱいになって…身動きが取れなくなってしまう。

頷くのが…精一杯だった。

俺の相槌に、ウンディーネは嬉しそうに微笑んで。

急にぐつと…背伸びをした。

次の瞬間。

彼女の唇が…俺の唇に触れる。

少し冷たくて、柔らかくて…

ふつと俺の腕をすり抜け、光の扉の方へ駆け出す…ウンディーネ。
その瞬間、魔法が溶けたように…体が動くようになって。

「ウンディーネ!？」

慌てて…彼女の名を呼ぶ。

柔らかな髪を揺らして振り返り、ウンディーネはにっこり微笑んだ。

「約束ですからね！仁……いつか……」

しかし、その笑顔は……

「いつか……また……」

すぐに涙に変わってしまい。

そんな彼女を励ますように、大声で答える。

「約束する……！！いつか絶対、また会おうな、ウンディーネ……！！」

ぐすん、と鼻を噉って、彼女は大きく頷いて。

光の中へ………歩いていった。

精霊使いの姿も……もうそこにはなく。

薄紫に染まった空に、朝日が射し始めていた。

………ウンディーネ。

『いつか……また』

目を閉じて……彼女の笑顔を思い返す。

………そうだ。

輪廻なんてものが、本当にあるのなら。

きつと……また会えるさ。

だから、その時まで俺は………

精一杯、生きていこう。

姉ちゃんの分まで、それに……土橋の分まで。

「水月い？」

背後に響く低い声に、ぎょっとして……振り返る。

「………何だよ、不知火」

「朝っぱらから、何たそがれてんのよ。ここ寒いから、早く帰ろ」

「………」

あまりに聞き慣れた、不知火の文句に。

俺は呆れて……噴き出してしまった。

「……何が可笑しいのよ？」

「いや……ごめん………そうだな、帰ろっか」

先輩達は？と聞くと……

彼女は不快そうに眉をひそめ。

ひらひらと右手を振って、いいのいいのとつぶやく。

「ああいうセイシュン真っ盛りの人達は放つとこ」

…ああ、成程ね。

再会した先輩と睦月を、二人きりにしてあげよう…という訳か。

「お前…実は空気読めるんだな」

感心して思わずつぶやく俺に、真っ赤な顔で怒鳴る不知火。

「馬鹿じゃないの！？そんなんじゃないわよ！」

「本当かあ？…ていうかお前、泣いた？」

「…泣く訳ないでしょ！？あんたと一緒にしないでよ」

「俺！？俺が泣く訳ないだろ」

「…ほんとかなあ？？」

「本当だつての！つべこべ言わずに帰るぞ、不知火っ」

お互いの、寂しい気持ちに蓋をして…

俺達は、出来るだけ明るい調子で言い合いながら。

静かな朝の街へと、歩き出した。

5月16日　　e p i l o g u e

カーテンを開けると、真っ青な空が広がっていた。
思わず…憂鬱なため息をつく。

今日はせつかくの日曜だというのに…

何で、わざわざ学校に行かなきゃならないんだろう。

しかも…それが模擬試験なんだから、尚更だ。

高校生になっても、学校の成績は相変わらずの低空飛行で。

最高学府に現役合格した不知火先輩が、どんだけすごかったのか…
改めて実感する。

朝食のパンをかじっている俺に、母さんがねえねえ、と声を掛けてくる。

「仁知ってた？あの子、彼女いるらしいわよ！」

あの子…って。

母さんが指さしたTVに写っていたのは……

「ああ…知ってるよ」

「そうなの！？なんか、ちょっとショックよねえ」

アイドルに彼女がいることくらいで、何がショックだ…と、思いながら。

少しだけいたずらっぽい気持ちになって、母さんの会話に付き合っ
てやることにした。

「でも、それ…そいつが言いだしたの、年末くらいじゃなかったっ
け？」

良く知ってるわねえ、と感心したようにつぶやいて、母さんは尚も
言う。

「でもね！なんか最近、更にカッコよくなっと思ったと思わない！？やつ
ぱり男の子も、恋すると綺麗になるのかしらねえ」

……………何だそりゃ。

「一般の人なんでしょ？一体どんな人なのかしらねえ。やつぱりす

「つごい美人なのかしら」

「最近綺麗になった……か。」

「前に野球部の先輩が言ってたこと。」

「眼鏡外したらすごい美人だったりして……てやつ、大当たりだったもんな。」

「綺麗な人だよ。それに……優しくて」

「思わずそう答えて……」

「目を丸くした母さんと……目が合う。」

「あんた……KEIくんの彼女知ってるの？」

「あ……いや、まさか……そんな気がしただけだよっ」

慌てて椅子から立ち上がり、肩掛けカバンを手にして。

「いつてきまーす、と叫んで、俺は玄関へ向かった。」

「自転車を飛ばしていたら……」

「なぜか、あの神社にたどり着いていた。」

「……あれ？」

「何でこんなところ……来ちゃったんだろう。」

「ウンディーネと別れて以来、不知火先輩の合格祈願に不知火と訪れたことを除いては、一度も足を運んだことがなかったというのに。」

「一人で来るのは……やっぱりちよつと、辛い。」

「どこから、彼女の明るい笑い声が聞こえてきそうな気がして。」

「この神社は……俺にとって、更にかげがえのない場所になっていた。姉ちゃんとの思い出。」

「それに……ウンディーネとも。」

「あの日の精霊達の戦闘現場は、ニュースによると『不発弾の爆発事故』だったのだそうだ。」

「そして……」

「あの高層ビルの屋上から、姿を消した筈の……土橋。」

「俺達が訪ねていった、あの研究室で……拳銃自殺を図り、死亡したという。」

俺は、野球部の練習があつて行けなかったけど…

『あんな寂しいお葬式、初めてだったわ』

と…不知火は眉間に皺を寄せながら、つぶやいた。

あの日、あいつがわめいた言葉の一つ一つが…改めて思い返され。
ゲームに翻弄された…あいつの分まで。

精一杯生きようと…誓った。

春に正式入部した野球部で、俺は監督に宣言した。

『俺、ピッチャーやります！』

最初は呆れていた先輩達も、コントロールの不安を克服し、練習の成果も徐々に現れ始めた俺を…段々認めてくれるようになってきた。
こないだの練習試合では、先発を任せてくれて。

調子が良かったので、最後まで投げきることも出来て。

結果は、完封勝利。

応援に来た不知火は、あの日と同じ、大きなガッツポーズで喜んでくれた。

それもこれも……

ウンディーネのおかげだ。

ポケットから携帯を取り出す。そして…カメラのソフトを起動する。
ウンディーネと出会った…あの日みたいに。

今日も…何か映るのだろうか。

と……

「サラマンドラー？」

思わず叫んだ俺をぎょっとした顔で見て、彼は…ゆっくりと姿を現した。

「よお、仁！よく俺が分かったなあ」

せっかくおどかさうと思って、隠れてたのに…と笑う。
けど……

「お前…何でこんな所に！？」

あの日から、もう半年近くたっているのだ。

きつと、どこか遠い異国の地にいるとばかり…思ってたのに。

俺の動揺ぶりに気を良くした様子で、彼は胸を張って言う。

「実は…お前に話さなきゃなんねえことがあつてよ」

「…………俺に？」

不知火じゃなくて…俺か？

「実はさ…」

勿体ぶった様子のサラマンドラに、ちょっとイライラしながら続きを促す。

と…………

「ウンディーネから…伝言預かったんだ」

「…………ウンディーネから!？」

…どういう意味だろう。

彼女は今、別の世界にいて…話なんて出来無い筈なのに。

それがさあ、と、サラマンドラは自慢げに腕を組む。

「なんつーか、魔力の関係なのか、何なのか知らねーけど…時々あつちの世界の様子とか？聞こえてくることがあるんだよな。前にも何回かあつただけどよ、今回はかなりはつきり聞こえてきて…」

「それって…………」

何か…よく分からないけど。

まあ…そんなことはいい。

「で…何だ!？」

「ああ、そんなにせつつくなつて!そんなに長い時間は話せなかったんだけどさ」

『私は元気です。いつの日か、あなたに会える日を楽しみにしています』

そう伝えて欲しいと…彼女は言ったのだそうだ。

「なんかよ…せつかくだったら、もつとかわいらしい事言えばいいのにな、あいつはほんとに真面目つつうか、堅いつつーか」

「いや…ありがとう」

…ウンディーネらしい。

伝えたいことが沢山ありすぎて、言い始めたらキリがないから。
結局…そういう他人行儀な伝言しか、残せなかったんだろう。

笑顔になった俺を、不思議そうに見る…サラマンドラ。

「そうそう、シルフィードが『私は幸せです』って、睦月と文ちゃんに伝えてくれってさ」

「……………何だ、それ？」

いや、と怪訝そうな顔で首を捻る。

「あいつらに言えば分かるって。だから伝えてやってくんないかな」

「そんなの…直接会って言えばいいだろ？…っていうかお前、不知火には会ったのか？」

「……………あ」

気まずそうな顔で、頭をかく。

「あいつは……………いいんだ。俺…もう行かなきゃなんねーからよ」

「もう…って、何だよ？」

どうせ…用事なんかなくせに。

「よろしく言つといてくれ。じゃあ、また…」

「ちよっと…待てよ！」

『あいつのことは、もういいんだ』

強がって笑う、不知火の寂しそうな瞳を思い出す。

『いつ会えるかも分かんないのに、そんな毎日毎日思い出しててもしょうがないもん』

俺は、すたすた歩いて行く、サラマンドラの背中に向かって叫ぶ。

「あいつ、お前にすごく会いたがってるんだぞ！？それなのに」

こんなに近くにいて、顔も見ないで行ってしまうなんて…

あまりにも、素っ気ないんじゃないだろうか。

すると……………

振り返った彼の目は…困惑の色に満ちていた。

「すず会ったら…俺、どうしていいかわかんねえし」

「…どうしていいか…って」

「別れんの…辛くなるの…やだし」

…はっとした。

「だから……」

これ以上言わせるのは…何だか酷な気がして。

「分かった…もう言わない。不知火にはよろしくって伝えとくよ」
そう告げると、彼はほっとした様子で…笑った。

「ありがと！けど……俺がこんな事言ってたなんて、すずには言うなよ！」

肩ごしに手を振りながら、サラマンンドラは…

竹林の中に…姿を消した。

「先輩！お久しぶりです」

『仁くん、お久しぶり…でも、どうしたの？』

びつくりした様子の…先輩の声。

どうやら、車の中にいるらしい。

ということは…睦月も一緒なのかな。

サラマンンドラの話をする、声が急に大きくなる。

『サラマンンドラに？』

「何でも、偶然…あっちの世界と繋がって、その…うまく説明出来ないんですけど」

シルフィードの伝言の話をすると…

彼女はほっとしたように、ありがとう…と言ってくれた。

サラマンンドラと二人で首を捻った、あのメッセージ。

どうやら、本当に先輩には伝わったらしい。

なら…良かった。

今度二人で野球の試合、観に来てくださいね、と告げ、電話を切った。

ふと携帯の時計に目をやる。

「やべ…急がなきゃ」

猛スピードで自転車を走らせていると…

まだ半分寝ぼけているような、ふらふら歩く不知火の後ろ姿が見えた。

「不知火！」

彼女は振り返り…いつものように、不機嫌そうな顔で悪態をつく。

「何？あんた…遅刻？」

「馬鹿、俺が遅刻ならお前も遅刻だ！それより…」

サラマンドラに会った、と言うと…彼女は目を丸くした。

だが、彼とのやりとりの一部始終を聞かせ、一息ついた俺の肩を…不知火は思いつきり掴んで…怒鳴る。

「あんた…何であいつ、ここに連れて来なかったのよ！？」

彼女のもっともな苦情に、気まずい思いで口ごもる。

「いや…それが」

「ったくもお…あんたもあんなにだけ、サラマンドラもサラマンドラよ！ねえ、あいつ…今どこにいるの！？神社に行ったら私も会える！？」

目を輝かせる彼女に…話すのはちよつと、勇気が要った。

「ごめん、多分…もうあいつ、どっか行っちゃったと思う」

「……………えええ？何でよおもう、あの馬鹿」

寂しそうな顔で、憤慨した声を上げる不知火に…

つい…口を滑らせてしまう。

「お前に会つと……………別れんの辛くなるからって言ってた」
と……………

彼女はぽかんとした顔で…俺を見る。

「『俺がこんなこと言ったなんて、すずには言っただけ』って…言われたんだけど」

すると…不知火は。

大きく深呼吸して、にっこり笑って頷いた。

「分かった！私も聞かなかったことにしてあげるっ」

俺とウンディーネと一緒に。

こいつとサラマンドラは…パートナーだったのだから。
きつと…あいつの気持ちが伝わったのだろうと思う。
そして……

腕時計に目を遣り、素っ頓狂な声を上げる不知火。

「あ、やっぱーい遅刻しちゃう！！！！ちよつと水月！後ろ乗っけて
！！！！」

「あー？何だよお前…重い」

「うつさい黙れ！！！！」

さつきまでの、聞き分けのいい様子はどこへやら。
相変わらず…忙しい奴だ。

風を切って走り始めた自転車の後ろで。
ふいに不知火が…あつ、と声をあげた。

「…どうした？不知火」

一瞬…間があり。

「…んーん、何でもない」

彼女は楽しそうに…答える。
相変わらず…変な奴。

こんな所、クラスの奴らに見られたら…冷やかされて大騒ぎだろう。
そんなの…不本意この上ない。

自転車の後ろに乗せるんだったら…やっぱり。

『いつの日か、あなたに会える日を楽しみにしています』

彼女の笑顔が脳裏に浮かぶ。

そうだな。

いつの日か……

「ねえ水月！？」

「…何だよ？」

不知火の明るい声が、五月の青空に…響き渡った。

「水月……春だねっ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0520j/>

GAME -jin-

2010年10月10日17時10分発行